639
66

0054590000

0054590-000

639-66

北蝦夷秘聞

能仲文夫・著

北進堂書店

昭和8

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

8.9.6

新聞記者

跡足のメンタル太樺

日田太樺
新聞記者

龍仲文夫 著

樺太廳鐵道事務所長
大島忠康氏序

王子製紙豐原工場長
本下又三郎氏序

北蝦夷秘聞

（樺太アイヌの足跡）

樺太日日新聞記者
能仲文夫著

樺太廳
寄贈本

昭和八年四月一日
帝國圖書館

639-66

序

樺太は昔北蝦夷といつて、松前の奥、五穀も出來ない、人も住めない、神秘の孤島として、昔から異國扱ひされて居た丈けに、土着民族の間には、情緒の濃厚なる中に不可解奇異極まる秘聞や、傳説も澤山あつたであらうに、今日までこれに關する文献が乏しかつた處から、ただ昔の樺太は神秘の島としてのみ想像されて居たに過ぎなかつた。

然るに今回樺太日々新聞記者能仲文夫氏が「北蝦夷秘聞」なる書を公にせられたことは、全く樺太認識の友たる鄉土的文献であつて、稀に見る殖民地秘史的讀物であることを信じて疑はない。

抑々吾が樺太が領有後交通の開發に依つて、著しく面目を一新したる今日、數百年の昔を辿つて秘話傳説を調べることは、確かに難事中の難事であると思ふ。本書を一讀すれば必ずや著者の辛苦の程を窺知することが出來る。余は斯の書の一般より歡迎さるゝことを期待して止まない。

昭和七年十二月下澣

大島忠康

序

友人能仲文夫君、北蝦夷秘聞の稿を示し私に序を求められた。一体私は序文など書く柄ではないが、例の彌次氣分で閑日を窃んで見た、中々面白いつい引込まれて知らず〳〵讀み切つた。そして由來史實的に無味乾燥とされた樺太に、久しく待望した此種の著書が、遂に我能仲君によつてトップを切つたなと直感した。その盛られた内容は樺太探險秘話から始まつて、領有直前の樺太迄二十四章、樺太開拓四百年史、海豹島海賊戰物語り、白主奇聞、日持上人遺跡、プズスキー教授後日譚等々興味津々たるものがあり、更らにアイヌ對オロッコの超時代的戰爭、流刑露人の兇暴物語り、樺太監獄秘話、日本女とアイヌ青年の悲戀情史等々宛然神秘と情熱の渾然たるカクテルがあり、雪の曠野に茫々數百年、倭人、露人、アイヌ、オロッコ等々數種族の爭鬪、興亡の足跡を辿り宛として、史實と傳說と夢の繪卷物である。

聞く處に依れば著者は二ヶ年に亘つて、樺太に關するあらゆる文獻を渉獵し、更らに島内各地を巡つて具さに史實を考證し、時に旬日酋長の家に据り込み、妙齡のピリカメノコの純眞なスペシャルサービスを受けて研究に沒頭したとやら、以つて著者の熱が窺はれる。

何處を讀んでも夢の樣な事實であり、アトラクチブで面白く筆致も又モダーンでシークで、肩が凝らず此種の著書としては、正に著者にその人を得て居ると思ふ。樺太に住む人は勿論、樺太に關心をもつ程の各階級の人士には、尠くも一讀の價値はあらう、敢て薦める所以である。

一九三二年師走

窓外鈴谷山麓詩を含むの日

於豐原寓居　木下又三郎

著者を佐けしアイヌの人々

右より内藤酋長、木村トテコロアイヌ、酋長の娘おこうさんと著者

自序

樺太の歷史研究に關しては從來幾多の刊行書はあるが、併しそれらは何づれも表面的のものばかりで、これに對するに、裏面の歷史と云ふものが調べられてゐなかつたやうである。例えば、それらの研究家は、ちやうど町で云ふならば、表通りを歩いて、裏通りや小路を歩かなかつたとも云へるのである。もしそれ、町を見物するにしても、大通のみでは、眞にその町の姿を見ることが出來ない。かゝる意味に於て、最初私はアイヌの研究に手を染めたのであるが、その後これに連鎖して歷史を調べなければならなかつた。調べて行くうちに、アイヌ達から幾多の物語りを聞かされて、私は知らず〳〵裏通りや小路を歩くやうになつてゐた。そして、そこには未だ人に知られぬ非常に興味あるものが、秘められてゐたことを發見したのである。私はアイヌを研究する傍ら、どうかしてこれらのものを、樺太の裏の歷史として忘れぬうちに纏めて見たいと思ひ立ち、約二年前よりアイヌの古老達に就て、その記憶を辿り、これに對する文獻を照し合せて、筆をとつて見たのである。なにしろ、全然

文字と云ふものを知らぬ古老達を相手にするので、これだけ纒めるのにも容易なことではなかつた。中にはこれは傳說ではないかと思ふ節も多々あつたので、それらは別の機會に傳說として讓ることゝし、主としてこれは事實だと云ふ自信のあるものゝみ載せることにした。兎角事實物語りと小說とは混同しやすくなるので、なるべくこの領域を越さぬ程度にする爲、出來るだけ文も紛飾することを避けたので、中にはぎごちない節もあると思ふが、その邊は諒とされたい。まだ〳〵不完全なものであるが、更に調査補足して、他日の機會に稿を改めたいと思つてゐる。編輯も物語りとする處から年代の順序を追はなかつた。なほチエホフのサハリン紀行は、今は既に絕版となつて居り文獻としても貴重なるものと思つたので、特に加へる事にした。本紀行は曾つて樺日紙上にも掲載されたが、更にそれより詳細を極めたものである。

最後に本書世に出ずるに當り先輩として畏敬する鐵道事務所長大島忠康氏、王子會社豐原工場長木下工學士に序文を頂き、亦アイヌ酋長內藤惣吉、木村トテコロアイヌ、アイヌ研究家菱沼右一、小林金藏、松田清作の諸氏より種々御指導を賜つたことゝ、更に本書の題字は島津健一郎氏に裝幀は片瀨徹氏に煩したことを深く感謝する次第である。

一九三三年一、二〇

軒下の氷柱をみつめて

於 樺日社樓上　能仲文夫

目次

前波蘭大統領
現同國陸軍大臣 を兄に持つ

盲目の老メノコは泣く …… 一
今もなほ白濱のアイヌ部落で死んだ夫の歸りを待つてゐる

白主の樺太開拓記念碑 …… 一九
アイヌ酋長オケラの功績、珍無類のアイヌの服從

海賊船アリユート號 …… 二七
露國船長とお光の戀物語り、眞岡の高臺に今もなほ石碑が淋しく建つてゐる

樺太開拓の歌 …… 四一
たんぱもしりの歌、アイヌ懷柔に効果

囚人の兇暴とアルコール …… 四五
馬群潭村に於けるアルコールの悲劇、美人の人妻無慘にも虐殺さる

日持上人の遺跡……五一
アイヌの口碑に依る上人の事跡物語り
海馬島發見物語り……五五
アイヌ夫婦が漂着、信じられてゐる神の島、島に海馬が無數に棲息
良音問の木碑物語り……五九
海賊の巣窟海馬島、露人海馬島襲撃、日本人四名虐殺さる、義俠アイヌの功績
悲しみは殘る北名好の海岸……七三
失戀に泣き死んだアイヌとメノコの悲戀
愛郎海岸の慘劇……八一
露人六名虐殺さる、アイヌ親子の最後
樺太開拓四百年史……八七
松前藩の樺太經營、露國の樺太侵略、呆れた松前の暴政
遠淵對富内アイヌの戰爭……一一〇
戰ひに絡る悲戀物語り

アイヌの復讐譚……一一六
富内村の熊祭りの慘劇、メノコ八名虐殺さる、露人十六名をみな殺し
留多加に於けるアイヌの一大戰爭……一二一
白樺の鎧を着た西のアイヌ、留多加アイヌ慘々に敗北
樺太アイヌ滅亡史……一二六
減少の最大原因は？　二千人瞬く間に死亡
樺太監獄秘話……一三三
流刑殖民で開發す、宛然地獄島となる、女囚は特別待遇、惰落せる官憲の生活
四十五年前の南樺太……一四五
（チエホフのサハリン紀行）當時の眞岡、大泊、豐原、榮濱其他各部落の狀況
多來加の戰爭……一七三
アイヌ對オロッコの爭鬪、今もなほ遺跡がある
埋もれた國際美談……一七九
日本の軟弱外交、高井通譯の功績

前領統大蘭波
現同國陸軍大臣を兄に持つ

盲目の老メノコは泣く

今もなほ白濱のアイヌ部落で
死んだ夫の歸りを待つてゐる

□□孫を抱く盲目のメノコ□□

海豹島海戰譚……一八六
島を狙ふ四隻の海賊船、俄然島は鮮血に彩らる、島に眠る十四の魂

樺太探險秘話……一九二
探險者の苦闘、外國人の探險家

遠淵湖畔の家屋戰……二二三
囚徒遠淵に百名上陸、六百の漁夫俄武士に、決死隊を組織し亂入

領有直前の樺太……二二七
川西幸八翁懷舊談

（終）

地獄の島、サハリン島

この物語りを述べるに當つて、露領當時の樺太の事情を一通り記さねばならぬ……

幾多の先人が血みどろになつて闘つた樺太の地も、明治八年露國との間に、千島樺太の交換條約が成立し、遂に樺太は露國の領有する處となつたが、政府は先づ樺太を開發するには囚人の手に依らねばならぬとして、明治十四年コルサコフ（楠溪町）に監獄を設置し、重罪犯人をどし〳〵護送したものであつた。然し囚徒に依る樺太開發は完全に失敗であつた、彼等は出獄しても殆ど眞面目に農事に從事するものとてはなく、日夜酒、賭博、果ては强盜殺人等に日を送り遂に樺太は文字通り地獄の島、囚人の島と化したのであつた。こゝに於て露國政府は、始めて囚徒に依る開發の失敗を悟つたのであつたが、然し既にその時はどうにも方法がつかなかつたのである。如何にして彼等を教化するか、これが殘された問題であつた。政府は百方考へた揚句、先づこれ等兇暴なる囚人を、訓育するにしかずとして、教化に當る第一候補として擧げられたのは、當時モスコウ大學の教授で人類學者として知られた、ポーランド人理學士、プリードスキー氏（アイヌはプズスキーと呼んでゐる）であつた。教授は政府の命を奉じ、一八九六年（明治二十九年）の春、囚徒等を輸送する義勇艦に乘じて樺太に渡つたのである。

教授はその後アイヌのメノコ（アイヌ語で女）と結婚して數年間同棲生活をし、子まで出來たのであつたが日露開戰と同時に彼の實兄ビルスッキー氏の指導する、祖國ポーランドの獨立運動に參加するため、單身歸國したのである。後に取り殘された教授の妻はその後行方不明を傳へられてゐたが、端しなくも樺

太のアイヌ部落の一隅に盲人となつて、今もなほ生存してゐることを發見した。

以下メノコの語るのをつなぎ合せて次の如きものが出來上つた。

この一篇が義兄である前ポーランド大統領、現同國陸軍大臣、ビルッスキー氏にメノコが健在で居ることが知れてくれゝば筆者の喜びとする處である。

囚人の船、コルサコフ港へ

北國の春は遲い。四月だと云ふのに亞庭灣一帶には未だ厚氷が浮漂して、肌寒い風が頻りに吹いてゐた。能登呂岬を迂回した一隻の軍艦は、多數の囚徒を乘せていまコルサコフ（楠溪港）をさして、針路をとつてゐる。艦は時折浮氷に打ち當り、ぎしぎしと異樣な響を發してゐた。頭髪を半分だけ刈り取られ、剩へ右手に鍵までかけられた囚徒は、コソ〳〵と各自の荷物を取りかたづけてゐる。彼等の顏はたゞでさへ物凄いところに、頭髪の半刈は殊更にその凄相を一層險惡に思はせた。ちやうどそれはブチ色の犬の子が、グヨ〳〵うごめいてゐるに似てゐた。

——もう間もなくコルサコフだ。ぐづ〳〵せずに早く下船の用意でもしろい！——

看守は一人の年老いた囚人の横面をいやといふほど撲りつけた。老人はよろ〳〵として床の上に力なく打ち倒れた。他の囚人達はこの哀れな老囚徒などに構ふともしなかつた。

コルサコフに上陸した露國の囚人達（明治三十年）

——老ひぼれ奴、まだ愚圖々々してゐやがる、だから叩きのめされるんだ。体が悪い、聞いて呆れらあ、チェッ——

赤髯をぼう〳〵と長く伸して、囚徒よりもつと人相のよくない一人の看守が、つか〳〵と老人の側に寄つた。そして、鞭を振つて處構はず撲りつけ、さらに靴で力まかせに腰のあたりを蹴りつけた。老人は手足を縮めて、コロ〳〵と床の上を轉つた。看守は大聲を擧けて笑ひこけた。

こうした荒くれ看守達の中にあつて先生と呼ばれてゐる中年の紳士があつた。看守達はこの紳士の姿を見ると、怖いものにでも觸れるやうにして遠ざかつた。紳士は、足腰たゝぬこの老囚人を勞りながら、ポケットから藥さへ出して與へたのである。老人は早や目に

感謝の涙さへたゝへ、すゝり泣いてゐた。

一体この紳士は誰であらうか……。當時露國政府が出獄囚徒訓育の爲に樺太へ派遣した、モスコウ大學の教授ポーランド人、プズスキー氏であつたのである。教授は甲板上に立つて、近づくコルサコフの町を雙眼鏡でじつとみつめてゐた。教授の眼に映じたサハリン島（樺太當時の露名）それは鬱蒼たる森林と流刑植民の家屋であつた。

——俺はこの島で囚徒達と死なう、それが俺に與へられた任務なのだ——

いつしか教授の顏には悲壯なる決心の色が漲つてゐた。

やがて軍艦はコルサコフの港に入つた。二百の囚人達は『下りろ』の命令で、コルサコフの濱邊へと揚げられたのである。其處には獰猛な顏をした露國官憲が、ピストルを手にして待ちかまへてゐた。囚徒たちは一人々々嚴重なる身体檢査を受けて、コルサコフの監獄へと送られたのである。教授は監獄長官から差向けられた馬車には乘らうともせず、默々として監獄の門をくゞつた。

それから約半年教授は監獄内で、數多の囚徒と起居をともにし訓育の任に當つたのである。

プズスキー氏の囚徒訓育

當時樺太各地には出獄者が、至る處に村落を形成して生活を營んでゐた。教授はこれらの囚徒を

教化するために九月の下旬、コルサコフを發して、殖民部落訪問の旅に上つたのである。その日は空はどんよりと曇つて、今にも雨になりさうな氣配であつた。教授は身仕度をとゝのへ、コルサコフを後に榮濱に向つた。途中露人の家屋があれば、訪れては懇ろに慰めの言葉を與へた。けれど彼等の大部分は眞面目に開拓に從事するものとてはなく、政府から農事に使役するために貸附を受けた牛や馬までも殺して食つてゐた。食がなければ他人の家屋を襲つては、食糧品の掠奪をやつてゐた。

教授はミツリヨフカ（中里）を通つて、ウラジミロフカ（現豊原舊市街）に着いた。こゝで暫らく彼等と生活を共にしたのである。ウラジミロフカにも五十戸程の流刑囚徒の家屋があつた。

或る夜教授の隣家で、四五人の露人達が車座になつて、賭博を開いてゐた。遂に金の分け前から、彼等同志の激しい爭ひとなつた。哀れ一人の老人は腹部を刺され、あけに染まつて打ち倒れたのである。露人達はその死骸を無雜作に土間の隅に轉がして、何ごともなかつたやうに再び賭博を始めた。教授はこの光景を目擊して、更に一層囚徒教化の決心は固められて行つたのである。かくてプズスキー氏は全島の囚徒部落を隈なく訪ねた。或るときは兇暴なる彼等の手にかゝつて裸にされ、薄氷の張つめてゐる川へ投げ込まれて殺されやうとしたことすらあつた。

やがて冬も過ぎ春が訪れた。プ氏にとつては、僅か一年ではあつたけれど、その苦しみは一方ではなかつたのである。

プ氏とメノコの戀

かくてプ氏が全島を跋渉して、相濱のアイヌ部落に入つたのは五月の初旬であつた。當時相濱には樺太アイヌの總元締めとまで云はれた、木村バフンケアイヌが住んでゐた。彼の偉令は全島のアイヌ達を壓してゐた。プ氏はこのバフンケ酋長の好意に依り、こゝに暫く逗留することになつたのである。そしてプ氏のアイヌ研究の第一歩は始められたのであつた。

酋長には一人の美しい娘があつた。彼女の名はシンキンチヨウと呼ばれてゐた。まだ十八になつたばかりの小娘ではあつたけれど、年よりも大人びてゐた。父のバフンケは目に入れてもいづくない程娘をシンキ、シンキと呼んで可愛がつた。シンキは村のメノコ達とはくらべものにならぬ程、美しくそして利口であつた。若者達はビリカメノコ（美しい娘）だと云つて、彼女を中心にいつも朗らかな話題に花を咲かせてゐたのである。

こうした噂の中にあつて、シンキは何時も、眞面目によく働いた。そして、プ氏の身の廻りまでも何くれとなく世話をしたのである。

——俺はシンキを愛してゐるかも知れない——

教授の胸に湧いたのはシンキに對する愛情であつた。

——モスコウつてそんなに美しい處ですか、私も一度行つて見たいと思ひます——

彼女は何時もプ氏の側に寄り添ふて、まだ見も知らぬ露西亞の話をきかされるのが、唯一の樂しみであつた。そして、プ氏はシンキからアイヌの言葉を聞き、それを辭書にするのが仕事であつた。彼女は露人と見れば、誰もアイヌ達を虐ける惡者とのみ思つてゐたが、今始めて一人の親切な露人をこゝに見出したのである。いつしか彼女の心に燒きつけられたのはプ氏の姿であつた。それは戀と名づけるには影薄いものであつたけれど、自分達より利口な人、偉らい人、さう想へば想ふほどプ氏がいとしかつた。二人の間は日一日と親しくなつて、それがやがて、はつきりと戀に變つて行つた。

その夜は星がきら〳〵と輝いて、空は黑水晶のやうに澄んでゐた。波打ち寄せる濱邊の小砂を踏みしめて愛を囁く二人の姿があつた。

——結婚してもきつとあなたは、私などのやうなメノコはきらいになります、そのときの私の悲しみ、私は結婚しない方が幸福かもしれません——

シンキは下うつむいて悲しさうに言ふのであつた。

——俺には妻も子もない、露西亞に歸つても待つてくれる人はないんだ！　淋しい生活、それを救つてくれたのお前だ。なんで可愛いお前を棄てることが出來やう——

力强く言ひ終つたプ氏はシンキの手をしつかりと握つた。

——可愛いメノコだ。親切にしてくれるこの娘、俺はこの女を棄てることは出來ない。結婚しやう！——

彼の心に叫んだのはこの眞實の言葉だつた。それは旅のつれ〴〵を慰める戀ではなかつた。土人研究は眞に彼等と生活をともにする處まで喰ひ入らなければならない。

——囚徒の訓育も俺の仕事、だが、打ち萎れて行くアイヌの生活、それをもつと智識的にしてやるのも俺のつとめかも知れない——

彼はさう思ふと無性にシンキがいじらしかつた。しつかりと彼女を抱きしめた教授の手は、いつになく力がこもつてゐた。

狹い部落に二人の間はいつしか知れ渡つてゐた。美しいメノコを異國の人にとられた、さう思ふと彼女を慕ふ部落の若者たちはプ氏を怨んだ。けれど「親切なロスカイ」で通つてゐる彼に對しては、怨を口にする者とてなかつた。父バフンケも熊獲りの歸り道樂しさうに語つてゐる二人の姿を見たことが幾度もあつた。そんなときには酋長は見て見ぬ振りをしてゐた、寧ろ酋長の顏には喜びの色さへ漂つてゐたのである。

——いとしい娘、しかも酋長の娘だ、なんで異國人の妻とすることが出來やう——

バフンケの妻は異國人であるプ氏との結婚には贊成はしなかつたが、いぢらしい娘の姿を見ては、强く反抗する氣にもなれなかつた。

それは秋も漸く深くなつて行かうとする九月の下旬、全部落民が集つて茲に盛大な結婚式は擧げられたのである。花婿であるプ氏は三十才、シンキは十八才であつた。

目覺たメノコ同族に呼びかく

その頃相濱の隣村榮濱にはコルサコフの監獄で刑を終えた露人が、續々と集り殖民部落をつくつてゐたのである。併し彼等は依然として、眞面目に農業に從事しやうとはせず、日夜酒、賭博、果ては强盜、殺人等を公然とやり、常に血醒い爭鬪を繰り返してゐた。プ氏はどうしてもこれら露人の氣持を和けるには子弟の敎育が必要であるとして、コルサコフの監獄長官より二千餘圓の金を出させ、部落に立派な學校を建て、プ氏が校長となつて子弟敎育の任に當つたのである。勿論シンキは夫の片腕となつて、內助の功を立てゝゐた。

その頃シンキは夫の訓育を受けて、愈々利巧になつて行つた。プ氏が不在であれば、代つて露人やアイヌ達に敎へたのである。彼女は早や簡單な算術や露語までも敎へられるやうになつてゐた。

囚徒達は次第々々にプ氏夫妻の感化を受けて、榮濱村だけは決してアイヌ達を虐げることだけはしなかつた。學校は露人達の子弟を敎育するのが目的ではあつたが、兒童のうちには多數のアイヌも混つてゐた。然しそれも子供ばかりでなく、三十才を過ぎたアイヌも通ふてゐたのである。シン

キは同族達が一人でも向上して行くのを見ると、たまらなく嬉しかつた。

——全樺太アイヌの酋長である自分の父バフンケでさへ、物を數へることすら滿足には出來ないではないか。ウタリに先づ數を敎へなければならない——

シンキはさう思ふと同族の無智な生活を、一層なんとかせねばならぬと考へた。それからと云ふものはシンキは、父のバフンケを說いて、アイヌ達に數を敎へた、熊や魚を獲つて、食糧さへあれば酒を呑み、寢て暮すウタリの生活が哀れでならなかつた。アイヌの生活を改善しなければならない。そしてメノコはあまりにも男に從屬してゐる、もつと自由にせねばならぬと、眠れるアイヌ達に彼女は雄々しく叫んだ……。

けれどアイヌ達の永い傳統生活は容易には改まらなかつたが、相濱部落の若者だちだけは物を數へることゝ、露語だけは一通り覺へるやうになつた。それ以來アイヌは魚を賣るときなどでも、決して露人にはごまかされはしなかつた。

もうその頃プ氏とシンキとの間に早や、四つになる女の子と、一つになる男の子があつた。

——子供がもつと大きくなり歩けるやうになれば、鄕へ一度連れて行つてやらう——

子供を抱きあげたプ氏は、さも可愛さが溢れるやうに頰づりして、ニコ〳〵と笑つた。シンキも亦夫の快活な顏を見ては笑ひこけてゐた。

こうした天國のやうなプ氏の家庭生活は、部落の人々にとつては羨しいものであつた。

呪へ戰爭の慘禍

かくて三年の月日は瞬く間に過ぎて、一九〇四年（明治三十七年）の十月となつた。今まで表面だけは穩やかであつたサハリン島も、俄に重苦しい雰圍氣に包まれたのである。それは日露の開戰であつた。

コルサコフの守備隊からは、兵隊が露人部落を訪れては、盛んに義勇兵を募つた。その頃プ氏のもとには本國にある兄ピルスツキー氏から、頻りに暗號電信が飛來してゐた。プ氏はその電報を見るたびに露國が不利であることを知つた。續いて『旅順も近く陷落す』と云ふ電報を受取つたのである。然し一方露國の守備隊は依然として、連戰連勝日本軍全滅を報告し、働ける者と見れば殆ど强制的に義勇軍に加へたのである。その頃既に本國から輸送される糧食も、全く杜絶へて、商店などには食糧品の影さへ見ることが出來なかつた。この有樣を見たプ氏は愈々露國敗戰と見たのである。そしてプ氏は兄からの電信を見るたびに、何かしら其顏には湧き立つやうな喜びと、又打つて變つた哀愁とが漂ふのであつた。

兄のピルスツキー氏は祖國愛に燃ゆる勇敢な闘士であり、革命家であつた。若し露國が敗戰した場合この機會を逸せず、ポーランド國を再び獨立せんと企てゝゐたのである。かくてピルスツキー

氏は弟プ氏に

『虐げられた同胞のため、祖國の爲に闘つてくれ』

と激勵の電報が矢繼早に發せられたのである。兩國の戰ひは愈々激烈の度を加へて行つた。さしも難攻不落と云はれた旅順も、陷落は最早時日の問題となり、而も露國内には早くも敗戰を噂するものさへあつた。この噂を耳にしたピルスツキー氏は、ひそかに快心の笑を漏らしたのである。

プ氏は今は早や躊躇すべき秋ではないと考へた。けれど、最愛なる妻、そしていとしい二人の我が子、それを想へばプ氏の決心もにぶるのであつた。

妻のシンキは今日この頃たゞならぬ夫の態度、それが不審でならなかつた。ひつきりなしに配達される秘密の電報、屹度重大なことがあるに違ひないとは察しられたが、何かしら怖しさがこみあけて來て、訊ねてみる氣にもなれなかつた。何時も樂しい夕餉の食卓につく前にプ氏は神にお祈りをして、子供を抱いて笑ふのが常であるのに、電報の來た夜からは物思ひに沈み、笑ひ顏さへ見せてはくれなかつた。

——お國は戰ひに勝つてゐるのでせう。負けることなぞはないと思ひます。今日もコルサコフの兵隊が勝つたと傳へて行きました——

シンキはさうは言つて見たものゝ、若しや露國が負けてゐるのではないかと考へた。若しさうだとすると、夫はきつとそれを悲しんでゐるに違ひない。幾分でも力づけやうと、彼女は心にもない

言葉で夫を慰めるのであつた。そんなときには、プ氏はたゞ頭を振つて一言も答へやうとはしなかつた。

アイヌ達も食糧の欠乏に苦しめられてゐる露人達を見て、ロスカイは負けたに違ひないと思つた。そして永年苦しめられたアイヌは直接戰ひの打擊はなかつたけれど、露國の負けることを希つてゐた。

プ氏にとつては愈々最後の決斷をせねばならぬときが來た、それは『旅順陷落』の報を手にしたのである。プ氏はじつとその電報をみつめてゐたが、やがて手は振へ、唇は引き締り、見るからに何か決心をしたかの如くであつた。

——さうだ、俺は露國のために死んではならぬ。俺は祖國ポーランドの再興を圖らねばならぬ責任があるのだ——

彼の心には俄然祖國愛が燃えたのである。そして直に出發すると云ふ電報を始めて兄ビルスツキー氏に打つた。

破壞された愛、悲しき別れ

その夜はしと〳〵と大雪が降つてゐた。プ氏は事の一切を打ち明けて、父バフンケに、妻子を本

國に連れて行くことを嘆願したのであつた。けれどバフンケは異國へ娘をやつては同族達に顏向けが出來ぬと、どうしても許してはくれなかつた。シンキも父に泣いて賴んでは見たけれど、義理固い父に一言のもとに刎ねつけられてしまつた。プ氏は泣き崩れる妻を勞りながら、確く約したのである。

——きつと迎へに來る、お前も子供たちも病氣をせずに達者で暮してくれ——

いよ〳〵出發する日が來た。たとひ迎へに來ると慰められはしたものゝ、シンキにとつてはそれは耐へ得られない、悲しみの日であつた。數多のアイヌと訓育を受けた露人たちは、別れを惜しんで見送つた。やがて毛皮に身を包んだプ氏は、十頭曳きの犬橇の人となつた。妻のシンキはまだいたいけない乳呑兒の我が子を脊負ひ、さつきから、張り裂けるやうな悲しみを制へて雪の中に埋くまつてゐる。橇は動き始めた。虫が知らせたか、プ氏はこれが最後の別れになるのではないかと思ふと、後髪を引かれるやうな氣持だつた。今まで眼に涙をたゝへ、默つて下うつむいてゐたシンキは、突然半狂亂になつて、走り行く橇の後を泣き叫びつゝ追つたのである。けれど、走り出した大橇は止まらうともしなかつた。プ氏は手をあけて、幾度々々も後振り返り、別れを惜んだ。走り疲れたシンキはバツタリと雪の中に打ち倒れた。そして、大聲を擧げて泣きわめいた。見送るバフンケの眼にも何時しか熱い涙が宿つてゐた……。

橇は吹雪を衝いて吸ひ込まれるうやに、一路アレキサンドルへと向つたのである。

幾星霜は過ぎた。故國に歸つたプ氏は、その後兄ピルスツキー氏と共に、革命運動に從り祖國ポーランド獨立に幾多の危險を冒して、暗中飛躍を續けたのである。

やがて歐洲大戰が勃發し、遂に露國は革命に捲き込まれたが、これを機としてポーランドは完全に獨立したのである。ピルスツキー氏はその後遂に大統領に選擧され、兄弟は漸くにして、積年の目的を達し、二千万同胞の頭上に輝しい國旗が飜つたのであつた。

老メノコは泣てゐる

樺太を去つて以來、日夜多忙の中に日を送つてゐたプ氏は、妻シンキや、愛する我が子の身の上を考へないわけではなかつたであらうが、約束を果すこともできず、不幸にも巴里で客死してしまつた。その後ピルスツキー氏は弟が樺太在任中、アイヌのメノコと結婚したことを、うす〳〵知つてゐたのか、五年前駐日公使であり、現にモスコーに駐在してゐるバテツク氏を通じて、シンキとその子の所在を調査せしめたので、公使館より書記生がわざ〳〵所在確めに來島したことがあつたが、遂に生死の程さへも知れずに空しく歸つた。樺太廳當局でも當時その調査を依頼されたが、何にしても露領當時のことでもあり、且又プ氏とは一体如何なることをした人かそれすらも判然としなかつたので、居らぬと回答したものであつた。

シンキは今盲目となつて樺太東海岸、白濱のアイヌ部落に細々と煙を立てゝゐる。プ氏が立つてから彼女は毎日北の方を眺めては、夫プズスキーの迎へに來る日を持ちあぐんで、涙の日を送つてゐた哀れ彼女は泣いて泣いて、その眼は潰れてしまつたのである。

メノコはさう言つてゐる。美しかつたシンキも今は五十二となり、二人の子には孫まで出來てゐる。その昔利口であつたシンキも、盲目となつてからは一層夫戀しさに惱まされ氣が狂ひかけやうとしたことさへあつた。けれどシンキは『私の夫は必ず歸つてくる』さう思つては、自ら慰め暗い人生にたゞそれを一つの望みとして、今もなほ不自由な体を支へ默々として働いてゐる。

プ氏が立つとき『決してこの俺のことは、話してはならぬ』さう言はれたシンキは、今でもそれを固く守つて語らうとはしない。シンキがまだ若かつた頃のアイヌも殆ど死んで、盲目のこの老婆は今はアイヌ達から何の感謝も受けずに、殆ど省みられやうともしてゐない。

附記

筆者が白濱のアイヌ部落を屢々訪問してゐるうちに、偶々一古老と會談の際この話をきゝ、シンキの家を訪ねたが、彼女は容易に語つてはくれなかつたが、『私はロスカイ（露人）である夫に言ひ傳へるからと惡いとは知りつゝ、盲目のシンキを僞つて訊ねたのである。漸く老婆はアイヌ語や日本語をまじへて、記憶を辿つて語つたのであつたが、話がやがてプ氏と戀愛時代の樂しい場面に至るや何思つてか、ワツトその場に泣き伏した。筆者も泣き崩れるこの老メノコの淋しさうな姿を見て、思はず瞼の熱くなるのを

禁じ得なかつた。私は老婆に『夫は死んでゐる』とは、どうしても云ひ得なかつた。今もなほ吹雪の音を、きゝつゝ戀しい夫のことを想ひつゞけて盲目の老メノコ・シンキは泣いてゐる。

白主の樺太開拓記念碑

アイヌ酋長オケラの功績

珍無類のアイヌの服從

樺太の南端能登呂半島白主海岸附近

白主第一號漁場元標の直北三十間の所に往昔樺太統治の行政廳たる松前藩の白主會所があつた。この會所の正面とも見るべき所に、一段と高く盛りあげて、その上に厚さ一尺五寸、幅三尺位の御影石を廻した二重の石碑の臺石がある。その麓きあげられた臺石の立派さより見又輪廓の大きさより見て、少なくとも十段以上はつまれてゐたものであらうと思はれるのであるが、然し惜しいことには、今はその碑も見當らない。明治二十年頃にはこの碑もあつたと傳へられてゐるが、然しその後に至つて、何人かに持ちさられたものらしい。一体この碑は何人が建てたか、又何故にこの地に建てたかに就ては、何等記錄にも明らかになつてゐないので知れる人は少ない。

抑々白主は元大和船渡航の地勢上の好位置として、且は灣内西海岸交通の交叉点として、松前藩時代に會所のあつたところである。即ち當時の會所は、行政軍事交通を兼攝した地であつて、その建築物も間口三十間奥行九間、眞中の廊下は槍を立てた儘通行出來ると云ふ實に廣壯なる建物であつた。玄關が三つあつて、詰會の役人の階級によつて、其昇降口が異つてゐた。又會所の側には立派な住舍が三棟もあつた。當時の白主は現在で云ふと豐原の如き位置にあり、クシユンコタン（楠溪町）やマウカ（眞岡）等の運上屋は、今の支廳出張所の如きものであつたのである。

×

碑の設立者は、當時樺太一圓に亘つて、漁業の手を伸ばしてゐた北海道の伊達栖原の兩家で碑は松前侯の命に依り、備前產の御影石で建てたのである。然しながら、その碑は領土安泰の碑でもな

ければ、又樺太開拓に當つて、殊勳者の爲に建てた記念碑でもない。實は樺太アイヌで名をオケラと呼ぶ一アイヌの碑であることである。當時北海道樺太に一大勢力を張つてゐた兩家が、何故に一介のアイヌ如き者に記念碑を建てたか、其處には意味深い物語りが秘んでゐる。今を遡ること三百有余年樺太は事實上滿洲政府の領土であつた。然し領土とは云へ、白鳥博士が『樺太を滿洲府が領せしは、何等政略的の意味からではなく、只黑龍江畔の行商隊がテンを追ひ、又テン皮貿易の利を逐ふて漸次樺太に侵入して來たのが、遂に領土となつたのである』と述べてゐるが、實際はさうであつたと思はれる点が多々ある、アイヌオケラのことを述べる前に少しく當時滿洲行商隊のことを順序として語らなければならない、即ち當時の樺太はこれら行商隊のみが各地に入り込み、アイヌと物々交換を行ひ、盛んに貿易を行つたものである。一方漁業などは極めて幼稚で、これと云つて纏つた事業などは殆んど行はれてゐなかつた。然し單に滿洲行商隊のみが當時貿易の主權を握つてゐたかと云へばさうでもない、所謂大和船が夏期だけ本斗附近へ交易に來航しては物々交換を行つてゐた、それで毎年七月になれば、東西兩岸のアイヌはイリタンナイ（今の音狩）に集まつて、盛んに貿易を行つたものであつた。その頃樺太アイヌの酋長には、マウカのオケラ、タラントマリのマクライ、ナイロがイコマナイ（學界に有名な滿洲古代文書を有する揚忠貞の家であつた）久春古丹がベンクカリ、シルトコはバシララの各五人の酋長で夫々統轄してゐたものである。（明治四十二年樺太日日新聞記載山野天海氏の調査研究に依る）この五人の酋長のうちでも才識見ともにマウ

カのオケラが斷然一頭地を抜いてゐたので、彼は內治外交ともに采配を振つて總ての衡に當つてゐた。然しオケラは考へたのである、同じ種族の宗谷アイヌが松前侯の庇護の下にあつて、三度の食事にも米食をとり、安穩な生活をしてゐるのを見てしみじみ羨やましく感じたのであつた。翻つて自分等樺太アイヌの生活はどうか、漸く死に際に米の飯を食べると云ふ悲慘さ、而も獵するテン皮は殆ど只の如く山丹人にもぎ取られ、代償の玉や錦は減法高價におしつけられ、かくて負債が出來れば、彼等の本國黑龍江上流に拉致去られて、終身奴隷となつて、異國の地で死なゝければならない、なんと云ふ悲慘な話だ、若し樺太が松前侯の配下にあつて、栖原のやうな請負人がゐたらどれ程樺太アイヌは幸せかも知れない、第一には米食が出來、次ぎに山丹人に對する復讐にもなる。かくオケラは考へたのであつた。そこで、彼は山丹人を入國させて、シャモ（和人）は惡しきものとして入國せしめなかつたのは何たる盲目的のことであらうと、茲にオケラは極端なる開國論者となつた。直に他の酋長達と相談し頻りに說き伏せた結果彼の意見が漸く容れられて、茲に國是を一變し松前藩に隷屬しやうと云ふことになつたのである。

× × ×

けれど承知せぬのは他のアイヌであつた、國家存亡の秋であると云ふので各處でアイヌ達は寄集り、開國問題に就て研究し論議を闘はしたが結局酋長の意見通りにと云ふことに決したので、そこで宗谷會所の役人が代表となり、宗谷に渡つて請願書を提出した。請願書の內容は……『吾々アイ

ヌは非常に困窮してゐるので、殿樣の配下につくから、蝦夷アイヌと同樣に救助して貰いたい、その代り如何なる勞役にも服するから』と云ふ主意であつた。松前侯もこの陳情に對しては文句の言ふべき筈がない、直に其場に於て快諾したので、茲に噴飯至極な條約が締結された、しかして、この原文は今は南部の某家の寶物となつてゐると云ふ話であるが、交換條件として、アイヌに提示された松前侯の條件は左の如きものであつた。

一、樺太開拓には是非日本人を越年さす必要がある、然るに樺太は極寒なる地であつて、焚火や夜具では凍死する恐れがあるから、防寒具に肉蒲團として、日本人の眠るときは、左右兩側に二人宛の女の子（メノコ）を添て寢さすこと、これは當人の許否に拘はらず酋長に責任あること。

二、日本人とアイヌとは人間元來の階級が違ふ、さればアイヌが若し日本人一名を殺した場合はその埋め合せとして、七人のアイヌを殺すも不服を唱へざること、右固く申しつけるものなり。

等であつて、實に强壓そのものであると云ふより、寧ろ滑稽と評さうか、今から思へばあまりの馬鹿々々しさに呆れざるを得ない、然し當時の松前侯はアイヌの統御に總て斯くの如き高壓手段をとつてゐたのは、流石にアイヌの事大的持性を見ぬいたやりかたであつた。

かくて、この條件は嚴かに恪守されたのである。ためにアイヌが日本人に對して喧嘩とか殺人などと云ふものは殆ど無かつたが、然し一方日本人は、以上の如き頗る有利な條件のもとに置かれてゐた關係上、その橫暴たるや實に言語に絕する樣なことが幾多繰返された、けれどアイヌは屈辱に

よく耐へ、以後二百年間曾つて、殺人などと云ふものは全くなかつたとさへ云はれてゐる、殊に條約中滑稽に感ずる事は、左右兩側のメノコの肉蒲團であるが、これは事實勵行されたものでつまらぬ漁夫でも日本人でありさへすれば、左右にペリカメノコを置かれたと云ふから、如何に日本人の横暴が徹底してゐたかと云ふことがうかがわれる、而も、樺太は寒くて焚火や蒲團云々とあるのに夏期ですらこれを實行したのであるから愈々徹底してゐる。當時又メノコも寧ろこれを喜び、選拔されることを一家一門の名譽の如く心得へてゐたと云ふから、それ程に彼等にとつては苦痛なものでなかつたのかも知れぬ、今日メノコが日本人に對して、憧れを持つと云ふことは幾多の理由はあるが、これなども一つの原因をつくつてゐるのではなからうか。

かくて、伊達柄原はかゝる强壓なる條約が締結されたことに依つて、アイヌを雇傭するにも安く使へることになつたため、樺太に向つて頻りに事業の手を伸展し、白主にも會所が建ち、九春古丹にも堂々たる運上屋が設置され、漸次日本の勢力が侵入して、こゝに樺太アイヌ共和國が滅亡して、事實上日本の領土となつたのである。これに對して、滿洲政府は何んの不服も唱へなかつたのは、樺太は、樺太國としての存在を認めたのではなく、ただ滿洲國の一部領土として認めやうか認めまいか、と云ふ秋であつたので、異議もなく、すら〳〵日本の領土に歸したわけである。

酋長オケラの行爲はあまりに同族の權利を無視したものであつたが、然しもとより絶對的個人主義であるアイヌは國の存在などを認めぬので、寧ろ彼等は喜びこそすれ、何等の不平不滿もなかつ

たに違ひない。そして山丹人のために奴隷の如くに酷使されてゐた同族六十余名を柄原の手に依つて代償として返還して貰つたことなども、彼等にとつては有難いもの〻一つであつた。アイヌ達は柄原の庇護のもとに如何に平和な月日を送り得たかは（主として物質的）明治九年の樺太引揚げの際どし〳〵柄原に從屬したのから見ても察しられる。このオケラの英斷に依つて、松前侯の領土も擴張され、多くの稅金が徵收されるやうになつてから、柄原家も樺太から莫大な利益を擧げるやうになつたので、後年に至つて、オケラを白主會所の最大の功勞者として、大いに優遇したものである。彼が死んだ後オケラは、樺太開拓の大恩人である故をもつて、松前侯の内意に依り、柄原家がこれを建立したもので、碑の背面には千字に余る頌德文が記載されてあつたと言ふが、今は跡かたもないのは甚だ遺憾の極みである、當時碑を建立するとき、碑石の下にオケラの死骸を納めたと云ふから、今でもオケラは碑石下の地中で安らかに眠つてゐることであらう。

尙古老の語に依れは、露領になつてから、碑は露人の手に依つて倒され附近の叢中に埋沒してゐたと云ふことであるが、その後何時しか見えなくなつた。明治四十四年頃不圖したことからこの石碑が浦鹽を去る北方四五里の或る小村の公園にこのオケラの碑があつたと云ふ。何故この碑石を持つて行つたか、一說には當時の浦鹽艦隊司令官マカロフ中將が海狹の潮流調査に來航した際、碑の由緒を聞き、後日國際上の厄介物なりとして、軍艦にのせ浦鹽へ持ち歸つたものだと云

ふことである。兎に角この碑石の臺は樺太開拓史上無二の記念物であることに於て、永久にその箇所を保存したいものであるが、今は何人も省みるものもないとは甚だ遺憾の極みである。

海賊船 アリュート號

…（露國船長と お光の戀物語り）…

眞岡町の高台にいまもなほ
石碑が淋しく建つてゐる

ネー船長の石碑

眞岡高台の露國船長の碑

眞岡町の南方高臺（高濱町）の一角に高さ約四尺、巾二尺の碑が海に面して建てられてある。碑面は英文で IN MEMORY OF E. NEY CAPTAIN OF THE RUSSIAN SCHOONER

" ALEUTE "

WHO DIED HERE 3D-OCTOBER 1884.

『一八八四年十月三日、此の地に永眠した、露國スクーナ船「アリユート號」キャプテン、イ、ネー氏を記憶するために』書かれてある。

何かしら意味あり氣なこの碑を調べて見ると、次のやうな物語りが秘んでゐた。この碑の由來とネー、キャプテンに就ては種々なる說が傳へられてゐるが、然し何づれも瑞擧憶惻、眞相を傳へてくれる人はない。

私の調査したのも或は正鵠を欠いてゐるかも知れぬが、偶然アイヌの古老に聞かされたのと更に文献を參考資料とし双方照し合せて次のやうなものが出來上つた。

本泊海岸の遭難船

一八八三年（明治十五年）九月の初旬であつた。その年は何時になく冬が早く訪れた。チラホラと紛雪さへ降り、空は灰色にほかされて、陰鬱な日が幾日々々も續いた。どす黑くくすんだ海は大波となりうねりうねつて岸邊に打寄せてゐた。アイヌ達は何時風るか豫測もつかない海を眺めては、溜息をつくのみであつた。

短い冬の陽も暮れかゝらんとする、或日のことである。ポントマリ（本泊）眞岡附近の沖合に當つて、一隻のスクーナー船（帆船）が荒れ狂ふ怒濤の中に、木の葉のやうに弄されてゐた。やがてその船はからうじて、陸岸近くに漕ぎつけたのである。

よほど永い間ひどい時化に見舞はれたものか、船体のあちこちは破損してゐた。甲板も浪に洗はれ、マストは折れ、帆は裂けて、船員達は濡れ鼠のやうになつて寒さに振るへてゐた。

附近にはアイヌの漁場が一戸あつた。何處から來たのか、そして亦この大時化に、何處へ行かうとするのか――名も知れぬ奇怪な船ではあつたけれど――まさしくそれが、遭難船であると知ると漁場のアイヌ達は勇敢にも、丸木船に乘つて救助に向つた。帆船は岸から約三町程沖合の淺瀨に乘り上げ、半ば既に傾いてゐた。船員達は一隻のボートを下すべく、かなきり聲を擧げて、甲板上を右往左往かけ巡つてゐる。近づいたアイヌ達は、それら船員達を見ると、今まで自分達が幾度もいじめられ壓迫されたロスカイ（露人）と同じ風貌をしてゐた。屹度ロスカイに違ひない、助けるなとぶ叫ものもあつたけれど、放つて置いては死ぬ、助けてやれとニシバ（親方）の命令で、半死半生

の船員達を一人〳〵船に移して、十四人を無事陸岸へと救ひ上げたのである。そして番屋内で焚火をどん〳〵燃して、冷くなつた人々を温めた。爐邊でぐつたりと横たはつてゐる船員達は、今迄の張りきつた氣も弛んだのか、こん〳〵と眠りつゞけてゐる。こうした船員達の中に不思議にも一人の美しい日本女が混つてゐた。それは荒くれ男達の中にはあまりにも不調和な存在だつた。

アイヌ達の異様な眼はさつきから、この女に注がれてゐる。——なんだらう、あの女はシーシャムの娘だ。この船のニシバのあれかも知れないぜ……。漁場の親方は他のアイヌを省りみて、さも驚いたやうな顏つきで囁いた。

船員達の中に三十七、八にもなるかと思はれる美しい服を着た一人の船員が乘つてゐた。服裝や帽子から見て、屹度この船の船長に違ひないとは一見して察せられた。

それにしても人種の違ふ、この日本女は一体何者だらう。或は船員達が何處からか、かどわかして來たのでもあらうか。否奇しく彼女とそして、船長に絡る次ぎのやうな物語りが秘んでゐたのである……。

シベリヤ沿岸を荒す海賊船

その頃北海の怒濤を蹴つて、シベリヤ近海に頻りに出沒する一隻の帆船があつた、常に漁船を襲

つたり、航行する船舶を襲撃しては荷物を掠奪し、神出鬼沒に何づれかへ姿を消すのである。航海業者はこの奇怪な船を指して、「魔の船」と呼んでゐた。若し一度この「魔の船」にでも襲はれゝば如何に巨大な船でも、たちどころにあけ渡さなければならなかつた。

キャプテン、ルームから双眼鏡を片手に、海の彼方をぢつと見つめてゐる船長の姿、日燒した顏、がつしりとした腕、引き締つた唇、なんとなくこの海賊船の船長としては相應しいやうに思はれた。

——襲撃だ、方向を北に！　全員武裝の用意——　命令一下直ち處に船は北を指して、進むのである。かくして、この海賊船は船と見れは大小の別なく襲撃して、掠奪を擅しいまゝにした。又或ときは、掠奪品の密貿易をやつた。けれど船長は決して、相手の船員を傷けることだけはしなかつた。

船は南へ南へ！　そして針路は長崎の港を指してゐる。

——後一日走れば長崎だ！、日本女が待つてゐるぜ、元氣を出せ、今一息だ——

頰はこけ顏には小皺を寄せて、見るからに意地惡さうな水夫長のデンビーが若いマドロスに元氣をつけた。

——ナニ、ネー船長だけさ、俺らは別に待つてゐる女だつてありやしないし、まあ酒位のものだ

チエツ——

さも面白くないやうな顔付つきで、若いマドロスはデッキの上にもつれてゐるロープをほぐしながら、吐き出すやうに獨り言を言つた。

長崎の夜の町

その夜は町の或る料理屋にネー船長の姿が現はれた。船長は美しい日本女を相手に、したゝか酒に酔ひしれたのである。一年有餘の永い海上生活は、どれほど船長の心を荒さましたことか、けれど、いま愛する女の腕に抱かれて、熱い情の言葉を交はされると、ネー船長はいつしか苦勞も忘れてしまふのであつた。

——一年の月日私にはとても待ちきれないほど、永う御座いましたわ、何故もつと早くお歸りにならないの——

女は遣瀬ない思ひを打ちあけるやうに、丸味のある肩を左右に動かして、娘のやうにすねるのであつた。やがて女の細い腕は船長の首にしつかりと搦みついた。

——お光、お光、お前はそんなにこの俺を好きなのか、俺には鄕に妻も子もある、それでもか——

船長はどんよりした眼を見開きながら女の手をしつかり握つた。

長崎の夜の町は何時しか、次第〳〵に更けて行つた。

物語りは二年前に遡る……。まだネー船長が長崎の町で、彷浪生活をしてゐた頃であつた。或る支那人の妾から、支那人は非常に昆布が好きであると聞かされ、遂に昆布の支那輸出を思ひ立ち、その後浦鹽に渡つて、當時飛ぶ鳥も落す勢力を持つてゐた、ユダヤ人セメノフを說きふせて船を借り、最初はマウカ（眞岡）附近で、昆布の採取に從事したのであつた。けれど豪放で利慾にたけてゐたネー氏は、昆布採取のやうな地味な仕事は遂に、一年で切り揚げ、その後は殆ど密貿易と海賊を働いてゐたものであつた。

ネー氏がまだこの町で、職もなく彷浪してゐるとき、ふと洋妾の女中であつた、お光を知つたのである。お光は長崎在の或る貧しい百姓家に生れた。假令貧乏でも、まだ乙女時代のお光は何の苦勞もなく育てられたが、物心がつく十五の春、哀れ町の居酒屋に賣られて行つた。

お光の苦勞と流轉の生活はこゝから始まつたのである。居酒屋から銘酒屋や、それから料理屋の女中、はては洋妾と、僅か八年位の間にお光は一並ならぬ浮世の苦勞をなめねばならなかつた。男から、男へと渡り歩いてゐるうちにかつては純心であつた、お光の心もいつしか荒んで、酒は飲む、男はだます、お光は日に〳〵に倫落の淵に落ち込んで行くばかりであつた。ネー氏も最初のうちは、旅の徒然を慰める女として交つてはゐたものゝ、次第〳〵にお光の持つ魅力に引きつけられて行くのを、どうすることも出來なかつた。

——好きではない、でもきらいではないわ——　お光は時折、ネー氏のことを憶ひ出しては、獨りで微笑むのであつたが、そんなときには何かしら、お光の頰はほうと、紅くほとるのであつた。

けれど男から男へと、仇し枕に夜を明すお光にとつては、男を弄ぶ位のことは、何んの雜作もないことであつた。最初は別に深い意味もなく、好きだと云ふ氣持だけではあつたが、それもいつしか消えて、たゞ金さへ貰へればと、お光の心はどうにでも動くやうに變つて行つた。ネー船長は長崎の町に着いてから、毎夜の如くお光のもとへ通ひつゞけてゐた。そして今宵もまたお光を相手に醉ひしれてゐた。

——お光、金さへ出せば、俺と何處へでも行くのか、金がそんなに欲しいのか、——

ネー氏はお光を省みて、力無さそうに笑つた。

——え——何處へでも行くわ、金さへ貰へれば——

船長はポケットから、厚い札束を投げ出した。ランプの光が、力ない部屋に淡い光を投げてゐた。札はバラ〳〵と散らばつた。

洋妾お光の狂態

波荒い日本海の眞只中を、一隻の帆船が風に帆を孕ませて、北へ北へと進んでゐた。船体には小

さな横文字で "ALEUTE" と書かれてあつた。この船こそまさしく、長崎の港を出帆したネー船長とお光の乘れる、アリユート號であつたのである。

……船が錨を揚げて長崎を船出するときには、流石のお光も考へさせられた。いくらお金とは云へ、異國人の妾として、知らぬ他國へ行くことは嫌であつた。けれど、お光も今となつてはすけなく斷るわけにも行かなかつた。

——意づくでも行かう、どうせ一度は死ぬ体、何處で死んでも同じこと——

お光は半ば棄鉢の氣持ちで船に乘り込んだのである。永い航海は幾日も續いた、海はます〳〵荒れて行くばかりである。今はもうアリユート號は、木の葉のやうに大浪に揉まれた。

——海の荒れるのは船に女を乘せるからだ、船長の罪だ——

水夫長のデンビーは若い船員達をそゝのかして、頻りに船長の悪口を言ひ始めた。

——お光を海中に投げ込んでしまへ、さうすれば屹度風も凪るヨ——

水夫長は怒つて、部下に命じて、お光を海中に投げ込まふとさへすることがあつた。そんなときには、ネー船長は力まかせに、船員を甲板に叩きつけ、お光を護つた。

だがお光は何處までも長崎の女だつた。何時しか若い美しい船員と、船長の目を忍んでは、戀を語る間柄となつてゐた。或る夜、人々が寢靜つたのを見計ひ、二人は暗い倉庫の内で愛を囁いてゐた。こうしたことが船長に發見され、遂に怒りに怒つた船長は、持つたナイフを抜く手も見せず、

水夫の肩に深く突き刺したことすらあつた。かくした事が船長の心を暗くはしたが、しかしお光だけは決して手放すことは出來なかつた。お光可愛いさから、どんな冒險なことでも、敢て辭せない程、ネー氏の心はお光いとしさで一杯であつた。かくて船は時化に揉れ〳〵て遂に本泊の沖合で遭難したのである。

激しい爭鬪は續いた

思ひがけないアイヌの情に、船員達の元氣も全く快復した。狹くるしい處ではあつたが、空いた番屋を借り受けて、一同は其處に一先づ生活の本據を定めたのである。そして難破したアリユート號の修理にとりかゝつた。岩に乘りあげた船は波に搖られて、終ひには船底が傷き、到底修理の見込も立たなくなつた。息むを得ず一同は越年することにしたのである。けれど船員達は人も住んで居らぬやうな淋しい地で暮すことを極度に嫌つた。コルサコフまで出れば便船がある。なんとかして行かうと、ネー氏に奬めるのであるが、何を考へてか船長は何時も無言のまゝ頭を振つた。

若いお光とても同じであつた。賑やかな長崎の町に比べて、なんとさびしい地であらう、お光にも亦たまらない憂鬱な日が幾日々々も續いた。

——私は船長を愛してゐるのかしら、いや愛してなぞはゐないわ、やつぱりお金、お金で私は買

はれてきたの——

お光はさう思つては見たものゝ、やはり彼女の奥底には、何かしら女らしさの純情が殘つてゐた。そしてそれが船長に對する思慕の情となつて、現はれてくるのだつた。

——お光、お前はやつぱりこの私を愛してくれるのか——

憂鬱だつた船長の面には今日此頃、晴やかな色さへ浮んでゐた。寒い北風を身に受けながら二人の姿は時折丘の上に現はれた。併し面白くなかつたのは他の船員達であつた。

——あの女のために船は遭難したのだ、女が乘らなければこんなことにならなかつたものを——

日一日と船員達の憎惡は、深められて行つた。

腹の黑い水夫長のデンビーは何時しかお光に、横しまな戀を感じてゐた。二人が愛し合へば愛し合ふ程、デンビーは、やがてそれが嫉妬に變つて行つた。その夜はシト〳〵と雪が音もなく降つてゐた。船員達はデンビーにそゝのかされて、ドヤ〳〵船長の部屋に押しかけたのである。

——女を返せ、女の爲めに船は遭難したのだ——

昂奮した船員達はネー氏の胸ぐらをとつた。

——手荒なことはよして下さい。この部屋から出て下さい——

お光は必死となつて、船長をかばつた。そのうちに一人の水夫は船長の胸ぐらを突いた。ネー氏はどうとベットから横倒れになつて床の上に轉げたのである。今迄無言であつた船長は、突然立ちあ

がつた。矢庭に一人の船員をその場に撲り倒したのである。かくて恐ろしい血の雨が降つた。或る者は撲られ、或者は蹴られて、瞬く間に船員達は叩きのめされたのである。この光景を影でじつと眺めてゐたのは彼デンビーであつた。

お光に抱かれ天國へ行く

永い冬も何時しか過ぎて、マウカの海にも和やかな春の氣分が漂ひ始めた。デンビーはかつてネー船長と共に、マウカ附近で昆布の採取をしたことを憶ひ出し、沿岸一帶を再び調査したのである。愈無盡藏に生育してゐることを確めたデンビーは、船員達をつれて浦鹽に歸つた。

ネー船長と、お光だけはどうしても歸らなかつた。かくてデンビーは浦鹽のセメノフを說き伏せて、莫大な資金を借り出したのである。再び舞戻つたデンビーはその夏、大々的に昆布の採取に着手した。

きのふの船長も、今日は船なければ一介の水夫に等しかつた。測量術に長けてゐたネー氏は、デンビーの家に食客同樣な、みじめな生活を送りつゝお光を相手に沿岸の測量をしてゐたのである。

九月に入つてから船長は、ふとした風邪がもとで、病の床についてしまつた。一入心配したのはお光だつた。夜も殆ど寢ずにネー氏の爲めに介抱したが、一向病は治らなかつた。次第々々に痩せて行く船長の姿、今はもう口さへもロクノ〳〵利けなかつた。

——お光、私は死ぬかも知れない。金でお前の体を買つた私は、今でも心苦しく思つてゐる——苦しい息の中から船長はお光の顏を見上げた。そして痩せこけた手をお光の膝の上にそつと置いた、その手は一握りして廻るやうに細かつた。お光は泣いた。熱い涙がポタリとネー氏の頰に落ちた。

——お光、泣くな、故鄕に妻子はあるが、この俺はお光が一番いとしかつた——

云ひ終つた船長の眼からは玉のやうな涙が、きめの荒い頰に幾度もノ〳〵流れた。

涙、涙、お光は始めて人間の涙を見たのである。そして荒んだお光の心にほんとうに淨らかな魂が浮び上つた。

お光は船長の頰に寄り添ふてワット其の場に泣き伏した。ネー氏の魂は再び歸らぬ永いノ〳〵航海にと出て行つてしまつたのである。

海は悲しみを、知らせるかのやうに、吠え續けてゐた。

附記

その後お光は養はれてゐたデンビーの妾となり、日夜酒びたりに亂行の生活を續けてゐたが、飜然として悔悟する處があつて、その翌年ネー氏と樂しくも語つた當時の憶出ある丘（碑のある場所）にデンビー

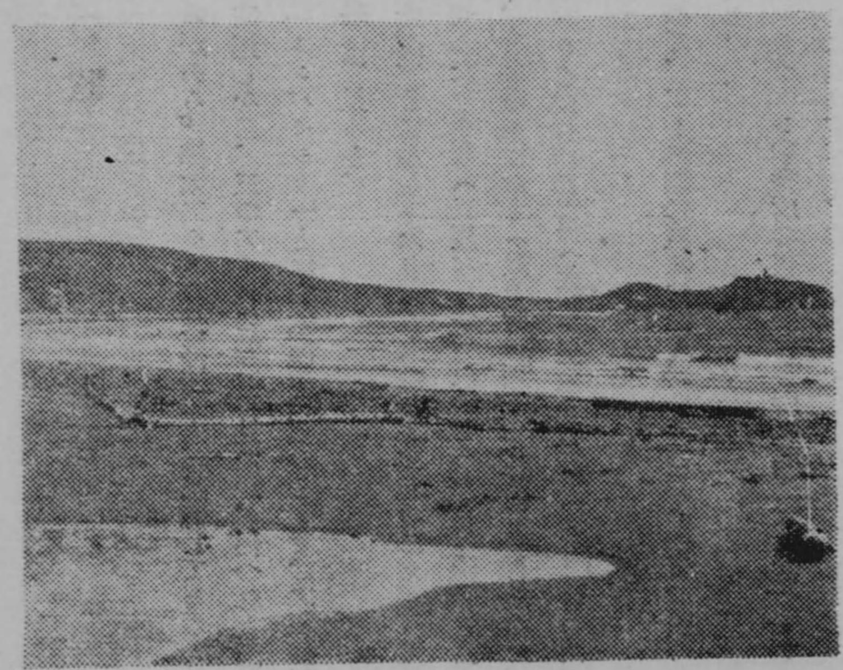
の手で碑を建立して貰つたものであつた。碑面の英文はネー氏はもと英國人であつて、その後露國に歸化してゐたため、碑面も英字で書いたものだと云はれてゐる。昭和二年の夏眞岡停車場の構内を擴張するため崖を切り崩した際、ネー氏の白骨が現はれたので共同墓地に葬つたが、現在の碑は葬つた場所より稍々南よりの處に置かれてゐる、尙お光とその弟は現在函館に住んでゐる。

樺太開拓の歌

——アイヌのたんばもしり——

歌の効果は非常に絶大

樺太で最初に開けた白主海岸



タンバモシリの歌

アイヌの古謠で「タンバモシリ」と云ふ歌がある。樺太アイヌの長老で、未だ記憶してゐるものもあると云はれてゐるが、然し唄の文句と節廻しを二、三のアイヌに聞いて見たが、何づれも記憶にないと云つてゐる。文獻によると、この「タンバモシリ」とは樺太開拓の唄のことで、アイヌ語では「此島」と解釋する。卽ち唄の全文を擧げて見ると、

たんばもしり（此島）ていだをつたの（此處）こにんしゅたり（五人の人等）とのにまん（殿の船）てやへうけかど（を入れたくて）とはせゐたりきり（二度ならず）れはせゐたり（三度ならず）うしゆかくしゆと（心配した）とのにまん、てよゐうけかと（殿の船が來てくれた）もしりたんばふる（島中）うたりしかふねかの（一同）いくくらむしんね（大いに安心した）いつきゐいたはん（以上）

この「タンバモシリ」は樺太開拓にあたつて、アイヌ達に唄はせた最初のものであつて、唄の由來に就ては次ぎの如き事實が傳へられてゐる。

今を遡ること百四十年前のことであつた「シラヌシ勤番所の有司が勤番所の開所式に當つてアイヌの酋長を招待し、この唄を各部落のアイヌに唄はすべく、特に傳へたものである。それに倣つて

日本の偉德を謳歌せしめ、しかして亦一方にはアイヌの懷柔策としたものである。

抑々樺太に邦人が足跡を印した第一歩は、慶安四年（約二百七十九年前）松前侯が、その臣蠣崎傳右衛門をして、樺太探險に當らしめたのに始まつてゐる。その後大石逸平、最上德内、間宮林藏、松田傳十郎の探險家が續々と來島し、漸次樺太なるものゝ存在を認められ、爲に北海道、東北地方など次第に交通を開始するやうになり、寛政初年（約百四十年前）には奥羽地方の漁民などが、ポツ〳〵渡島するやうになつた。これがため逐年漁業者の渡來が增加して行くので、本島統治の必要を感じた松前侯は「クシュンコタン」（現在の楠溪町）及び「シラヌシ」（白主）に勤番所を設け、一切の行政を掌らしめることになつた。勿論當時の行政組織などは、子供の惡戯の如きものであつたが、兎にも角にも寛政二年の春に至つて、總ての準備が不完全ながらも整つたので、正式の勤番所舍を新築し、數名の役人を駐在せしめることになつたのである。

アイヌ懷柔に効果

當時アイヌは全島至る處、散在してゐた和人が漁場を經營するにしても、漁夫は容易に樺太までは連れて來られなかつた。それで漁場經營に當つては土人を使役せねばならぬのであるが、然しこのアイヌも當時は容易に和人と接觸しなかつたので、有司は大いに土人の懷柔に務め、その一策と

して、全島の五酋長を白主に集め、勤番所で盛大なる宴を張り、有司中でアイヌ語を知れるものに「タンバモシリ」の歌をつくらしめ、壯嚴なる式のうちに、これを謠いこの島は神の御告げに依り日本がこれを統治するぞと申渡したのである。

その後この儀式が例になり、毎年有司が乘れる大和船が、白主着と同時に必ず五酋長を招待して同様の儀式を繰返し、土人の機嫌をとつてゐたものである。

歌中に五人とあるのは、五酋長のことで「シラヌシのオケラ」「ナヨロのヒトコレラン」この外東海岸の榮濱、並に久春古丹等の酋長であつたが、その名は明らかになつてゐない、爾來「タンバモシリ」は土人間に大いに尊まれ、彼等鄕黨の紛擾、私人の喧嘩等の善後處分にはこの歌を謠へば土人の惡感情は氷解したと云ふことである。

この歌はたゞ一片の土人の俗謠でなく、樺太開國記念とも稱すべきもので、當時はどれ程この歌が、土人の懷柔に効果絶大なるものがあつたかを思へば、亦樺太行政史上貴重なる一文献たる價値を失はぬであらう。

囚人の兇暴とアルコール

馬群潭村に於ける アルコールの悲劇

美人の人妻虐殺さる

囚徒達の賭博爭ひ、ナイフで刺し殺さんとする處

（明治二十一年榮濱で撮影）

兇暴露人とアルコール

明治八年千島樺太が交換され、南樺太全土が露國の領有となるや、同年九月樺太を黑龍江總督の管轄に移して、政務執行の權は總て軍務知事に委托して、亞港に本據を構へ、樺太をツイモフ、アレキサンドル、コルサコフの三洲に分ち、各洲廳を設けて、これを知事の監督下に置いて政務を行ふことゝした。

しかして露國は先づ樺太を開拓するには曹通移民を入れても開拓出來ぬと見て、重罪犯人のみを流竄し、樺太を流刑場に當てる一方、これら囚人を出獄させた場合、夫々開拓事業に從事させやうとしたものであつた、國事犯人はアルキサンドルフスクへ、其他の犯人はコルサコフ（楠溪町）へと收容し、極力彼等をして、道路の開鑿、畑地の開墾などの諸種の產業から、部落の形成等總て囚人の手に依つて行はれたものである。かくの如く當時の樺太に流刑された露國人は何れも札附きのものばかりである處から、人を殺す事は犬猫を殺す程度にしか考へてゐなかつた。從つて彼等の持つ狂暴と慘忍性とは、想像もつかぬ程物凄かつた。

これが爲邦人漁業者などはどの位苦しめられたか、例へば商店に物品を購入に行つた際、金でも所持してゐると見れば、秘にその跡を追ひ、一擊のもとに殺してしまふとか、又は金時計や金鎖な

どを所持してゐれば必ず掠奪され剩へ殺されたものであつた。彼等は常にピストルや、手斧、ナイフなどを所持して、人影のない處で若し通行人でも發見すれば、背後から一擊を加へるか乃至ピストルを發射する等して、金品を奪つたものである。

兎に角露人は僅かの金を奪ふのにすら、殺害したもので、殺人位は彼等にとつては日常の茶飯事の如く心得えてゐたのである。一度び牢獄から解放でもされゝば眞面目な開拓事業などには殆ど目もくれず至る處に出沒して狂暴性を發揮してゐた。ために邦人漁業者が遠隔の地へ旅行する場合は必ず數人若しくは十數人が一隊となつて、彼等の襲擊に備へるため武器をもつて通行したものである。

これら出獄露人の取締りに就ては、當時の警察署も殆ど手を燒き傍觀するといふ有樣で、殆ど無警察狀態であつた。

かくの如く露人の暴行は年と共に峻烈さを加へて行つたが、明治二十七八年の日淸戰役に我が國が大勝するや、日本人侮り難しと見てか、それ以後は彼等の態度も大分改まつたが、それまでは邦人も殆どアイヌと同じ程度に見なされ、或ときはアイヌよりもつとそれ以下に取扱はれたことが屢々あつた。

殊に奇怪なことには露國官憲の態度である。彼等もいゝ加減なもので、例へば露人が日本番所へ盜みに行くときは堂々と、盜みに行くといふことを屆けたもので、役人等がこれを拒絕したり、取

締つたりした場合は、何時かは殺されるときが來るので默許したものである。然し中には返つてそれ等の惡事を奬勵する役人があり、而も盜品の山分けをした者さへあつたといふから、たゞ〳〵呆れざるを得ない。

×　　×

かやうに出獄露人が兇暴性を現はして、邦人漁業家や、善良な露人を苦しめたといふ、その裏面には一つの原因があつた。それは彼等の精神を痲痺させるアルコールであつた。アルコール無くしては一日も生きることの出來ない彼等は、結局酒代を稼ぐために凡ゆる惡事を働くのであつた。

更に仕末に終へぬことは酒に醉へば益々その兇暴性が發揮され、結局兇暴性のやり處が即ち殺人、傷害となつて人々を苦しめたのである。

遂に露國の官憲はアルコールの害毒があまりに大であることを認め、これを防壓するには禁止令を施行せねばならぬとあつて、殆ど禁酒に近い制限令を設けた。アルコールは一年に一戸につき四合入れ二本、而もこれは正月及び四月二日の祭日だけに飲用を許可した。

なにがさて、アルコールは彼等にとつて生命にも替へ難い生活の必需品の如きものであつたからこの制限令は非常な苦痛であつたことはいふまでもない。殊にこの制限令を設けて彼等より一層その苦痛を舐めたのは官憲であつた。自ら規則を發布しては、公然と飲むわけには行かぬ。ために苦しいながらも、先づ取締りを徹底さす爲にはアルコールの輸入を禁止せねばならぬとあつて、邦

人漁業家に對して輸入を嚴禁したのである。若しも違反したものがあつた場合は、船は勿論、物品漁獲物までも沒收し、更に事情に依つては漁業權を取り消し、莫大な罰金をも徵收した。

然しこゝに亦不都合に思ふことは、露國官憲は表面酒を嚴禁して置きながら、內面に於て邦人漁業者よりアルコールを、どし〳〵收賄したことである。それは漁業家が樺太に於て漁業に着手する場合、一度コルサコフに寄港してその手續を行はねばならぬが、しかしこの手續も決まつてゐるのになか〳〵容易でなく、時には非常な日數を要するので、その儘漁場に廻航する事が屢々あつた。若しも漁業免狀を所持して居らねば、假令鰊がいくら押しよせてゐても、絕對に漁夫や貨物の陸揚げを許可しない。かゝるとき若しアルコールを役人のポケットに忍ばせると、たちどころに許可された。兎に角邦人漁業家はアルコールの密輸入には一方ならぬ苦心を續けたものである。

アルコールの悲劇

こゝにアルコールが彼等の精神生活を如何に狂暴に陷らしめたか、この實例として一つの悲慘な物語がある。

明治二十二年の四月の二日のことである、マクンタン(今の馬群潭)にアレキサンドルフスク(亞港)の郵便電信局の分局があつた。この電信局の局長ともいふべき人で、トーマチヨフといふ一人の電信技師が居た。今日はお祭り日だといふので、秘に貯へてゐたアルコールを出獄囚人達に飲ま

せ馬群潭川で舟遊びをやつた。

囚人達は今迄殆ど酒などは一滴も口にしなかつたので、彼等はこのときとばかりに、强烈なアルコールを痛飲したのである。酔が廻るに從ひ彼等の狂暴性は愈々露骨になつていつた。

恰もこの日は東海岸隨一の美人といはれるトーマチョフの妻が彼等のために料理をつくり、酒を提供して、何くれとなく接待につとめて居た。技師の妻は實際美しかつた。その美しさは囚人達の間には女神とさへいはれ、常に彼等の憧れの的だつたのである。アルコールに酔ひしれた囚人達はその持つ兇暴性が益々露骨になり、遂にトーマチョフの制止もきかばこそ、矢庭に妻を引き倒してごめにしやうとしたのである。トーマチョフは愛妻のために必死になつて闘つたが、十數名の荒くれ男達の前には到底敵ではなかつた。哀れ妻はトーマチョフの前で慘々汚された上、更に泣き叫ぶ妻に、彼等の一人がナイフをもつて無慘や心臓を突き刺し殺害して、川に投げ込んでしまつた。

トーマチョフは死に物狂ひで「妻の仇」と反抗したが、それはなんの痛痒も彼等には與へ得なかつた。禁酒して居る酒を呑せた、たゞそのことだけでトーマチョフは國法を破つたことになる、彼は涙を呑んで野獣的な囚人達の暴擧を罪することも出來ず、悲しみのうちに日を送つたといふことである。

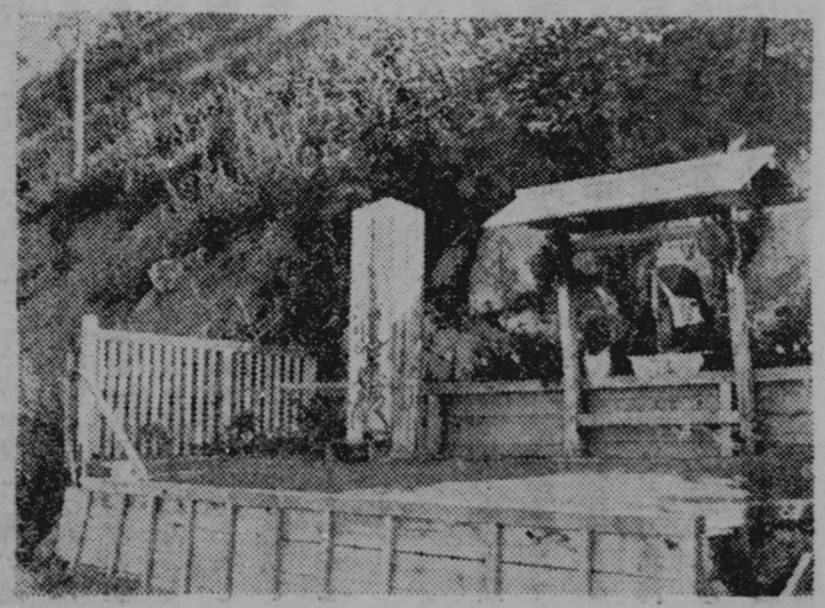
明治二十八年頃までは妻が殺された馬群潭川の川口には、トーマチョフが愛妻のために建てた小さな石碑があつたが、その後大水のために、何時の間に流されてしまひ、今は跡かたもなくなつてしまつたといはれてゐる。

日持上人の遺跡

アイヌの口碑に依る

上人の事跡物語り

阿幸に於ける上人の遺跡



本斗郡阿幸部落の村端れより北へ約三丁ほど行くと小高い丘がある。この丘の中腹に石碑が建立されてゐる。永年風雨雪に晒らされた爲めに、今はこの石碑も中央より二つに破壞され、たゞ僅かにその半身を見られるに過ぎぬが、その昔碑面には「南無妙法蓮華經」と云ふ七字の題目が刻まれてあつたと云はれてゐるが、今は刻んだ字さへ判然としない。人々はこの碑をさして日蓮上人の高弟である日持上人が樺太へ巡錫の折、この丘に登つたと云ふ記念の碑であると傳へてゐるが、碑に關する物語りに就ては、たゞそれのみで、この碑が何故にこの丘に建立されたかは誰れに尋ねても、その由來を答へてくれる人がない。然し私は偶然にもアイヌの古老にこの碑の傳說を聞かされたのである。

異域弘敎の大願を抱き、常に機の到來を狙つてゐた日持上人は、法を弟子內敎に讓り、孤錫漂然として、駿洲貞松の蓮氷寺を發したのは、永仁三年の正月一日 年四十六才のときであつた。（六百六十餘年前）出發に際し上人は「我は異域を救濟せんとす。身命を佛祖に奉ず、江魚の食となるも辭する所にあらず。雨等の堪ふる所にあらず。行く若し一毫の浮心あらば我が願成らず」と北海道に渡り、先づ函館山に攀登して、結緣のため一大石に七字の題目を刻み、それより漸次北方へ步を運び全道各地を巡錫して今の稚內に至り、それより宗谷の荒浪を蹴つて、北蝦夷樺太の地に渡つたのである。

上人が上陸した場所も今の白主であつた。その後何處をどう巡錫したか史實には判然としないが白主より西海岸を通つて北行、北樺太より沿海州に渡り、黑龍江を遡つたのは事實である。

併し又一說には黑龍江より再び舞戻つて、今の阿幸で終焉したと云ふのである。明治四十年十二月某日發行の樺太日日新聞に日持上人の事績に關して左の如き記事を載せてゐる。

「北樺太より來れる一勞働者の談に依れば、アレキサンドルの北方約五丁松林の中に南無妙法蓮華經と七字のお題目を彫刻し、その下にヒモチと書きけるが、字体は何かさつぱり判らず漸く判讀し得る程度なり」と多分このヒモチは日持の讀み違ひなるべしとある。現在も果して在るかどうかは疑問であるが、更に黑龍江プロンケ岬にも七字の題目を刻んだ碑が發見され、又尼港事件の際もケルビー地方に於て日持上人の遺跡が發見されたと云はれてゐる。

いまは昔、北海道石狩から轉住した或るアイヌが阿幸川の附近に住んでゐた。彼は熱心な法華經信者であつた、けれど彼は法華宗とは如何なる宗敎かも知らずに、殆ど盲目的に信仰したのである。たゞ先代が信者であつたが故に一つの習慣として信仰してゐたにすぎなかつた。或夜彼は夢を見た、それは黑染の衣を身に纏つた僧侶が枕頭に現はれ、吾は日持である、丘の中腹に石がある、その石のある場所が吾が日持の終焉した場所だ、忘れずに祭祀せよと云つたと思ふと、僧侶の姿は消へ失せた、不思議と思ひ、翌朝丘の中腹へ行つて調て見ると、不思議やその石は四五間も深く地

中に陷ち込んでゐたので、多分この石に違ひないと堀上げて祭つたのが、即ち今の碑であると云ふのである。多蘭泊の酋長川村初藏氏の如きはあの石は實に變な石である、自分達が子供の頃は頭だけ漸く出てゐたのが、それが漸次大きくなつて今の程度に成長したのだと云つてゐる。

更にアイヌの傳說として、殘つてゐる上人の足跡を辿つて見ると、

上人が北樺太から南下して故鄕へ歸るべく阿幸附近に差かゝつたときには猛烈な吹雪だつた、空腹を制へ、寒氣と鬪ひ、深雪を押しわけて漸く今の阿幸村までたどりついた、けれどさがし求めてゐた人家は吹雪のために見當らなかつた。日は暮れる、上人は最早これまでと觀念し、七字の題目を口ずさみつゝ吹雪の中で還化した。翌朝アイヌがこの姿を發見したときには、上人の兩手はしつかりと組み合され宛ら安らかに寢てゐる樣な姿だつたといふ、そして北行するときに刻んだ七字の題目の石碑の下にアイヌ達は懇ろに葬つたのである。

兎に角上人が樺太に足跡を印したのは今から數百年前のことであるし、話は何の程度まで信じてよいか判らぬが、然しこの石碑は何かしら上人の遺蹟を傳へるものであることは事實である。石碑の前に立つてそゞろに當時の事を幻けながらにも追想すれば、いとも感慨深いものがある。木の葉がサラ〳〵と碑の上に散つてゐる、上人の靈はこの地中に永遠に眠つてゐるに違ひない、石碑は今もなほ當時の事を物語つてゐるかのやうに思はれる。

（七・一〇・一〇）

海馬島發見物語り

アイヌ夫婦が漂着す、信じられてゐる神の島、島に海馬が無數に棲息

海馬島の發見された動機と島の由來をアイヌ達は次ぎのやうに語つてゐる……

今を去ること二百年前の昔であつた。西海岸の氣主岬附近に住むアイヌの夫婦が、一日小舟に乘つて漁に出たきり何處へ流されたのか、幾日經つても歸つてはこなかつた。同族のアイヌ等は海陸に手をわけて搜索したが依然として姿は見當らなかつた。或る日沖合遙に搜索に出かけた一隊は、この日も尋ねあぐんで歸陸しやうとしたのである。突然空から生々しい肉塊が船中に落ち込んだ。アイヌ達は驚いてその肉塊をよく〳〵見ると、それは海馬の肉であつた。空には無數の鳥が飛んでゐた。アイヌ達は考へた。今船中へ落ち込んだ肉塊はこの鳥の嘴から落ちたものに違いない。恐らくこの附近に島があるに相違ない。もし島があるとしたならば、或はアイヌの夫婦が漂着して居らぬとも限らぬと、アイヌ等は歸陸後同族の大會を開いて協議の末、腕節の强い壯者十數名を

選抜して船を艤し波を切つて探險の首途についたのである。

船は波に漂ひ、潮に流されつゝ數日を經た。携帶の食糧も既につきたが島は見當らなかつた。流石の猛者連も心細くなり、お互に顏を見合せるのみであつた。流れ〳〵てそれは丁度八日目の朝であつた。次第に晴れ行く靄の中から突然一抹の黑影を認めたのである。アィヌ達は勇躍した。渾身の力を振つて黑影目指して漕ぎ始めた。やがて近づいて見れば、擬ふかたなき一つの島であつた。一同は雀躍りして島に上陸したのである。見れば數町彼方の海岸に、見なれた土人の家屋が一軒ある。無人の島とのみ思つてゐたのに、既に同族が捷んでゐる。アィヌ達は不思議に思ひながらも小屋に近づいて見ると、小屋には行衛不明となつてゐるアィヌ夫婦が住んでゐた。探險隊の一行も喜んだが、夫婦の喜びは亦一方ではなかつた。互に手を取り交はして嬉し泣きに泣いた。

アィヌ夫婦が物語つた處に依ると、出漁の日は風も靜かで、波もない好日和であつたが、不思議にも夫婦の者が懸命に漕ぐ櫓も利かず、船は沖へ〳〵と流されて、不安のうちに一夜を海上で明かした。夜が明けた見れば島がある。漸くにして流れ着いたのがこの島であつた。上陸しやうとしても海岸の崖下には咆號する幾百千とも數知れぬ海馬が群集して、上陸は出來さうにもなかつた。船は群る海馬のために破壞され、あはや命までもとられやうとした。漸くにして上陸したが、見れば最早や船は壞され歸るべき術もなく、小屋をかけ海馬をとつては食糧にし、今日まで心細くも暮してゐたのである。

×

海馬島の發見には以上の如き傳說が殘つてゐるが、然しこれも恐らく事實であつたかも知れぬ。明治二十年頃まではアィヌ部落が三十戸あつたと云はれてゐる。アィヌ達はこの島を神の島と呼んでゐたが、何故神の島と呼んだかに就いて、アィヌの古老に聞くと、即ち船に肉塊を落したのは神である。神はアィヌに海馬島があることを敎へるために、斯く肉塊を落したものであると云つてゐる。島には明治三十八年頃までは、海馬が無數に島の周圍に棲息して船も寄りつけぬ程であつた。西海岸のアィヌ達はこの島を唯一の生活の財源としてゐた爲め、それだけに島を尊んだもので、海馬獲りに出かける時は數日前から身を淸めて船に乘り込んだと云ふ。明治二十年頃一度何うしたことか海馬が殆んど姿を見せないことがあつたので、神の怒りに觸れたものとしてアィヌ達は全部島外に引揚げたことがある。爾來三十年頃までは全く人影すら見當らなかつたが、三十一年秋海賊團がこの島に立籠り盛んに獵獲したので、海馬も何時しか減じてしまつた。

×

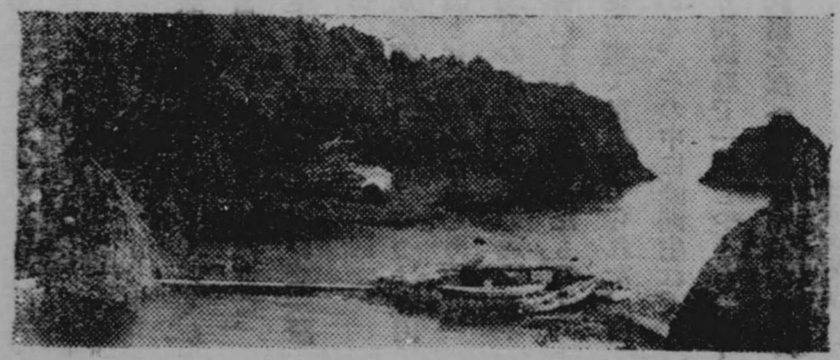
マカロフの記念岩

樺太の最南端西能登呂燈臺のすぐ下に、打寄する波に洗はれてゐる奇岩怪石がある。この岩の中

に突起せる高さ一丈餘の大石がある。この石の下から約七尺ばかりの所に、露文で文字が彫刻されてあるが、この文字は宗谷海峡の方向に面してゐるので、觀察した人々も一寸氣付かぬかも知れぬが、岩礁を攀ぢ俯瞰したならば見られる程度である。これは露國の名將マカロフ提督の測量記念碑である。文字の數は全部で九つであつて、一文は既に欠けてゐるが、これを釋譯すると「永久記念」といふ文字であると云ふ。マカロフ中將の名は日露海戰前は隨分名將として、喧傳されたものであるが、然して彼が東洋艦隊司令官の當時、三年の日數を費して、交渉紛糾せる宗谷海峡の潮流を調査し盡し、其の功により中將に昇進したので名高かつた。其の潮流調書は釋譯されて樺太廳にもあるが、兎に角露國で有名な海戰術家であつて、當時吾が海軍將校達にも敎へを受けた者があつた程なので、彼が旅順へ東洋艦隊をひきゐて堂々と我に當つた時は、確に危惧の念を抱かしめたものである。不幸にも敷設水雷にかゝつてマカロフ中將は軍艦と共に戰歿して、遂に半生の蘊蓄を現はすことが出來なかつた。この岩頭の文字は調査三年全く終了した時、彫刻したものであると云ふ。

木碑物語の

海賊の巣窟海馬島
露人海馬島を襲撃
日本人四名虐殺さる
義俠アイヌの功績



近附淵入船島馬海たつあのひ戰

海賊の巣窟海馬島

本斗管内のネラトイと阿幸の中間に當つて、一個の墓標がある。青苔が半ば蔽ふて、訪ふ人とても、なく、且木標には何等の標銘も認められない。それで道行く人もたゞ當事者の建てた村界標位に、思つてゐるが、これには一部時代を語る悲慘な歴史として、掬すべき老アイヌの涙ぐましい義俠談が秘められてゐるのである。

明治三十七年の六月、當時のモネロン島、今の海馬島には二個の獨立政廳があつた、一つは志田力二の率ゆる同志會、一つは本莊堅廣、福本万作、阿部茂曾八等を主領とせる甲辰義會であつた。彼等は何れも平和な時代には無用な荒武者どもで、各地を渡り歩き、馬骨の埋場なき爲め遂にモネロン島に乘り込んで島を根據地として海賊を働いてゐたものである。會の主旨に共鳴したものは、何人でもかまはず入會せしめた。多年北海道沿岸をうろつき廻つて、世を棄て世に棄てられた、所謂ゴロと稱せられる連中は、吾も吾もとその傘下に馳せ參んじたのである。その中に薩洲生れで、小樽の區役所に腰辨生活をしてゐた伊集院兼通と云ふ男、時こそ至れり海馬島で一儲しやうと、同氣相求むる大田忠良外八名の浪人連を說いて一團を組織し、手に手に武器を携へ利尻の鶯泊港を解纜したのである。

それはちやど明治三十八年六月、奉天の大會戰が今やまさに、始まらんとする時であつた。滿腔の希望に帆を孕せたる彼等は、月下黃朔の曹孟德を氣取り、小船を操りながら海馬島さして進んだのであつた。一行十人のうち誰一人として海事に通ぜる者がなかつた。

——羅針盤が子亥の間を指しさへすれば、海馬島には行かれるのだ。僅か廿里の海上ではないか海上技術も何もあつたものか——。

伊集院は胸を叩いて笑つた。だが血氣にまかせて乘り出したものゝ、それは全くの失策であつた。船は禮文の島端を通過する頃、突如强風と濃霧に襲はれたのである。船は暝濛咫尺をわきまへざる中を、二晝夜も吹き流されて、さすが豪傑揃ひの十名も、今は早や半死半生の態となつた。折柄神の助けか突如現はれたのは陸地であつた。驚き嬉しさのあまり、港口に入らんとする一刹那、操縱をあやまり船は平磯の岬角に打ちつけ、粉微塵に破壞して了つた。その場所は本斗管内の遠節港口であつたのである。一行は濡れ鼠のやうになつて、陸岸へ這へ上がらうともがいた。

遠節は露領當時から、武田と云ふものゝ經營漁場があつた。この漁場にアイヌでは珍しい、分別のある大村嘉助と呼ぶ老爺が雇はれてゐた。

彼は或朝ふと海岸を見ると、一隻の難破船のあるのを發見した。直ちに小船を漕ぎ出して、十名の遭難者を番屋へと收容し、衣類の乾燥から、疲勞の介抱まで、あらん限りの誠意をつくして彼

等を勞はつたのである。

その頃露國官憲は、日本人と見れば、詮議は殊の外嚴しかつた。けれど大村アイヌは、官憲の眼を忍んでは一團を何くれとなく世話をしたのである。家族達やアイヌの驚きは一方ではなかつた。若しもこのことが露兵に發見されたら、たちどころに禍が身に及ぶので、同族達は一日も早く遭難者を追放せんことをせまつた。

災厄に會つた者を只見て助けぬと言ふ事は俺には出來ぬ。敵であらうと、味方であらうと、何人なるは問ふ所ではない——

大村は昂々然としてはねつけたのである。伊集院は彼の言葉に大いに感激した。

——頻死より助けられた恩人に累を及ぼし、家族に心勞をさすのは心濟ぬ次第である。吾々は自ら退島を申し出づるから、御心配あるな——

意を決した伊集院は、自首しやうとさへしたのである。

——一旦お助したのがそれでは無駄になる。船のあるまで忍んで居てくだされ、かくまはれる丈は生命にかけてもかくまつて上げやう——

大村は飽くまでも彼等に對して親切であつた。一同はこの言葉に感泣しつゝ、二十日餘りも滯在したのである。

突如露人の襲擊

或日のことであつた。大村は阿幸へ買物に出かけた、その不在中突如大事件が持ち上つたのである。それは不意に一團が露兵三十名に發見され、哀れ悉く縛されて、マウカの方へ護送されてゆくとのことであつた。この悲報を耳にした大村は悲壯な決心をしたのである。

——隱れ場所まで知らせて置いたのに、見付かつたとは殘念、だがこの儘にして置いては誓つた言葉に對して男がたゝぬ——

大村はその足で直に家へと引き返したのである。けれど家には彼等の姿は何處にも見られなかつた。よし俺が露兵に陳辯するだけ陳辯し、その結果共に捕縛される樣なことがあつても、見殺しにはすまい。同族の者や、家族等が袖に取りすがり、その無謀を諫むるのであつた。けれど奮然と立つた義俠アイヌの大村は露兵の後を追つたのである。

突如聞へたのは三四發の銃聲であつた。すは、やられたかと血相變へて、草駄天走りに驅けつけて見れば、大村にとつてはそれはあまりに恐ろしい場面が展開されてゐた。其處には血を浴びた三十餘名の露兵等は、逃るゝ日本人を追つ取り卷いて、片つ端より屠殺せんとする凄慘な大修羅場であつた。

大村の血は逆上した。よし助けてやらう、彼は勇敢にも飛び込んで行つた。だが哀れには伊集院外二名は既に鮮血にまみれて殺されてゐた。

愈々猛り狂つた露兵等は、苦しみ悶躁へてゐる日本人を又も片端から臺銃で撲り續けたのである。その光景は二度と見られぬ凄慘なものであつた。彼はふと叢の中に今や毆り殺されんとする一人の日本人を見た。果然彼の義俠心はむら〳〵と湧いた。矢庭に一人の日本人をかついで森林に駈込んだのである。露兵等は必死になつて追つかけた。だが大村アイヌは六十餘才の老人ではあつたが森林中の馳驅は到底露兵等の及ぶ所ではなかつた。見る〳〵うちにかけぬけ、とある隱れ場所を見出し、其處に負傷者を隱したのである。更に彼は又もや他の負傷者を救ふべく、もと來た道をひきかへせば、或る者は岩蔭に、或者は谷間に身を隱し、あけに染まつて打倒れてゐた。彼は何にしても露兵の眼をのがれなければならぬと、これら負傷者を再び背負ひ山中にと隱したのであつた。

—何んなことがあつても出ては駄目だ。毎夜遲く食ひものだけは運んでくる。二日でも三日でも、俺の命のある限りあなた達を助けやう——

彼はこう言ひ終るや否や、再び濱邊を指して飛び出した。其處には無慘にも、伊集院太田外二名は滅茶々々になつて殺されてゐた。他の六名を取り逃がした露兵等は、血に飢ゑた惡鬼の如くなほ逃げ失せた殘りの者を銃殺しやうと、草叢をあちこちと搜し廻つてゐた。大村アイヌは茲で見つけられては己までも命がないと、嶺傳ひに背後を衝き拔け、漸く迂回して番屋に歸つた。かくて何喰

はぬ顏で衣服を取替へて、露兵の來襲に備へるため、準備を固めたのである。

露人海馬島を襲ふ

いくら當時日露の國交が斷絶してゐるとは云へ、罪もない邦人等を露兵達は何故かくまでに虐殺せねばならなかつたか、そこには露兵達の憤激を買ふ理由があつたのである。

物語りは遡上る、明治三十八年奉天の大會戰に我軍大勝を博し續いて日本海の海戰にはるばる來征したバルチック艦隊をこれ又物見事に擊破し、壓倒的勝利の甘酒に醉つてゐるときであつた。一部逃れた露艦のうちノーイック號は、遠く根室水道を迂回して、日本海に入らんとするのを宗谷海峽で遮斷され、息むを得ずコルサコフに逃げ込んで擊沈されたことがある。この時乘組の水兵は多く在樺の義勇兵に投じたが、中にはこれに加はることを拒み、西灣内よりノトロを迂回し亞港に逃れる一隊があつた。一行は三十二名で兵曹が之を率ゐてゐた。當時能登呂には露國の望樓と、無線電信局があつた。一團は能登呂を指して、逃れたときは既に望樓は、日本軍の占領する處となつたので、やむを得ずその背後を横斷して白主に出たのである。とき既に携帶の糧食はつき果てゝ、彼等の中には早や歩行すら困難を感ずる者さへあつた。ちやうどこのときである。折から通行中の一人の土人を發見したので、糧食を得る方法を訊ねた。この附近には糧食はないが、少し海を渡れ

ば、海馬島には多數の日本人が住んでゐる。巧みにこれを襲撃したならば、多少の糧食を得られるに違ひない——

土人の一團は食糧の掠奪を敎へたのである。

彼等は直に（今の宗仁）漁場より二隻の三番船をひそかに盜み出し、櫓櫂をあやつり海馬島襲撃にと向つたのであつた。その頃既に海馬島は海賊の集まりであつた。同志會と甲辰義會の二私政廳があり、總て島の政治はこの二つの海賊團に依つて支配されてゐた。島には多數の利尻島民が入り込み盛んにナマコや海藻の採取をやつてゐた、その平和さは、露國の支配下にあるとは思へぬ程非常に賑やかであつた。

或る日沖合に當つて二つの怪しけな船影が現はれた。島の人達が氣づいたときには、それは確然と露兵の乘れる船であることが判つた。それ露兵の襲撃だ、油斷してはならぬと警報はまた〻くうちに全島に響き渡つた。島の人達は何づれも海上では恐怖を知らぬ海賊共ばかりである。露兵などの如き者何程のことやあると、彼等は手に〳〵武器を携へ、今や遲しと待ちかまへてゐたのである。ちやどその頃甲辰義會の一團は、海豹島の密獵に主力を注ぎ、島には僅か三、四人の留守番を置いたに過ぎなかつた。一方同志會は、日露の戰ひで沿岸を航行する船はなく、毎日仕事もなく、幹部から陣笠の浪人達までウロ〳〵として遊んでゐたものである。遂に貯へた食料もつき果て茲四五日のうちには一時退島の息むなき破目に陷つてゐた折柄とて、この露兵襲撃にはその狼狽は

又一方ではなかつた。

これ等一團の中に志田會長の一の子分と云はれる相川光藏と云ふ、腕力、識見共に傑出した豪傑があつた。彼はこの不意の椿事に突嗟の妙案を考へ出したのである。彼は一團に向つて叫んだ。

——この機會を逆用し滅びんとする同志會を支へなければならぬ。總て吾に委せよ——

大聲叱咤して、慌てふためく同志を激勵したのである。平素大言壯語してゐた、志田會長とその部下達は早くも逃げ仕度をしてゐたが、この激勵に漸く氣を取り直し、相川の指圖に從ふことになつた。

如何に露兵でも理由なく、暴逆を振ふことはあるまい。吾々は踏止まつて善處すべきであると、夫れ〳〵部署を定め、彼は一團の代表となつて、海岸に露兵の上陸を出迎へて歡談を交へたのである。

露兵等は万一を豫想して、戰ひの準備をして來たものゝ、隔意のない相川の應待に、張り切つた警戒も解き、更に快よく與へられた糧食の船積にかゝつたのである。このときであつた。彼等の油斷を見すかした相川は、かねて打合せた一同に向つて、それ！と命令を下したのである。岩角に隱れてゐた一團はこの命を受けるや、忽ち船舶襲撃用の爆猛彈を投じた、更に續いて小銃の一齊射撃を加へた、爆彈は岩角に打ち當つて、轟然たる響きとゝも爆發した、破片を身に受けた四名の露兵は直にその場に即死し、他の二十八名の露兵等も、この不意の襲撃に、應戰する遑もなく、數名の

負傷者を出して、命がら〳〵沖合へと逃げだしたのである。（今の船入澗附近）僅かばかりの糧食を得たものゝ、同志四名までも殺され、剩へ數名の負傷者まで出した露兵達の憤激は一方ではなかつた、からうじて逃げ歸つた彼等一隊は更に、北行して遠節の番屋に入り込んだのは、その翌日であつた。

×　　×

一團はどや〳〵と大村アイヌの家に入り込んだ、十名の日本人が爐を圍んで暖を取つてゐる。日本人と云へば、ノーイック號が爆沈され、身は逃れて海馬島の襲擊から、重ね〳〵の憂き目に會されてゐることゝて、彼等の形相は物凄い程までに憤怒に燃えた。やがてそれが復讐の念に變つたのである。

一方伊集院はこの突然の闖入者に狼狽は一方ではなかつた。今はたゞ武器とてもなく、戰へば殺されるに違ひない。早くもそれと一團に目配せして、裏口から逃走せんとしたが、それが却つて露兵に疑惑を抱かしめた。彼等は矢庭に十名を取り圍み、銃口を揃へてあはや銃殺せんとしたのである。言葉も通ぜぬ伊集院は、最早これまでと彼等のなすが儘にするより仕方がなかつた。

やがて十名は肩銃の露兵に取圍まれ、屋外へと引き立てられた。若しもこの時露語に通じてゐたアイヌが不在でなかつたならば、彼等は無事に此場を、切り拔けられたかも知れぬ。だが運命の神は何處でまも皮肉であつた。言語不通の仇同志、而も手眞似、足眞似の辯解は、寧ろ彼等の感情

を惡化するこそすれ、決して有利には導かなかつた。誤解は益々深まつていつた。哀れ引立てられてゆく十名の足どりは、とぼ〳〵として力ないものであつた。もうこれまどと悟つた彼等は、途中隙を見て俄然逃走を企てたのである。かくして、こゝに一大修羅場が展開したのであつた。

大村アイヌの義俠

四人を銃殺し、六人を取り逃した露兵等の一隊は、再び遠節の番屋へと引返へした。屋内に入つて見れば、つい先刻負傷した日本人を背負つて、密林中に姿を隱したアイヌが居たのである。露兵等は烈火の如く憤つた。

——なぜ日本人を助けたのだ、何處へ隱した——

猛り狂つた一隊は銃劍をつきつけて、詰り寄つた。豫ねて覺悟をしてゐた大村は、少しも驚かなかつた。

——それはあまりにも迷惑な話だ、自分は今朝本斗へ出かけて、今歸つたばかりである。遭難した日本人を助けるため、一時世話をしたのみで、明日でも眞岡へ屆けやうとしてゐた處である。勿論逃げるのを助けた覺えもなければ、またラネトイにも決して行かぬ——。

彼は憶面もなく傲然と言ひ放つた。だが遠目ながらも見覺えのある露兵は、彼の辯解には耳もか

さなかつた。

辯解すればする程、ます〳〵彼等は猛り狂ふた、だが大村はいよ〳〵悠然たるものであつた。

——顔に見覺えがあるとは奇怪なことだ。吾々アイヌが露助を見れば、同じ一つの顔に見える。それと同じやうに、露人がアイヌをみれば又同じ顔に見えるに違ひない。つまらぬ人違ひは迷惑だ——。

彼は平氣で突刎ねたのである。遂に業を煮やした露兵は銃に彈を裝塡し始めた。大村はもうこうなればどうにでもなれ、と棄て鉢になつた。矢庭に眞つ裸となり、土間に大の字に寢轉かつたのである。

——これ程辯解しても聞き入れなくば、突くなり斬るなり勝手にしろ、俺も男だ。男がこうと云つたら二度と口は聞かねぇ——。

大村は胸を叩いて身を投げ出したのである。流石の露兵も彼の大膽な擧動に、度膽をぬかれ、斯くまで言ふなら嘘言ではあるまい。さう言へば先刻遠目で見たアイヌも相貌は酷似してゐるが、着物は全く違つたやうだと、遂にその無禮を謝して、一同はマウカへと向つたのである。この計畫で首尾よく成功したアイヌの大村は、その夜より時を違へず、山中の隱れ場所へ糧食を運び、負傷者へアイヌの藥である草根木皮を煎じては、親身も及ばぬ介抱をしたのであつた。幾日か經て、彼等の傷も漸くにして快方に向つた。或る日のことである。利尻の海賊船が遠節へ入港したので、この船に賴んで生殘つた六名を、日本へと送還したのであつた。

海賊の雄圖も空し

愈々一行は樺太を去るときが來た。利尻を船出するときは、伊集院團長と共に十名ではあつたが團長と同志三名は、無慘や露兵の手にかゝつて殺され、漸くに生きのこつた六名は、今敗慘の身を横たへて空しく歸つて行くのである。見送る大村よりも、二度までも助命された彼等一團の感謝はどれ程であつたらう、一同は大村の手をとつて男泣きに泣いた。船は陸岸を離れ、船影が見えなくなるまで大村アイヌは汀に立つて、消へ行く船体をぢつと見つめてゐた。何時しか彼の眼には、嬉しさのあまり玉のやうな涙が宿つてゐた。

附記

いつしかこの事件は當時沿岸に出沒する海賊船仲間に、次から次へと知れ渡り、遠節のアイヌは異端者ではない、安全だとして避難の度毎に同港へと集まつたものであつた。その頃沿岸の各漁場は殆ど海賊の魔手が伸び、こと毎に荒されたものであるが、遠節の番屋だけは「荒してはならぬ」と互に相戒め爲に莚一枚をも持去られたことがなかつた。

その後大村アイヌは、虐殺された四名の死体を懇ろに埋葬し、その上に一本の墓標を立て、命日が近づ

くと新らしいイナホをさして祭つたものであるが、大正三年の春ふとした病で死んでしまつた。大村の死んだ後は誰一人として墓の手入れをするものとてもなく、いまは朽ち果てゝ、墓標が叢のなかに淋しく當時の模樣を傳へるかの如く、風雨にさらされて立つてゐる。尙現在海馬島に野狐が二百余頭棲んでゐるが當時海賊團の團長志田力二が、一隅の狐を放つたことから播殖したものである。（トテコロアイヌ談）

悲しみは殘る

北名好の海岸

失戀に泣き死んだ

アイヌとメノコの

悲戀物語り

北名好の海岸は一面氷が張りつめて、師走（明治四十二年）の嚴寒はひし〳〵と身にしむ程の痛さだつた。物凄い音を立てゝ、吹雪は夜となく晝となく幾日も續いた。今夜もまた吹くのかなあ、と酋長のスタリアイヌの一人息子の太吉は、爐端でケリ（アイヌの沓）を拵へながら獨り言を言ひつゝ、吹雪の音にぢつと耳を傾けてゐた。太吉はこの部落のアイヌ青年のうち最も頭が良かつた。數多い若者のうちでは常に太吉の意見が尊重され、長老達も彼には一目置いてゐた。それに太吉は男らしい顏と、体と隆々とした腕を持つてゐた。だから、村のピリカ、メノコ達には太吉の存在は憧れの的だつたのである。

「太吉さんとならと」と云つて、彼の周圍を取りまくメノコは隨分多かつた。このうちで村の長老の娘であるシグヂと云ふ一人美しい娘がゐた。シグヂは亦太吉と同じやうに、村の若者たちにとつては話題の中心であり、憧れの存在だつたのである。

いつしかシグヂは數多い村のメノコたちを一蹴して、太吉との間に戀を語るやうになつてゐた。シグヂは十八才、太吉は二十四だつた。二人の間は日と共に進行して行つたが、親達も寧ろ喜ぶかの如く默許してゐた。軈て結婚させねばなるまいなどゝ、双方の親達は仲の良い二人の間を見ては心からその將來を祝福してゐたのである。

太吉は或る夜、小屋の外でシグヂへ婚約の印として、サヤに美しく彫刻したマキリを贈つた。雪が消えたら結婚式を擧げやう、二人は確い約束を取り交したのである。小さなこのアイヌ部落には、もう二人の間は評判になつて至る處で、この噂で持きりだつた。そして數多いメノコ達の中には失戀の痛手を受けた者さへ數あつたほどである。

×

太吉はケリを造りながら今宵も又シグヂのことを考へて、獨り微笑んでゐた。太吉は明日父と共に、熊とりに出かけることになつてゐた。この吹雪ではどうして出かけられやう。彼はふと吹雪の音をきゝ、喜びも何時しか憂鬱に變るのであつた。父も母も妹も寢靜まつたか、かすかないびきを立てゝゐる。熊とりに使ふべく造つたケリも出來上つた。明日は晴れるやうにと、火のカムイに祈りながら、

×

エゾのやうに凶くなつて、やがて深い眠りに就いたのである。太吉は未だ若年に似合はず、熊とりの名人だつた。熊とりにかけては村一番だと云はれてゐる、スタピオなども、太吉の鮮かな腕前とその度胸には感服してゐる一人であつた。

その翌日はさしもの吹雪も忘れたかの如く晴れて、太陽は白雪の上に銀色にキラ〳〵と輝いてゐた。太吉は父と共に新らしいトッカリ沓を穿き、銃を肩に山へと出かけた。そして物凄い程の巨熊を一頭射止めたのである。村では彼の評判は愈々高まつて行つた。けれど太吉とシグヂの間は何時までもその幸福は續かなかつた。やがて身の破滅が二人の上に被ひかぶさつてくるとは、神ならぬ身の知る由もなかつたのである。

×

その年は何時になく春の訪れは遲かつた。四月だと云ふのに肌寒い北風がピウ〳〵と吹いて、時折みぞれまぢりの雨が降り、又吹雪になることさへあつた。けれど地上の春は容捨なく首をもたけ、處々の雪も融け大地からは、若芽が萠え春がきたのを知らせるかく如くだつた。アイヌ達は永い冬ごもり生活から脱れて、漸く生きた思ひに返るのであつた。その頃北名好には日本人がボツ〳〵入り込み、平和なアイヌ部落（部落と云つても極めて少數であつた）にも民族的の壓迫が絶へず加へられるやうになつた。かくて、早くもクシンユタン（楠溪町）とウラジミロフカ（豐原）から來たと云ふ日本人で、福助と云ふ藝者と今助と云ふ酌婦があつた。二人は一軒よりないこの村の

料理屋で物凄い羽振を利かしてゐた。福助は年増だつたけれど、評判の美人だつた。二人の存在は常に村の若者連の話題を賑やかしてゐたものである。

その頃太吉は和人の經營する漁場に雜夫として雇はれてゐた。影日向なく、せつせと働くので、何んとなく世話の仕甲斐のある男として、親方に特別可愛がられてゐた。或る夜親方は太吉を連れて村の料理屋へと誘つた。太吉にとつては生れて始めて見たのが、この料理屋だつた。美しい着物や模樣のついた帶、厚化粧した女、それは太吉にとつては總てがあまりに麗しい世界に思はれた。汚い爐端でドブロク（濁酒）を呑む自分達の生活、それらと比較すると太吉には確に美しい夢の世界だつたに違ひない。太吉はこの料理屋で四人居る女のうち、たつた一人の藝者として女王の如く振舞つてゐる福助を敵娼として樂しい夢を結んだのである。

寢物語りにきく福助の言葉はどれ程、太吉の胸を燃した事であらう。なまぬるい呼吸が太吉の頰に當ると、太吉はもう夢の世界をさまよつてゐるやうな氣がした。其はたつた一夜の交りだつたけれど、太吉の戀心は果然燃え上つた、福助も亦同じだつた太吉はアイヌにしては餘りに美しい男、賴り氣のある男、初心な男、さう思ふと矢も楯もたまらない程いぢらしかつた。福助は太吉より三つ年上の二十七だつたが、年に似合はぬ艶な美しい女だつた。だから年より三つも四つも若く見え聲なども若々しかつた。二人は一夜限り何んの未練もなく別れゝば、此物語りはこれで平和に解決がついたかも知れないけれど、運命の絆は太吉を押しやるところまで押しやらなければ、氣がすまな

かつたのである。

×

二人の間はそれ程會ふ機會は無かつたけれど、何時とはなく進行して行つた。そして今ではもうお互に離れられない間柄となつてゐた。福助の朋輩今助は、最初は二人の間の戀の仲介をやつてはゐたが、燒きつくやうな二人のむづまじい仲を見ては、淺ましくも嫉妬の焰が燃えたのである。けれどどうにもならぬ二人の間を見ては淋しくも諦めねばならなかつた、だが女の一念は恐ろしい意地づくでもとつて見せると、こう決心した今助は遂に恐ろしいことをたくらんだのである。

女同志の意地張りは陋劣で醜い、殊に海千山千の廓の女と來ては、その手段は恐ろしいまでにとけとけしかつた。先づ太吉を自分のものにするには、どうしても福助を殺さねばならない、彼女は考へた。それが最善の手段であると……。

×

かくて今助は何處から手に入れたか、毒藥ストリキニーネを菓子の中に入れ、これを戀敵福助に食べさせやうとしたのある。けれど、今助は考へた、毒殺！思つたゞけでも恐ろしいことだつた。心の何處かに理性が働いたのである。彼女は手を振はせながら、じつとその菓子を見つめてゐたが「さうだこの菓子を醫者の處に持つて行かう、分析して毒が入つてゐると證明してくれゝば、それでいゝ、福助が秘にその菓子を喰せやうとしたのだ、さう云つて、福助をこの廓から追出さう」淺

薄にもこう考へた今助は、血相をかへて醫者のもとに走つた。醫者は菓子の中に毒が盛つてあることを證明した。だが呑まぬさきから毒を混入してあることが判るとは不思議である、何か其處に理由があらうと、取調られ遂に今助は包み切れず一切を自白したのである。

×　×　×

こうしたことがあつてから、樓主も二人をこの儘置くわけにはゆかぬとし、福助と今助の二人を別れ〳〵に、夫々小樽と函館に鞍返させることになつた。その頃太吉と福助の間はもうどうにもならないものになつてゐた。會ふには金が要る、けれど太吉には金はなかつた。せつせと働いた金や熊を獲つては賣つた金で會ふ瀬を樂んではゐたが、それも永くは續かなかつた。一方戀人メノコシグヂは、太吉のたゞならぬ態度に小さな胸を痛めてゐたが、燃えた太吉の戀心は容易にシグヂの心では消すことは出來なかつた。泣いて、泣いて、泣き明した夜も幾夜かあつた。けれど何時かは目の覺めるときもあらう、キット私の懷へ歸つて來る、それを最後のはかない望として淋しくも慰めるより仕方がなかつた。愈々太吉と福助が別れねばならぬ日が來た。太吉はどんなに悲しかつたらう。だが、純情な太吉に比べて、すれ切つた福助の心は案外に冷靜だつた。けれど、一途に思ひつめた若者、アイヌ太吉の戀情は容易にさめなかつた。これが太吉とそしてシグヂにとつて最大な不幸と身の破滅が來るとはあまり神の仕打は無情だつたのである。

×　×　×

いよ〳〵別れねばならぬ　云ふ最後の日は來た、太吉はその前夜まんじりともせずもだへ苦しんだ。夜遲くまでかゝつて、慥へたマキリを懷に、漸く夜が明けたか明けぬうちに、早や飛び起きて海濱へと出たのである。そして海濱に繫いである一隻の川崎船にもたれながら、彼は今にでも泣き出しさうな暗い憂色に閉ざされるのであつた、何時も聞く漣の音も今日ばかりは悲しい聲で泣いてゐる樣に感ぜられてならなかつた。この船で愛する女が遠い國に歸つて行くのだ、もう二度と會はれぬ、こう思ふと太吉は矢も楯もたまらなかつた、力一杯船端を蹴つて、矢庭に砂濱の上に寢ころがつた、そして今にでも息を引きとる斷末魔の苦しみのやうに、砂の中で氣ちがひの樣にもがき廻つた。

別れの時刻は、刻々と迫つて行く、かつてシグヂに與へと同じ樣なマキリを福助に贈つた「これを見たときはキットこの哀なるわたしを思ひ出して下さい」太吉は眼をまつかに泣きはらしながら福助の手を握つた。

福助も亦小さな鏡を出して「これは私の姿だと思つて下さい」さう云つて、太吉に最後の贈り物をしたのである、來年は必ずまた來るから……」とあての無い約束をした福助はやがて小船の人となつた。

船は次第に遠ざかつて行く、太吉は悲しさのあまり聲をあげて泣いた、そしてザブ〳〵と海の中へ入つて行つた。水は膝から腰胸と、やがて頸の處まで浸つた。太吉は水面を叩いて大聲で泣ける

だけ泣いた、福助の振るハンケチも次第に小さくなつて、船はいつしか地平線の彼方に沒してしまつた、太吉は砂濱の上で半狂亂になつて、福助の名を呼んだ。けれど答へるものはたゞ波の音ばかりであつた。

太吉はその夜家には歸らなかつた、翌朝濱邊に一個の死体が無慘な溺死体となつて打ちあげられてゐた、勿論その死骸は太吉の變つた哀れな姿だつたのである、戀人の後を慕ふて、太吉はその夜海に入り足を深海へすべらし遂に溺死してしまつたのである、こうした悲慘事があつてから三日目またも悲しい事件が突發した、それは太吉の戀人シグヂの自殺だつた、それは丁度太吉の死骸があけられた同じ濱邊に、同じ場所に言ひ合せた様に打あけられてゐたことだつた、シグヂの死面は朧人形の様に美しかつた、結婚の日を夢見て、それも果敢ない露と消えたシグヂの心は太吉のそれよりもつと悲しかつたに違ひない……部落の人達は共に悲戀に泣いて死んで行つた二つの死骸を同じ場所に埋て心から冥福を祈つたのである、時は明治四十二年六月二十二日、梅雨がしよぼ〳〵さびしく墓場の土を濡らしてゐた。

尙福助は四十二年三月名好に鞍返したのであるが、それまでは豊原の角万や幸亭に藝妓をつとめてゐた、今助は當時大泊の山形屋といふ小料理で小紫といつて酌婦をつとめてゐたと云ふことである。

愛郎海岸の慘劇

露人六名虐殺さる
アイヌ親子の最後

日露の風雲急をつけ、兩國の國交は日に〳〵險悪の度を加へつゝある明治三十六年の年も押し迫る十二月の初旬であつた。

當時アイルプ（愛郎）に北海道の漁業家相原某の經營する鰊漁場がこのアイルプに一ケ所あつた。漁夫達は九月の聲をきけば經營者相原親方と共に北海道へ切揚げ、その留守居番にアイヌ人山崎松之助と妻のハル（メノコ）と長男勇吉にサダ、ナカの二女都合家族五人暮しで、倉庫内にある漁具や米噌の見張をするのが彼の仕事で、親子五人は水入らずの、平和な家庭だつた。長男は未だ頑是ない十四になつたばかりであつたが、年に似合ず利口な子で、何くれとなく父松之助の手傳ひをしてその片腕になつて働いてゐた、父が酒にでも醉ひしれると自ら提灯をもつて倉庫内を見廻り、大人も及ばぬ様な仕事を平

氣でやつてのけた、薄暗いランプの下で親子五人は夕飯の食卓を圍みながら、雜談に花を咲かせてゐた。外は猛烈な吹雪である。もうその頃、アイルプ海岸一帶にかけて大山の樣な氷盤が張りつめてゐた。時折この氷盤もヤマセ（山嵐）で沖へ流失することはあつたが、直ぐ亦何處からともなく流れて來て張りつめた。

——この吹雪は何時になつたら止むのだらう——松之助は窓一面に吹きつける雪を見ては、獨りでつぶやいた。

その頃露國の偉令は全島を壓し、爲にロシヤ官憲の勢力は物凄い程までに伸展してゐた。無智なアイヌ達は、屢々彼等のためになすがまゝに酷使され、虐待されてゐたのである、宛然それは彼等にとつて全く無警察狀態だつた。この暴戾あくなき官憲の重壓に對して、若し反抗したりでもすればたちどころにその反動的重壓が打ち重なつて、アイヌ達は苦悶のどん底に叩きのめされるのである。アイヌ達は憤激した、機會あらば彼等に復讐せんと、機の至るを狙つてゐたのである。

×　×

三十六年の十二月は殆ど吹雪の日のみ續いて、晴れた日などは全く見られなかつた。山崎一家にとつては憂鬱な日が幾日も續いて、軈て其年も暮れて、明けて明治三十七年の一月を迎へた。その頃既に日露の國交愈々日を逐ふて險惡となり、在留官憲や露人の間には今にも戰ひが始まるのではないかと、頻りにこの噂で持切つてゐた。越えて二月の下旬となつた。永い冬籠り生活で露人達の

間にもそろ〳〵食糧の欠乏さへ生じて來た。至る處で露人の食糧掠奪が開始され、これを拒まんとしてアイヌ達は血みどろの爭鬪を續けたのである。こうしたときに當つて、かねて、榮濱に居住する露人六名が、相原漁場の倉庫に目をつけ、食糧を掠奪しやうと機の至るを狙つてゐたのである。遂に機は到來した。

いくら當時の樺太とは云へ、三月の下旬ともなれば雪もそろ〳〵消え、鹿の子まだらな大地からは若芽がボツ〳〵首をもたげてゐた。一面に張りつめた氷盤も何時の間にか流失して、海はまだ荒れてはゐたが、青海原と化してゐた。

三月二十二日、その夜は死んだやうに靜かな晩だつた。突如この相原漁場を襲つた六人連の强盜があつた。勿論榮濱の六名の露人であつた。ピストルを亂射して悠々と鹽、米、鹽鮭などを、船一杯積み込んで强奪して行つたのである。あまりの突然の出來事に、さしも豪膽な山崎も指をくわいてこの暴擧を傍觀してゐるより方法がなかつた。山崎は無念の涙を流した。あまりと云へばあまりの暴擧、彼はこのとき悲壯なる決心をしたのである。相原親方になんと申譯しやう。若し今度再び襲つたら、一人殘らず皆殺にしてやらう。若しこの儘襲擊しなかつたなら、こちらから出かけてこの復讐をしてやらうと、彼の眉宇には悲痛な決心の色が現はれてゐた。その翌晩だつた。いつも嬉しげに夕餉の食卓につく松之助も、今宵は浮かぬ面持で好きな濁酒さへ呑まなかつた。

——俺は何としても露助め、仇をとつてやらねば第一に親方になんと申譯する、必ず殺してやる

んだ——

彼は何時になく怒氣を含んだ口調で吐きだすやうに云つた。

——困つたね、でも殺すなんて、そりや可愛想だよ——

妻のハルは流石に女らしい優しい言葉で慰めるのであつた。次女のサダと末子の五つになるナカは何も知らずに母親の膝にもたれて、すや〳〵と眠つてゐる。勇吉はなにかしら不安の面持でぢつと父の顔を覗き込むやうにして聞いてゐた。恰度それは折重なつて行く不安が、一つ〳〵重壓を加へられて行くやうに……一家は暗い寂寞氣に包まれて行くのであつた。

×

こうしたことがあつてから六日目の夕刻となつた、松之助も最初は復讐の念に燃えてはゐたが、妻の慰めでだん〳〵その憎悪もわすれかけ様としてゐたとき、突如小船に乘つて露人六名がまたもこの漁場目指して襲撃したのである、松之助の憤怒は一方ではなかつた、けれど彼は默つて倉庫の鍵を渡した、目には早や涙が宿り引締つた唇には何かしら悲壯な決心が現はれてゐた、露人はいそ〳〵と荷物をかつぎやがて船に滿載して陸岸を離れ様とした……このときである、松之助は血相變へて漁場内に入つたと思ふやかねて用意の獵銃を取り出し實彈を裝塡して物も云はずに一團を目がけて發砲した、轟然たる音と共に露人の一人は海中にもんどり打つて落ち込んだ、續いて發砲した彈は一團の首領に當つて、アッと云つたまゝ胸からはどす黑い血を吐いて船端にバッタリ倒れ

た、殘る四人はこの突然の襲撃に大いに狼狽し一目散に逃走した、或者は小屋の中へ逃げ込み或者は鍊釜の中に隱れて手を合はせて助命を乞ふた、猛り狂つた松之助は情容捨もあらばこそ、片ばしから打ち殺した逃げ行く後から背を打ち貫きあまつさへ臺銃で撲りつけては殺した。勿論伴の勇吉も父と共に一人の露人を叩き殺した、彼等六人は何等抵抗せずして哀れ六つの生命はアイロプ海岸の露と消えた、死体には石をつけ海中に投げ込んだのである。だが神はそのまゝに棄てゝは置かなかつた。死体は時化の爲何時の間にか海岸に打ち上げられたのである。遂に見廻りの露國官憲の知る處となり、死体遺棄の手傳ひをした市といふ土人と外一人都合三名は捕へられて、コルサコフ(楠溪町)の監獄へ護送されたのである。

×

妻のハルは引かれてゆく夫の打ち萎れた姿を見て半狂亂につた。髪は亂れ、聲は震へ夫の足にしがみついて泣きつゞけたのである。息子の勇吉も官憲に手を合せて助けてくれと聲を擧げて泣いた、けれど無情な官憲は一瞥も與へず二人を足蹴にして引きたてゝ行つた。頑是ないサダとナカの二人は父さん何處へ行くのと云つて後を追つかけて泣きさけんだ、もうこれが親子にとつて永遠の別れであつたのである。松之助は、殘した妻や子供は不憫であるが、それよりも罪のない二人までも監獄に投ぜられるのは耐へ得られぬ苦痛だつた、どうせ監獄に行けば死刑にされるに違ひない、おめ〳〵露人の手にかゝつて死ぬよりは一層自殺しやう、自殺すれば罪は己獨りのものになる、こ

う悲壯な覺悟をした松之助は二人のアイヌに噛いた、彼は矢庭に舌を嚙み切つた打ち倒れた、口からは眞紅な血が流れた、彼は苦しみ悶えながら妻や子供の名を呼びつゝ死んでいつた。

×　　×

夫松助が引きたてられてから數日は經つた、アイルプ海岸に四ッの死骸が汀に打ちあげられてゐた。それは夫の後を慕ふて死んだ妻と道連にされた四人の哀れな姿であつた。

附　記

土人市と外一名はコロサコフ監獄に投ぜられたが、日本軍のコルサコフ占領と同時に囚人達は全部赦放された、勿論市と外一名の土人は出獄を許され皇軍メレイ(女麗)に上陸後日本軍の道案内者として富内方面より軍川に至り我軍のために種々便宜を與へた、尙ほ松之助の死体は一說には家族が引とつたとなつてゐるが家族ではなく、友人(相原漁場の若者)が引取りアイルプにこれを埋葬した、相原氏はこれを聞き後年日本領になつてから松之助と妻子の爲めに墓地に石碑を建設しその英靈を祀つた、現在もなほその墓石があると云ふことである。松之助の母はアイヌで父は日本人この間に生れた混血兒であつた。

樺太開拓四百年史

營經太樺の藩前松
？略侵太樺の國露
政暴の前松た れ呆

松前城（北海道福山）

（明治二十年撮影）

何時の頃から日本領か

樺太と日本國との關係は、古事記其の他の古文書にもあるほどで、餘程以前——恐らく神代の昔から絶えず交渉はあつたものと思はる。けれども歴史上確實に、樺太は日本領であるといふ事を、主張出來るのは松前藩の樺太經營以後の事に屬する。從つて考古學を離れた最も古い樺太の事實物語は、此處を出發點にするよりほかはない。

松前藩の本據はいふまでもなく、今の北海道の地であつた。從つて通常樺太は北海道に從屬して經營されたと考へられる。けれども事實は必ずしもさうではない、却て北海道の中部乃至北部より注意深く經營された事が、事實に於て瞰取される。而して松前藩が本據の北海道より、却て樺太を重要視した理由といふのはこうである。

×　　×

徳川家康が天下を統一すると共に、諸大名の整理を行ひ、極めて巧妙なる方法に依つて、各地大少名の勢力の尨大ならん事を豫防した。殊に外樣大名に對して常に細心の注意を怠らなかつた。

松前藩は勿論外樣である。松前氏は徳川の創業に對して、何等の功績がなかつた。初代の松前慶廣が、文祿二年肥前の名護屋で、（朝鮮征伐の最中）豊臣秀吉から蝦夷地一帶の征服私領とする事を承認されたのを慶長四年に到つて家康がまだ秀吉の旗下に逢つたその時、慶廣は蝦夷の獸皮（恐らくオットセイ獸の毛皮だらう）製の陣羽織を着てゐた。是は物好きな家康が所望したので快よく

與へた。それから家康と慶廣は親交を結んだなどゝ云はれてゐるが、勿論かゝる事位で家康は行政上の根底をまげやう筈はない。家康は松前藩に對する待遇は非常なものであつた。そして「家康の天下になつてから、慶廣が彼に引見した際松前の姓と共に秀吉に依つて認められ、領地をも與へられたが更に左の如き三則を嚴達したと云ふ

（以下原文）

定

一、從諸國松前へ出入の者共、志慶守慶廣へ不相斷蝦夷と致商賣候儀可爲曲事の事

一、志摩守へ無斷にて渡海賣買到候者急度可致言上の事

一、對蝦夷人非分の儀申立候者可爲曲事

右條々若於違反の輩は可處嚴科者也

慶長九年正月二十七日

御朱印

是は一面松前氏に權限を附與した事にはなるが、他面内地人が多數蝦夷地に渡り、蝦夷地の開拓に依る松前氏の勢力が、自然に抹殺されるのを豫防したものである事は爭はれぬ。松前藩公は始祖の

武田信廣を始め中頃までは、代々、目から鼻へ抜ける偉物ばかりであつた。彼等は家康並に幕府の方針はもとより見抜いた。見抜いたからと云つて手を拱てゐるには、彼等は餘りに才がありすぎたのである。

——少數の人手によつて、最大の收益を擧げなければならぬ。最大の收益を擧げつゝ、富强の證を天下に示すやうな方法をとつてはならぬ——

之が松前藩の藩是であつた。それが爲には如何に北海道に廣大肥沃な土地があつても、是を開拓する事はできない。人手が少いといふ點に於て、又開拓された田畑が巡視の幕吏の眼に入り若し松前藩が廣大な耕作地を有する事を知れば、直に幕府から多額の課税が强られる。のみならず次第によつてはお國替にならぬとも限らぬ。さうなればまるで松前藩は鳶にさらはせる爲に、油揚を苦勞してもつて歩いたかたちになる。其處で彼等は陸地から眼を轉じて海に向けた。海！。無限の海の寶庫は一擧手一投足の勞で利用される事を待ちこがれてゐる。斯くて松前藩の財源は海に於て得る事に方針を定めた。最初は渡島を中心に、間もなくその主力を樺太に移動した。是が我樺太の爲には幸であつたのかも知れない。

松前藩が如何に北方の有利な事が天下に知られる事を恐れたかは、あれ程の巨利を博しながら樺太並に北方に關する文獻を殆ど殘さなかつた事に依つても知れる。慶廣が秀吉に會つたのは文祿三年である。而も實際に松前藩の基礎をつくつたのは、慶廣の祖父の武田信廣である。從つて餘程以

前から北海道並に樺太（宗谷に行つて對岸の樺大が目につかぬ者は恐らくないから）に就ては相當知る處があつた筈だ。處が松前藩が樺太に關する記錄をつくつたのは、文祿より二百年以上も後の元祿十三年である。それも幕府から要求されて止むを得ず「松前島蝦帳」といふ粗略で出鱈目極まる記錄を作つた。就中呆れざるを得ないのは、寛永以後に於て幕命により藩士某を探査に遣はしたその報告書に「樺太へ行くまでには荒海や大河があるので到底調査が出米ぬ」と報告してゐる事である。幕末になつて幕府直轄になつた事は二度あるが、直轄表面上の理由は北邊多事とあるが、其實は松前藩の老獪なる處置にあきたらず思つた閣老の（阿部正弘等）に基づくと云はれてゐる。兎に角松前藩の藩是は一方に於て樺太を利したが、他方に於て樺太を害した事も爭はれない。

×　　×

既に藩是は漁業經營にありとは決したけれども、藩自から松前侯の名を以て、漁撈を直營する事は到底不可能である、まして漁獲物を精製したり、水産物の專賣を行ふと云う事は、尙更不可能である。其處で發案されたのは、請負制度に依る收利法である。卽ち民間の紳商に一漁業區域の漁業を專營せしめる特許税として、各漁區毎に相應の税金を納入せしめる事にした。そして藩士に給與する俸給祿高の如きも、大小相應漁業區を與へ、其處から生ずる特許税に依つて各自の衣食を辨じさせた。其漁業税は所謂運上金と稱するものである。其頃藩直轄の漁業區で、運上金の大なるものは年に千二百兩からに上つたと云ふ。

こうして少からざる運上金を仕拂つて、漁業權を得た紳商は、之を又他人に貸附し幾何かの權利金を懷にした。從つて利益は上層遊閑階級のものに多くせしめられ、直接漁撈に從ふものゝ得る處は、殆どいふに足らぬものであつた。故に直接漁撈に從事するものは殆ど無智な土人に限られ、彼等は所謂内地人の資本家階級からは、頗る苛酷な壓迫を受てゐたものゝ樣である。

而して全藩の士庶は皆此の漁業特權を世襲し、毫も相侵犯する事をゆるさなかつた。彼等は拱手無爲で、何等衣食に心を勞する必要なく、奢侈の限りを盡した。

此の頃の松前風俗の豪侈であつた事は、實に素晴らしいものであつた。當時福山掟なる藩法を設けて、藩主は節儉を强ひたが、結局それは腐敗物に蓋をして、其臭みを匿さんとしたに過なかつたと云はれる。けれど逐年增加する人口は、常に一室の地區に安穩たる事を許さなくなつて來た。元祿年間に於ては、北海道の南沿岸一帶は、特許漁業が區分されて、早や寸分の餘地さへもなくなつてゐた。

此處に於て此の人口食糧問題解決策として、着眼された松前樺太進出の嚆矢だとするのは、前述の如く誤りである。これも以前に於ても、松前藩士の何人かは、樺太の漁場を經營して居たことは明かである。『蝦夷風俗彙纂』と云ふ書の中に

唐太は松前若狹守の餘地であるが、昔は彼の島に渡る者は全くなく、寶曆年間から松前家が、彼の島に手をつけ寛政の初め頃に到つて、運上家全体の家屋を設け、家來を少々派遣することになつ

た。

と書いてあるが、是は著者が迂濶に松前藩の狹獪な手段に乘ぜられて、書いたものだと云はれてゐる。而して最も信用すべき松前家の記錄を見ると、樺太に人を派遣したのは寶曆二年であると記されてあるさうだが、是も亦あてにはならぬ。何となれば、松前蝦夷記には松前公廣が家來の甲道庄右衛門なる者を樺太に遣はしたと書いてあり、福山舊事記と云ふ書物にも、甲道某の復命であるとして、

樺太への海、川、山多く難所隔り申候由、此外確なる儀はしかと相知り難く、

と云ふ事が揭げられてゐる。此公廣と云ふのは、德川三代將軍の家光に寵愛された人で、少くも元祿年間以前の藩公でなければならぬ。又松前家から江戸の閣老に提出された「松前島鄕帳」の製作は元祿十年であるが、カラトの地名は明かに錄せられてゐる。それから三年を經て地圖を提出してゐるが、其地圖は松前氏自身の本據である北海道は、今の石狩川を以て兩分され二個の島からなつてゐる樣な杜撰極まるものであるが、樺太は比較的眞に近く、且島として揭げてある。或は出鱈目が偶然本物に合致したのかも知れぬが、兎に角少くとも一二回視察を經て製圖されたものであらう事は疑ひない。

×

更に此頃奥羽地方の漁夫德五郎といふものが、ノトロに漂着したことがある。又正德年間には、

×

兵庫の船頭芝屋長太夫といふものが、アニワ灣に漂流し、偶然にも灣内に漁族の多いことを發見し奇貨措くべしとして、直に松前氏に漁業税を納め、第一回の出稼ぎ漁業を試みた。その後亞庭灣の漁場を、千兩の場所と稱したことがある。而して是等は皆寶暦以前のことである。このほかになほ松前記録に依つて、吏員派遣の狀態を察するに次のやうなものがある。

延享四年藩士、淺利圓吾、内藤藤孝等を樺太に派遣す

安永五年藩士、工藤右衛門を派遣す

安永六年藩士、新井田隆助を派遣す

此吏員派遣については、種々の異説があり、或書には村上掃部左衛門、蠣崎傳右衛門、和田某、松前平田等の名前も録せられてゐるが、其調査の事蹟は何れも不明である。思ふに、彼等の察眼は單に沿岸の好漁場も、成べく秘密に發見しやうとするにあつたから、斯の如く事蹟が、後に傳はらなかつたものであらう。而して前述の如く吏員の派遣はあつたにはあつたが、未だ駐劄藩吏と云ふものはなかつた。天明年間に至つて、突然露國人が來渡したので、松前藩は此處に始めて、境守備の責任上等閑に附する事ができなくなつた。そこで寛政二年に始めて級の藩吏を、ノトロ岬附近の白主に常置し、毎年四月から七月まで其處に勤番せしめ、八月から翌年三月迄の滿八ヶ月間は、依然無政府の狀態に放棄してゐた。勤番には武士二名、足輕二名を任命したのであるが。是等は勤番してゐるといふ名目だけで、特別に島政を司どるなどといふ事はなかつた。只漁場の取締及保護の意

味で、白主の運上及びクシュンコタン（今の大泊楠溪町）の運場屋の出張番屋を監視する位が關の山であつた。だから露國人が始めて樺太の南方に侵入して來た時も、前記の少數官吏員と漁場に使役してゐるアイヌ人約二百名が、其附近に散在してゐたのである。ついでに此時の露人の狼籍狀況をいささか述べて見やう。

第一回の露人騷動

我國と修好條約を結ぶべく、はる〴〵バルチク海のノロスタットから廻航して來た、露國の使節レザノフは、意外にも修好を拒絶され、忿々の情を胸に燃やしながら、長崎を出帆したのは文化三年の三月であつた。それから一ヶ月を經た文化三年四月、彼の乘込んだナデシュタ號は突如として亞庭灣頭に巨姿を現はした。此時は恰も兵庫（神戸）の商人柴屋長太夫と云ふもの〻持船であつた伊勢丸が魚類を滿載し宗谷に向けて進路をとつて居たが、是を認めるや愴惶として大泊港に逃げ込んだ。ナデシュタ號は恰も是を知らざるが如く悠々として針路を稍西に轉じ得高（留多加沖）に投錨した。此處にも長太夫の持船瑞祥丸が碇泊中であつた。此處に於て積荷見屆役の松前藩士某が調査の爲露船に渡らんと陸岸を船出しが、間近に到つた時に砲口を差向けられ恐怖して引退いた。

やがて露船の乘組員は瑞祥丸に來り、日本語をもつて、

『何も恐い事なし恐い事なし……』

と連呼して何事か語らんとするものの如くであつた。そこで船頭の文藏と云ふものが、

『何處から來たか？』

と尋ねて見たに長崎から來た旨答へた。斯くて種々會談を試みたが結局言葉が通ぜず、日本人側からは春割鰊を與へ、露國人からは其代償に錦二尺ばかりを贈らした。此時駐在の松前藩士が日本刀をたばさんでゐるのを見、頻りて彼等の洋刀と交換せん事を希望したが拒絶したと云ふ。其後露船は數日其處に碇泊上陸して獵獸を試み、やがて出帆したのである。

それよりナデシ ユタ號はカムチャッカに向つた。處が此カムチャッカには、折柄功名野心に燃えた露國の休職海軍士官のフォントフと云ふものとダビドフと云ふものが來遊してゐた。ノザノフは奇貨措くべしとして、先づ兩人と共にアメリカ大陸側の露領殖民地の巡遊に出かけ、其歸路船中で兩青年士官に口を極めて日本侵掠の事を說いたのである。そして遂に兩人を煽動して千島、樺太を襲はせる事に決定した。その役割はフォントフはユノと云ふ軍艦の艦長とし樺太に向ひ、ダビドフはアヲスと云ふ軍艦の艦長として千島に當るのである。斯くて兩艦は相呼應して征途に就たが、千島方面の海上は折柄猛烈に時化た爲、初志を貫徹する事が出來ず、やむなくフォントフはレザノフを同船せしめてオホツク海横斷し沿海州まで送り屈た。

其處からフォントフは、樺太東海岸のライトマリを先づ襲擊したが、幸に此處には日本人は一人

も居なかつた。只樺太アイヌの家が一軒あつたのみであつたが、露人等は此土人の家にらん入して恐怖におのゝいてゐる土人家族を脅喝し、其子を捕虜としてつれ去つた。そして土人の家の壁には露文を認めた紙片を貼布して去つたといふが、其紙片は其後江戸に送られ、幕府の手によつて飜譯されたが、其内容は次の如きものであつた。

一、日本とロシヤは近隣なれば、信義をむすび交易を希ふ爲に、長崎に使者一人差遣はされ候處、露國の島國及サガレン島に於て、交易かなはざるとは無理なる事なり。

一、日本交易について毎々ロシヤ損失あり、遂に日本の交易の義氣なきや如何をサガレンへ知らせ給へ。

一、ロシヤより此度日本の損失となるべき事をあらはし候、日本の長く心得違ひでありては毎度小國をかこむ事あるべし。

要するに是は通商貿易を强請したに過ないものである。レザノフの意を承はつたものである事は明かである。

楠溪町で大暴れ

斯くて露船は此處を拔錨して、翌日久春古丹（今の大泊楠溪町）に到着した。此處で乘組員卅余名は一隊となつて上陸、折柄冬籠り中であつた運上屋を襲ひ、先づ一行中の四名を番兵として屋外に監視せしめ、他は皆屋内に亂入して傍若無人に座を占め、中にはたばこを吹すものもあつた。恐

愕した越年番卒は彼等の歡心を買ふべく接待の用意に着手したが、彼等は是を制して

『日本あきない』

『日本あきない……』

とわめきたてた。けれども言葉は通ぜず、番人は多勢に恐れて屋外に逃走せんとした。處が露人は之を扼しとうとうしばりあげてしまつた。其時の番人は、富五郎、西藏、源七、福松の四人で、何づれも露艦に拉致されてしまつた。更に番屋倉庫は悉く破壞され、倉庫内に保管してあつた米五百俵、清酒數樽、其他越年資物として保存されてゐたものは殘らず掠奪し、あまつさへ破壞した番屋倉庫を始め繫留中の船舶山の手に奉祀してあつた辨財天神社等の建築物は、ことごとく燒き拂つてしまつたのである。露人等は三日間滯在して退島したが、退島に際して襲にライトマリで捕縛して來た土人の兒をこゝに放置して行つた。この騷動で駐在の日本人は殘らず捕縛されて行き、繫留中の船舶が悉く燒き拂はれた爲め、日本人に懷柔された土人は若干あり、急を北海道に傳へんとしたがそれさへ出來なかつた。從つて翌年三月松前藩から派遣される島の支配人が渡航するまでは、内地人は誰も此の事件を知らなかつたのである。しかして此問題が一度北海道に傳はるや、松前奉行は急遽函館附近を守備してゐた、津輕兵八十名を深山宇平太と云ふものに指揮させ、宗谷港（稚内）に急行させるやら江戸に急使を走らせるやら、大變な騷ぎであつたと云ふ。又江戸に急使が到着するや、江戸は又江戸で上を下への大騷動、八百八町は湧き立つて、今にも外國と一戰爭始まるやうな騷ぎ、店々には急に鎧が陳列されるやら、刀劍屋が走り廻るやらで、名狀し難いものであつたと云ふ。

後年幕府から派遣された中村小市郎が、松前奉行の命を受けて、樺太を踏査したが、其報告によれば、當時松前氏が統轄してゐたのは、專ら南方に限られてゐたものゝ如く、

白主より東西三四十里の間、專ら漁場の場所にて、年々商人共多く入り込み、其うち五六人程は越年もするのであらう、番屋、板藏物置など多くあり……

と書いてゐる。恐らく當時ノトロ岬一帶は、今日に劣らぬ繁盛を呈してゐたものであらう。

意氣地無き松前侯

更に松前氏が樺太を經營した狀態を調査するには、松前奉行から屢々幕府に提出された上書なるものを、吟味するのが尤も近道であらう。殊に松前名奉行の一人として知られてゐる村垣範匠の樺太統治に關する一上書には、藩吏派遣以後に於ける松前氏の諸施設の効果が、最も公平に具申されて居る。具申書の原文は今省略するが、（樺太施政沿革史中に收めてあり）松前の駐在藩吏が白主に勤番して、相當に島内土人の懷柔に成功しつゝあつたと云ふ事は明かに認められる。

若しロシア人の北方侵略の樣な大事件が起らなかつたならば、そして又日本國内の情況も靜穩を

續けてゐたとしたならば、恐らく樺太も亦長く松前氏の財源の地として、北海道と共に內地から隔離されてゐたであらふ。けれども露國の北方出沒は、愈々頻繁を加へるばかりであつた爲め、樺太統轄の事業も又一變轉する事を免れなくなつた。卽ち前記の如き大事件が勃發してからと云ふものは、日本國內の視聽は、悉く北方に集まつた。加ふるに中央に於ては松平定信が老中となり、鋭意海防の事に努めた。

尤も定信は間もなく引退したが、而も其後を承はるものは、何つれも定信の施設を踏襲して、北方防備に盡瘁した。就中松平忠明の如きは、蝦夷地政治の總監となり、英俊戸川安倫羽太正養（休明光記の著書）を拔擢して、第一次の松前奉行（幕府直轄のもの）を勤めしめ、移民、拓殖の積極的方針を實現せんとした。

斯くの如く中央の進出は、松前藩にとつては、只恐怖と疑惧を以て恐れ脅へるばかりであつた。けれども若し其の頃松前藩に相當の人物があり、この間に善處する策さへあれば、或は禍を轉じて福となし得ぬ事もなかつたかも知れぬが、太平二百年、松前藩士林は今や全く商魂商才になり終り、只物情騷然たるに、悒々としてゐるばかりであつた。是については次の樣な挿話もある。

其頃松前藩の食客に大原佐金吾と云ふものがあつた。彼は出羽出身の繪師で、特に山水に長じて轟齋或は黑齋と號して、相當の聞へた畫士である。處が彼佐金吾は遙々松前藩に身を寄せる位の男であるから、尋常一樣の藝術家ではなかつた。自ら畫工でありながら、彩管に親しむ事を喜ばず、常に寄道を辿つて、大快を貪らんとする策士肌の男であつた。

一日松前侯を說いて、大いにその活動を促して曰く『松前は今や天下の景勝地である。君は自重して大いに此大地積を愛重する處がなければならない。須らく幕府に進言して、私領の防備を辭退し一切の干涉を拒絕し、直に函館、小樽の要港を開き、豐富なる北海物產を一手に國內外に販賣する計畫をたてたらどうか？　若し此際逡巡躊躇すれば災禍が立處に到るであらふ』と說いた。けれども藩侯松前章廣は、乃父信廣の如き慧眼は全くうせた凡庸の徒であつた爲、斯く如のき獻策を喜ぶものでなく、却つて叱責して之に耳をかさうともしなかつた。而も幕吏は益々頻繁に北方調查を行ふのを見ては、遺に暗然たるを得ないものがあつた。其頃幕府から遣された役人で高品軌起と云ふものが、北海岸視察に赴かんとし、松前藩に東道を依賴した事があつたが、其際の如き小人章廣は、案內人に豫め意を含め、其處で海上危險にかこつけて、幕吏の北邊視察を阻止するやうな拙劣な方法をとる位が關の山であつた。

領土權を沒收さる

一方幕吏が北方視察を行ふと共に、その沿岸の漁業は極めて豐富で、年々運上金は莫大な額に上る事なども漸次明になつて來た。而も此の巨額の運上金は、單に少數松前藩上下の奢侈に蕩盡せ

られてゐるほか、何等の公用にも供せられず、且アイヌの如きも一切藩主の爲に交通を阻隔され恰も野獸の如き生活を强要されてゐる事なども次第に分明になつた。從つて心ある者は松前氏の北方私營をあきたらず思つた事は勿論である。殊に幕府が北方行政廳を函館に創設してからは、松前政治を監視する奉行からは、愈正直にその非政が中央に報告された。加ふるに北邊多事は松前の如き小藩をもつてしては到底兵備の負擔不可なりとの理由もあげられた。それや之やで遂に松前藩に對する總勘定の日はきた。寛政十一年幕府は松前の半部を試驗的に直轄する事となり、ついで松前氏の北海道樺太の領土權一切を沒收する事となつた。其時松前藩に交附された幕府の辭令は次の如きものである。(原文)

蝦夷地の儀は古來より其方家にて進退致采候得共、異國へ接し候島に萬端の手當整へ難き樣子につき、先達而東蝦夷地被仰出從公議御處置被仰付候、西蝦夷の儀も非常の備へ等其方手限り難行屆段申立、外國の境不容易事に惡からず思召候間、此處松前西蝦夷一圓被召上候之によつて其方に新規九千石下され候、場所之儀追つて相達すべく候。

尙此文書と共に別に土地收容に對する取替金(賠償金の如きもの)は幕府から下附する。是は勘定奉行の石川將監に申出でよ、尙松平、石川、羽太、大河內、三橋の面々が江戸から出張駐在する事になるから、在來土人を敎育した手續其他交易の事など万端は前記の各役人と相談の上進退せよと云ふ意味の通牒があつた。

此封土の移轉は松前氏にとつては、悲痛なる大鐵槌であつた。約二百年の間甘露の樣な運上金六万兩宛をせしめてゐたのも、玆に於て夢想だにする事ができなくなつた。猫の額の樣なわづかな代地九千石位をもつてしては、到底昔日現金收入の三分の一も擧げる事はできない。全藩の恐慌狼狽は名狀すべからざるものがあつた。『北邊紀用』と云ふ書物の雁書部と云ふ處に松前の一町人が當時の松前藩の情況を青森の一知人に宛てゝかいた消息文が載せられてあるが、それによると樺太に露人事件が起つたと云ふ報が傳つて以來、松前藩が國替になるまでの事を細々と書並べ、殊に國替の通牒が松前城下に到達した時の有樣を叙し、

——御家中一統町人百姓誠に泣き淚出申候——

と告白してゐる。思ふに運上金六万兩痛惜の淚であつたらう。而して此の運上金の代償として新に幕府から松前藩に與へられたものは常陸の信太郡、鹿島郡、河內郡の一部及び陸奥伊達郡、是に上州の甘樂郡及び群馬郡の各一部で、此の領土經營と云ふものは又容易なものでなかつた。だから事實に於て松前藩は、此一擊で減落したものと云つても差支ない位である。斯うして北海道及樺太は幕府が梓尾の建業を試むべき活舞臺となつた。羽太、川路などゝいふ幕府の大官等の拓殖意見は、暫時積極方針を繼續された。けれども松平忠明が一度臺閣を去るや、幕府の北方經營は俄然龍頭蛇尾のものとなつてしまひ、それまで續けられて居た各藩からの蝦夷防備兵も日を遂ふて撤退し、松前附近はさながら暴風の後の樣な靜けさを呈した。而して斯くなる原因については、勿論中央爲政

者の變轉と云ふ事にも重大な關係はあつたが、又一方歐洲大陸に於ける政變の影響に依る處も少くなかつたと云はなければならない。

即ち當時歐洲に於ては、ナポレオン一世が精鋭なる大軍を四方に放つて、歐洲大陸を震憾せしめた。北歐のスラブの大帝國ロシヤも佛國軍隊の蹂躙する處となり、モスコーの古都を自ら放棄して遠く北方に敗退した時であつた。而して斯く重大な戰敗の槍痕は、露國をして、又前述の東方侵略を余儀なくせしめたのである。かくて前後十四年に渉り、北陬の水濱、渺茫たる海濱は、閑鳥の悠游にまかせてあつた。

領地再び復活す

時の閣老小野忙成は緣親を松前氏と結んであつたため、極力斡旋して文化四年の冬遂に蝦夷の舊領を、當時困憊頓に沈淪して居た松前章廣に還附する事とした。土人及人民が同藩に引渡されたのは翌五年五月で、當時の辭令として左の如きものが傳はつてゐる。

多年爾蝦夷地を守備せしも、警衛全きを得ず、依つて命じて本西蝦夷地を上地せしめ大府之を措置す。今や全島靜まり、又北顧の憂ひなし、汝の祖先夷地を肇創せし以來前に數百年、其舊家族なるをもつて今重ねて全島を爾に賜ふ。幕府定むる所の法規は之を格守し、邊防警衛をもつて其家の任となすべし。

南部津輕の兩藩の出兵舊に復す。則ち衞戍の當置を解き、各其封內を守らしむる所以にして、一朝事あらば直に海を渡り相應援すべし。蝦夷地衞戍の命を以つて、本國の武備を忽にするを得ず、凡て蝦夷の事は常に之を松前奉行に從ひ、意を盡して措置せよ。

此辭令を受けて松前藩は復活したが、後日沒收の災厄にあふ事を虞れ、特に請ふて毎年冥加金と稱して一萬兩の献納を申出た。幕府も亦是を容れて、十年繼續することを許したのである。而も此高價な謝禮は必ずしも有効なるものではなかつた。遂に松前氏の北方封土權は文政以後嘉永年間に至る卅二ヶ年で、又永久に上地沒收される事となつた。此の命に逢着したのは松前氏自ら招いだ處であるとはいへ、北方奉行の初代、堀織部正の献言に基づいたものである事は疑ひない。堀織と德川齋昭とは屢北方經營に議論を戰はせた中であつたが、北地直轄については意見が一致してゐたもの丶如くである。且齋昭は日頃から口を極めて閣老水野の松前庇護を痛罵し、其上言中にも、

文政の度御歸しに成しは、賄路行はれ、御政治相弛みし時節なれば、此一條ても御引上げの善惡が相わかり申候、松前は元來昔より利益をむさぼり、神國の御爲に蝦夷切り開き等の家風は毛頭之無く

云々と極言した。

松前藩の末路？

昭齋の上書は必ずしも僞りでない。封土還附後の松前藩は、偸安放逸で何等の永續的施設なく、

只々運上金を猛烈に徴發したばかりである。

惟ふに之は當然の運命が近くに迫つてゐる事を知つて行つたものであらふ。堀織部正も亦還附後の非政を評發して左の如く云つてゐた。

文政年度御屋地以來舊の如く漁利相恃み、山林飯澤海濱夷民の事一切請負商人にまかせ、其商人は運上金の高下により人品を不相選、場所引受申付請負の者は、正路の商人にてもわずかに三五年に一兩度宛見廻り、或は支配人に任せ、他國に居住致すあり、右支配人は漁夫番人より成上り、番人は場所働きの者より成り、此中には無類の博徒等も候。

父母親戚にもうとんじられたる者、當分糊口の爲めに蝦夷地に緣故を求めて立入り、追々場所馴れに從ひ頭分になり夷人を使ふに非道の義多く、漁業の働き方に應じ俵米、貫錢、其外たばこ、衣服等遣はし候。物品を物（此間三字不明）では種々奸計を設け、夷人をあざむき候類不尠飢餓に及び、老人小兒女童を顧みず、風波甚だしき節も强て漁事相働かせ、溺死等致す者年々之有候由、生き殘りが足弱の者共別段撫育手當も仕らず、又越年致し候節はメノコ夷婦を奪ひて、妾に致し候類を始め、慘酷の取扱ひ方少からず（以下略）

所詮幕府直營のほかあるまいと云ふのは全篇の歸納で、堀織部正が松前藩の施設にあきたらなかつた事は全文中に溢れて居る。其武士としての待遇を受けながら、而も商事を營み運上金を多く貪らんとして適材を求めず、只々射利に巧なものを使用して、憐れむべき劣弱な夷民を酷遇した情況を

具に申告してある。

無爲無策の政治

幕府の當路者も亦この批評を得て等閑に附する事が出來ず、遂に最後の裁斷を下したものであらう。而も松前氏が三十二年の長い間に於て、還附後視廳を刷新する程の施設も試みずして、只舊來の安逸は統轄方法を墨守し、毫も改善の意志のなかつた所以は畢竟、中央政廳に匿れた有力者の後援がなかつたものと見なければならない。

德川齋昭は幕府の親藩で、其儒者としての名聲も亦早くから海内に曹かつた。而して閣老が施設した内外の政治に關しては常に侃諤の横議を試みたので、當時の諸侯は相警めて荒神とし、是を敬遠するに努めたのである。

而も齋昭は錚々たる國權論者で邊境の防備が頗る緩慢なのを慨し、幕府の諮詢に對しても、蝦夷地の松前還附は、最も愚劣なる政策であると痛罵してゐる。

其後弘化元年に到り齋昭は幕府に對し、樺太の租借を請はんとしたが、其際幕府に交渉して拒絶されん事を恐れ、弱藩を强壓するに如かずと考へ、直接松前氏に使ひを派して樺太借用の事を申出た。

其頃若松前氏が、中央政府に何等の後援するものを有しなかつたならば、或は唯々として此荒神の意を迎へたかもしれない。

けれども舊領土地還附を斡旋した、姻親の小野忠成は當時尙嚴として臺閣に在つた。是が爲章廣の子崇慶は、

——松前小なりといへども、同じく是諸侯なり、豈ひそかに封疆を假するの謂はれあらんや。止むを得ずんば水藩全部を擧げて夷地全島に換へんのみ——

水戸の藩士等は其傲慢に怒つて之を齋昭に報じたが、齋昭も亦如何ともする事が出來なかつた。

而して二度目の上地後に於ては、北方一部の曠野は國防にも、亦産業にもより多くの價値を、中央に認識される樣になつた。同時に昔日は一万石格にも達しなかつた松前家も、益々重要の位置を加へて行つた。今や松前氏は出羽に三万石の封土と別に歳幣一万八千兩を給せらるゝ事となつた。而も元治元年には崇廣は一躍して、幕府の廟堂に入り、外藩をもつてして遂に閣老の名を贏ち得るにいつた。

×　　×

樺太を世襲私營した松前氏の施設は大体以上に述べたやうなものであるが、必ずしも光榮ある記錄としてのみ受取る事は出來ない。

若し卒直な批判を下すとすれば、是は德川幕府を百分の一にした程の、同種同型の統治であつて

其運上金制度を死守して約二世紀間海産の利益に鼓腹しつゝあつたのは、恰も幕府が鎖國命を死守し、內に國民を誤瞞化し、巧に無上の小日本的榮榮を獨斷しつゝあつたのと異曲同巧に屬する。

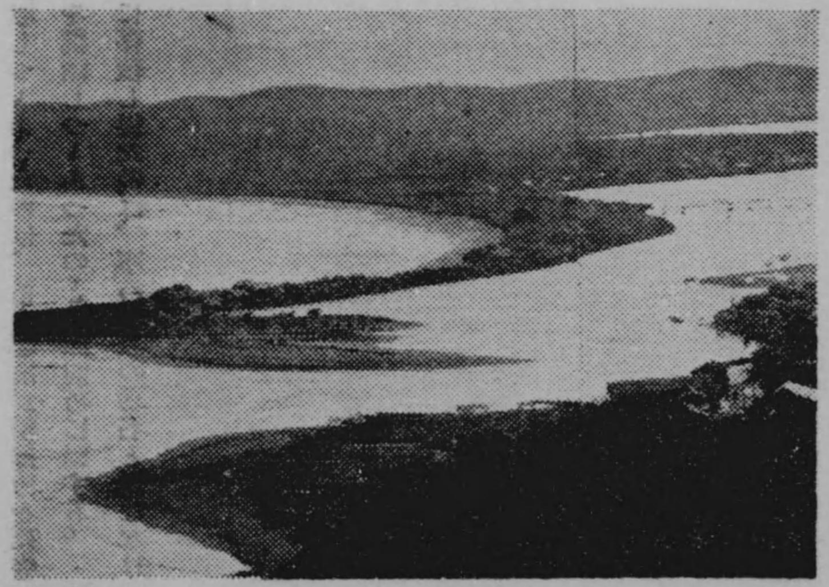
只地域の近接關係から、南樺太領土權を一縷の間に存續し得たのは、寧ろ怪我の功名と云はなければなるまい。

遠淵對富内

アイヌの戰爭

（戰ひに絡る悲戀物語り）

……（富内湖畔）……



アイヌの勢力爭ひ

南方侵略の領土的野心を抱き、常にその目的達成に欝勃たる露國は、遂に積極的行動を開始して、樺太各地の沿岸漁場を襲撃して、嘉永三年に至りサハリン島は『露國の領地たるものなり』とギリヤーク、オロッコ人に宣布し、愈々魔手を伸さんとしてゐる頃であつた。當時樺太には全島至る處、アイヌ達が部落をかまへてゐたが、中でも灣内の遠淵湖畔とトンナイチャ（富内）に住んでゐるアイヌは最もその數多く而も戸數が略同じであつた處から、ともにその勢力伯仲してゐたので、この兩部落は當時樺太に於ける同族の雄であつたとも稱されてゐる。

それでこの兩部落のアイヌ達は、お互に勢力爭いから常に暗闘が絶えなかつた。機會あらば打ちとつてその領地を吾が物にせぬばならぬと、負けず劣らず、鎬を削つてゐたのである。かくて兩者の暗闘が、積り積つて遂に同族の一大戰爭と化したのは卽ち嘉永三年、木の葉も落ち、やがて冬が訪れやうとする秋の末つかたであつた。

×

水清らかな富内湖畔の邊に、三十戸程のアイヌが住んでゐた。部落民は湖水の魚を獲つては、平和にその日〳〵を過してゐた。然し何時までもこの平和な日は續かなかつた。その頃一つ山を隔てた背面遠淵湖畔にも又アイヌ部落が四十戸程あつた。酋長は慓悍無類、進取の氣性にとみ、更に勇猛果敢な性質の持主で、彼はこれと思ひ立つたことは、如何なる障害があらうとも、貫徹せねばやま

×

ぬと言ふ荒武者であつた。こうした遠淵部落の酋長に比べて、智慧者で而も德義を重んじ、部落のアイヌ達から畏敬されてゐたのは富内の酋長であつた。この二人の性質は全く相反してゐたため、事毎に反目してゐたのである。殊に遠淵湖に比べて湖水の富が大きかつた富内湖は、遠淵アイヌにとつてそれはあまりにも嫉しいものであつた。湖水の富は次第〳〵に彼等に爭鬪を敎へたのである。かくて日は過ぎて行つたが、いよ〳〵兩者の感情はもつれてゆくばかりであつた。

當時富内酋長の息子にコランケと云ふ父にも劣らぬ勇敢な若者があつた。彼は美貌と膽力にかけては村一番であるところから、常に若いメノコ達には憧れの的となつてゐた。或日コランケは馬に跨つて山へ狩りに出かけた。終日山野を跋渉して、遂に道を踏み違い日が山の端に傾きかけんとする頃偶然にも美しき湖水、遠淵湖畔に出た。コランケは夕陽美しく映ゆる湖水の面をみつめながら、一日の勞苦を憩ふて居た湖水は愈々美しかつた。アイヌの子にも詩情は湧く、彼は恍惚として湖畔の景に見入つてゐたのである。ふと彼の眼に映じたのは、一人の麗しい娘であつた。娘の容姿は宛ら湖水の精靈とも思はれる位美しかつた。一目見るなり多感なコランケの胸は躍つた。女は遠淵酋長の一人娘であつた。彼女も亦湖畔に憩ふ若者を見たのである。美しい男、賴母しさうな若者さう思ふと、ちらりと見たゞけではあつたけれど、其夜から若者の姿は、小さな胸に忘れられぬ人として燒付いたのである。

何時しか二人の胸に申し合せたやうに燃えたのは戀の焰であつた。そしてその戀も日と共に成長

して行つたのである。コランケは會ひたさに屢々湖水の畔を訪れた。娘もまた同じだつた。二人の戀は次第〳〵に熱烈さを增して行つた。けれど父親の爭ひは、二人の戀が熱すれば熱する程、一層爭ひも猛烈となつて行つたのである。こうした中にあつて二人は人目を避けて、恐怖のうちに愛し合つて行かねばならなかつた。若し双方の親達が親しい間柄であつたなら、この戀も恐らくは成就されたに違ひない。だが運命の神はどこまでも皮肉だつた。飽くまでも彼等二人の幸福を破壞しなければ氣がすまなかつたのである。ついに兩者の爭ひが高じて戰爭の火蓋は切られた。

アイヌ達は血みどろになつて、數日間戰ひ續けたのである。屍は山野に累々として横たはり、鏡のやうに澄んだ湖水も、血潮に彩られ至る處で凄慘な戰ひが繰返されていつた。

けれどその力伯仲してゐる兩アイヌ軍は、容易に戰ひの勝敗も決しなかつた。若者達は續々として斃れ、最早酋長と酋長とが雌雄を決せねばならぬときが來た。勇敢な遠淵の酋長はもうこれまでと陣頭に立つていよ〳〵一騎打をすべく全軍を叱咤して、堂々進軍を開始したのである。然し戰つては富内酋長の力は到底彼の敵ではなかつた。早や味方の富内軍も殆ど全滅し、戰ふ氣力さへ失せてゐたのに又もや最後の襲擊、遂に殘軍の死守も空しく富内軍はその領地を明け渡さねばならなかつた。追はれ追はれて、哀れ酋長は今や刄の錆にならんとしたとき、突如何處からともなく飛んで來た一本の矢は、ハッシと遠淵酋長の咽喉を射拔いたのである。傷口から血は滾々と流れた。

酋長は眞黑な血を吐いて、その場にばつたりと打倒れた。そして苦しい斷末魔の叫びを擧げて死

んで逝つた。

突然叢の中より弓を片手に現はれたのは下うつむいて力ない富内酋長の息子コランケの姿であつた。

彼の顏は蒼白と變つてゐた。勝ち誇つた富内軍は首級を刎ねて引き揚げた。酋長を討たれた遠淵軍は折角の勝ち戰も賴戸際で敗られ、怨みを呑んで敗北せねばならなかつた。

戰ひは了んだ。悲しくも父を失ひ孤兒となつた遠淵酋長の娘は氣も狂はんばかりであつた、自分の父は愛する男の卑怯な手にかゝて死んだ、さう思ふと愛はいつしか憎惡と變り、やがて復讐に變つていつた。けれど可弱い女の身では、又それをどうすることも出來なかつた。哀愁と懊惱に苦しめられた娘は悲しみの幾夜かを泣き明かしたのである。けれど胸の惱みは醫へなかつた。もう彼女は自殺するより外に思案は浮ばなかつた。かつて戀人コランケより許婚の印に渡されたマキリを懷に、せめてもの憶ひ出にと、夜更の湖畔に忍び出た。そしてあたら十七の命を今斷たんとしたのである。

コランケの心も同じだつた。父の危難を見てついに心ならずも遠淵酋長を射殺しはしたものゝ、胸に燃えた戀の焰は容易に消さうとしても消えなかつた。身も心も魂までも打ちこんだコランケはもうこの戀も破滅かと思ふと矢も楯もたまらなかつた。せめて今一度姿なりと見たいと張り裂くる胸の悶を抑へつゝ、樂しく語り合つた憶ひ出の場所、湖畔へと歩みを運ばせたのである。

——勝利者の悲哀だ、破綻者の悲しみだ——

いつしかコランケの瞳には玉のやうな涙が宿つてゐた。悶え苦しんだ男と女、月明るき湖畔にゆくりなくも邂逅したとき、突如として娘の手に握られたのは研ぎすまされたマキリであつた。ギラリと光つたときコランケは虛空を摑んで倒れた。娘は迸る鮮血を浴びながら、怨みの刄をとり直し我と我が胸に突き刺したのである。

死に瀕したコランケは苦悶の中に自分の名を呼ぶ娘の聲をかすかに聞いた。戀のマキリは憎惡の前には恐ろしい恨の刄となつて、若者の心と肉を引裂いたのである。けれどコランケと娘の血がマキリに眞紅にぬられた時、偉大なる愛の力は恨と仇とを打ち消さずには置かなかつた。ひしと抱きあつた二人の顏、そこにはいつしか滿足な笑さへたゝへられてゐたのである。

湖水には大きな波紋が畫き出された、やがて二人の姿は水底深く消えていつた。

〝アイヌの復讐譚〟

富内村の熊祭の慘劇……

メノコ八名虐殺さる……

露人十六名をみな殺し……

熊祭りはアイヌ達にとつて、大祭である。それでひとたび熊祭りがあると云ふことになると、部落民は擧けて熊祭りの氣分にひたり、四日も五日も濁酒を呑んでは騷ぎつゞける。そして、この祭も單に祭を執行するその部落のみの祝ひではなく、アイヌ部落全体の祝ひ事であるとして、各所から續々として參如する。今はかゝる大げさなことは行はぬが、古領當時迄は必ずこれを實行してゐたものであつた。それで遠隔の地に住んでゐるアイヌ達は仕事を休んで、十日も廿日も徒に日數を費ひやして、祭に出席したものである。これが爲如何に急を要する仕事でも放擲し、連日連夜呑み明かして騷ぐので、往年栖原が漁場を經營してゐた頃アイヌを多數使用したが、然し熊祭だけはその部落附近では、絶對に行はぬことに警戒し、更に又祭りに參加するものは屠はぬと云ふ條件さへ定めたと云ふことである。とにかく現今のやうに交通の發達した時代

ならいざ知らず、殆ど道路とてもない山野を十日も廿日もかゝつて集つて來たと云ふから、如何に彼等にとつて大祭であつたかが窺はれるのである。明治六年阿幸に於て熊祭りを行つた際、敷香のアイヌが殆どこれに參加したと云はれてゐる。

×　　×

次の物語りも熊祭を執行中、家に殘した家族等が、コルサコフの露國監獄を脱走したロシヤ囚人のために財寶は奪はれ、妻子は虐殺されたと云ふ悲慘事が突發し、部落を擧げての祝ひが、俄然悲しみのどん底に突き落され、遂に憤怒に燃えたアイヌ達は、囚人達に一大復讐を加へることになり苦心慘憺してその目的を達したと云ふ、悲壯な復讐譚である。

×　　×

明治二十四年の秋も逝く十月の下旬であつた。トンナイチャ（富内）のアイヌ達は今年の熊祭りこそは盛大に行ふべしとあつて、二ヶ月も前より準備に忙殺されてゐたのである……云ふまでもなく當時の樺太は露國の經營であつたが、島の政治は彼等の爲すがまゝ、殊に虐政に苦しめられたのはアイヌであつた。クシユンコタンの露國監獄を脱走する囚人乃至は刑を終へて出獄した露國人などが、出獄しても思ふやうな仕事もなく、さりとて本國に歸ることも出來ず、日本人經營の漁場などに働くものもあつたが、然し根が何づれも重罪犯人であつた處から、その粗暴たるや實に言語に絶するものがあつた。人を殺すこと位は朝飯前の仕事のやうに考へ、至る處で土人に危害を加へ

物品の掠奪を擅にしてゐたものである。

×

全島各部落の長老が數多參列して富内の熊祭りは嚴肅裡に進行して行つた。アイヌ達は神に供へる熊に最後のとゞめを刺し愈々宴に移らうとするときであつた。突然こゝに意外な事件が突發したのである。それは部落に殘つて留守居をし、夜の酒盛りの準備をしてゐた、メノコ達が突如として露國人に襲擊されたのである。彼等一團十六名はコルサコフの監獄に永らく苦しめられてゐた囚人達であつた。彼等は遂にその苦役に耐へかね、監獄を破つて脫走トンナイチャに逃げこんだのであつた。そして、いそ〳〵と準備をして居るメノコ達を襲つたのである。手に手にピストルを持つて亂射し食糧を掠奪し始めた、この不意の襲擊にメノコ達は驚愕色を失つて逃げ惑ふた。けれど力弱いメノコ達はどうすることも出來なかつた。

或者は射殺され、或者は汚され、遂に八人は無慘や、虐殺されてしまつたのである。やがて彼等一團は掠奪した食糧を携へ、山中深く逃走してしまつた。こうした事件があつたことは露知らぬアイヌ達は、熊祭の祝ひ酒に淘然となつて部落に歸つて見ると、此慘事、今迄の喜びも何處へやら、一同は只呆然とするのみであつた。

×

『屹度殺したのは露助めに違ひない、遠くは行かぬ筈、直に手分して捕へろ、殺してしまへ、仇を

討て！』と酋長は悲嘆にむせんでゐるアイヌ達を激勵したのである。憤怒に燃えたアイヌは、この言葉に刺戟され『露助を殺せ！仇を討て！』と叫びつゝ、それから山また山、谷から谷、森から森へと搜し廻つたのである。折から祭に參加した他部落のアイヌ達もこの變事を聞き非常に激怒し、アイヌ達と共に搜査に當つたのである。ついにその効あつてか、草叢に逃げ遲れた一人の露人を發見した、直に引つ捕へて拷問にかけたが、露人は容易に口を開かなかつたが、ついに火攻めに遭つて、一切の慘虐行爲を自白し、更に逃げかくれた他の十五人の隱れ場處さへ敎へてしまつたのである。猛り狂つたアイヌはこの露人をマキリで一刺しに突き殺し、先づ血祭りに上げて、先幸きよしと彼等の跡を追擊したのである。逃げのびた露人達は小川のほとりで、もうこゝまでくれば大丈夫と盜みとつた食糧品を持ち出して食べ始めてゐたときであつた。

×

突如として現はれたのはアイヌの一團であつた。各自手には刄、弓、鐵砲をもつて喚聲を擧げてどつと襲擊したのである。疲れ切つてゐる露人達はいくら反抗してもアイヌの敵ではなかつた。散々に斬りまくられ、射られて、瞬く間に十三人は其場に殺されてしまつた。この復讐戰で最も活躍したのは、妻と老母を失つたオニネクアイヌであつた。彼は阿修羅の如く暴れまはり、遂に所持つてゐた鐵砲で八人を射殺した。眞紅な血は小川を染めた。アイヌ達は殺した死骸を地中に埋めて引き揚げたのである。

其後富内で復讐された露人十三名の外、生き殘つて逃走した三人は小田寒と眞苫の間に出沒し、又もアイヌ達を頻りに襲つたので、相濱の本下愛吉の實兄シレクアイヌ、又眞苫のテクフンカアイヌ外一名と三人で弓と槍を持つて彼等が現はれた處を突如襲擊して三人とも殺してしまつた。シレクアイヌは逃げんとする敵の背後から槍をもつて一人の横腹を突き刺し、他の二人はこれも逃げんとする處を弓を射放し、一人はその場に即死し、他の一人は打たれた弓を引き抜き更に逃げんとするのをクランカイアイヌは遂に海に追ひ込み、陸に揚らんとする處を第二の弓が誤たず心臓を射抜き哀れ血へどを吐いて息絶へた。この復讐も富内事件があつてから、約三ヶ月目で、ついに露人十六名は悉くアイヌ達の手に依つて、完全に復讐されたのである。この物語りは白濱に住む古老木村トテシコアイヌが筆者に語つた一篇である……。

留多加に於ける……アイヌの一大戰爭

白樺の鎧を着た西のアイヌ

留多加のアイヌ慘々に敗北

留多加の古戰場

全島各地にアイヌが蟠居し、夫々獨立した部落を形成してゐた頃には、彼等同族の間には領域問題で爭ふことが屢々あつた……ときは明治初年、當時西海岸（主として今の阿幸附近）アイヌと灣内留多加附近に居住するアイヌ達との間に領域問題から常に紛糾が絶えなかつた。それは單なる喧嘩口論ではなく、ときには弓矢をとつて爭ふことすらあつた。この物語りも留多加を中心として兩者の間に領域獲得のことから戰が開始されたが、その結果遂に留多加アイヌは慘々に敗北して永年留多加地方一帶は西海岸アイヌに占領されたことがあつた。この戰ひに參加した西海岸久米古舞に居住する、長老山下ツシベと云ふアイヌがあつた

が、大正三年肺を病んで死んでしまつた、彼が在世中に語つた處の記錄に依ると『明治二十二、三年頃までは、留多加河口にアイヌが建てた記念のイナホが數十本一列に樹てられてあつたと云ふ。これは當時の戰ひに於て西のアイヌが大勝したので、河口より西は西海岸アイヌのものであるとして、境界に毎年新らしくイナホを立てたものである。

熊狩りの領域爭ひ

今の灣内利良に注いでゐる西留多加川の上流は、當時熊の巢窟としてアイヌ達にとつては、唯一の生活の財源であつた。それで双方のアイヌ達は熊獲りにこの山中に出かけては、屢々繩張り爭ひから熊などはそつちのけで、血を見るやうな爭鬪を續けたものである。或る日阿幸に住む酋長の息子が部下七、八名と共に山中深く分け行つて、一頭の巨熊を射止めた。ちやうど折も折、その熊を搜し求めて、留多加のアイヌ達が七、八名この山中に入り込み、偶然にも西のアイヌと出會したのである。平素から領域問題で爭つてゐる間柄、ましてや、自分達の追ひ廻してゐた熊が憎むべき西のアイヌに獲られたかと思ふと俄然憤怒の念が燃えた。どうして、部落のものに顏向けが出來やう、腕づくでも、この熊は奪ひ返さねばならぬ、と留多加アイヌの代表トモフカと云ふ若者が憤然として口を切つた。

『この熊は吾々が二日前より搜し求めてゐた熊だ、當然吾々がとるべき熊であるのに、それを横合ひから無斷で打とるとは甚だ勝手極まる行爲である、この熊を當方に渡すか、それとも熊を渡さぬとあれば、熊を射止めるに使つた貴下の弓矢全部を當方にお渡しありたい』

と云ふ意味の要求を述べたのである。

もとより西のアイヌも意地づくであつた。而も弓矢までも渡せとは甚だ侮辱した言葉である、自分達だけの侮辱ではなく、これは西のアイヌ全部を足蹴にした話である。

『よし、熊でも弓矢でも、とれるものならとつて見よ』

と突つぱねたので、端しなくも茲に一大爭鬪が開始された、清らかな留多加川の水が眞紅に染つた頃は、西のアイヌは七人までも無慘や刺し殺されてゐた、たつた一人この危機から脫した、酋長の息子は漸く歸つてこの旨を同族に報じたのである。一方留多加アイヌは僅か二人だけが身に深傷を負つたが殺されたものとてはなく、凱歌を擧げて村へ歸つた、然し無念に耐へなかつたのは西のアイヌであつた。熊は奪はれあまつさへ同族七人までも殺されて、どうして復讐せずには居られやう。

兩軍留多加で會戰

『この恥辱を晴らさねば、西のアイヌの面汚しである、必ず仇を打つてくれ』

酋長代理のトリャコは悲壯な色を面に現はしてアイヌ達を激勵するのであつた。戰の準備は始められた。直に彼等の手に依り、ガンビ（白樺の皮）の皮とカユ草の糸で、つぎ合せた鎧をつくり、それを三十余名のアイヌ達に着せたのである。手にはブシ（毒草の汁）をつけた矢と槍、及等を各自に持たせ、戰勝の前祝ひにと、ドブロクを呑んで多數部落の人達に見送られ喚聲を擧げて出發したのである。一團は眞岡方面より迂回して、今の豊榮附近を通過し、留多加川の下流に向つて隊伍堂々と進軍を開始したのである。三十余名のアイヌ達が白樺の鎧を着て、意氣揚々と進むさまは既に戰はずして敵を呑むの慨があつた。

『山丹人の援兵を得て、西のアイヌが復讐に來た』

この報が一度留多加アイヌに傳はるや、敵は早くも四離滅裂、殆どアイヌの大部分は驚愕と狼狽で戰はずして潰走してしまつた。（當時西のアイヌは滿洲方面と交易をしてゐた爲、見慣れぬ白樺の鎧は山丹人と早合点したものらしい）。

然し逃れるアイヌの中で只一人踏み止つたのは、さきに山中で西のアイヌと闘ひ殆ど皆殺しにした酋長の息子と部下十二人の若者であつた、人々の止めるのもきかず勇敢にも第一戰に立つて、群がる敵を河口に迎へて闘つたのであつた。戰の火蓋は切られた、如何にせん、敵は大勢味方は十二名、而も敵は白樺の鎧を着てゐるので、弓は通らなかつた。一方敵より放たれるブシ矢は見る見る

中に七人を倒した、もうこれまでと觀念した酋長の息子は、腰なる刀を引き拔いて、敵中へ躍り込んだのである。刀の斬れ味は鋭かつた。忽ち敵の四人を切り倒し縱横無盡に荒れ廻つたが、哀れ息子トレコロは、流れ矢に當つて悲壯な戰死をとけ、殘る五人もバタ〳〵と打ち殺されてしまつた。

戰ひは了んだ、戰爭に破れ領地をとられた留多加アイヌの行く手は悲慘この上もなかつた……かくて西のアイヌは二十有余年（明治二十五年頃まで）留多加の地を我が物顔に占有してゐたものであつた。

樺太アイヌ滅亡史

……減少の最大原因は

……二千人瞬く間に死亡

アイヌ減少の理由とは

アイヌの減少する原因に就ては種々なる理由が擧げられてゐる。勿論北海道アイヌも樺太アイヌも減少理由については略同一であるが、私はこゝに樺太アイヌのみに就て、歴史的な事實を述べて見たいと思ふ。

抑々アイヌ減少の最大原因は、一般的に次ぎの如き理由を擧げてゐる。即ちその一つはアイヌにして肺結核に冒されて居らぬものはない。今一つは黴毒羅病者の多いことである。

然し私が考へるにはこれも、その理由の一つかも知れぬが、眞の減少の原因は他にあるものと思はれる。假令ば肺結核に罹つたとしても、決して子供が生れぬと限つたわけのものでなく

寧ろ日本人の例を見れば返つて出生率が多いやうにさへ思はれるのである。黴毒にしても亦然り、生れた子は育たぬまでも、産ば兎に角殆ど産れないのである。然らば他の理田はといふと優秀なる日本民族が常に壓迫を加へる處から、萎縮してこれが知らず〳〵のうちに彼等が滅亡の淵へ落ち込んで行くともいふのである。

然し現在政府はアイヌ民族に對しては積極的の保護政策を採つて居る程である。民族的壓迫に依るといふならば、同族間の爭鬪を深刻に操返してゐる日本人はアイヌと同じ徑路を辿つて居らねばならぬ筈である。若しそれ一度び日本歴史を繙けば爭鬪史の連續ではないか。故にこの說に從へば日本人も滅亡の一途を辿つてゐなければならぬ筈である。然しこれらの理由に就ては一面の原因は含まれてゐるが、それは皮相的な觀察であつて理由の極めて一小部分を占めてゐるに過ぎない。その他擧げられてゐることは肉食より菜食に移つたこと、衛生思想の欠如の点、極めて宗務的迷信に依るもの等であるが、寧ろ私は前者より後者の理由の方が正鵠を得た觀察であらうと思はれる。元樺太廳醫官屋代氏は人口減少の要素として次ぎの諸項を擧げてゐる。

(1) 風俗習慣が不健康に出來て居る爲、羅病率多きか。

(2) 衛生思想なく、結核、黴毒、疥癬、トラホーム、淋疾等の傳染病の跳梁によるか。

(3) 宗教的迷信强く醫療を重んぜざるか。

(4) 血族結婚による子孫への弱質遺傳によるか。
(5) 知能低きため他民族との競爭に敗れ生活難なるによるか。
(6) 民族的に繁殖力の衰弱せるか。
(7) アイヌ婦人の体質が分娩、育兒等に不適當となりたるか。
(8) 花柳病等による不姙症多きか。
(9) 流産早産多きか。
(10) 墮胎避姙を行ふにはあらざるか。

しかして以上の各項に就て說明を加へてゐるが、更に結論としてアイヌの死亡率は日本人のそれに比して大差なきにも拘はらず出生率に於て甚だしく相違を來してゐる点である。即ち出生率低下の原因は民族的繁殖力の老衰であつて、これは個人に於ても民族に於ても、凡そ生命のあるものゝ避け難きところ、自然の大勢力は息むを得ぬと述べてゐる。事實私の調査した處に依つても出生率と死亡率とは非常な差がある。

一例を擧ければ白濱のアイヌ部落にしても、四月から八月下旬まで八名死亡し、（昭和七年）出生は二名うち一名は死亡し殘る一名も殆ど癈疾兒に等しきものであつた。これは單に白濱部落のみの調査であるから、現在のアイヌ民族全体の減少率から云へば、非常な數に達するものと思はれる。私は茲にアイヌ減少の原因に就ては、屋代氏と同樣な意見を有するものであるが、然し

氏は單に樺太アイヌの減少は醫學的に觀て、出生率の減少のみを結論として擧げてゐることである。よしんばそれが主なる原因にはならうが、樺太アイヌ減少の理由の全部ではないと思ふ。即ちアイヌは何故子供を產まぬか？　決して彼等は生殖的に欠陷あるわけのものではない。

何故生まぬといふ、その根本問題に立ち至つて見なければならぬと思ふ。氏の言ふが如く單に民族的繁殖力の老衰と結論を下す前に、未だ幾多の理由が存してゐるのである。私はこの稿に於てそれを述べんとするのが目的でないので、他日に讓ることゝして史實的に觀た減少の主なる原因を擧げて見やう。

疱瘡で二千人のアイヌが死亡

往年全島各處に蟠居して、一大勢力を有してゐたアイヌが、何故かくまでに減少したかは既に前述の通りであるが、こゝに彼等の衛生思想の欠如から民族的に減少の拍車をかけた事實がある。

明治初年である。シララカ（白浦）の一アイヌが疱瘡に罹つた。アイヌ達は熱病だと稱して頻りに祈禱したが、瞬くまにこのアイヌは死亡し、やがて亦一人が罹つた、そしてこの熱病は全部落に慢延し、僅か一ヶ月たゞずに十五戸程（約六十人）のアイヌ達は殆ど死んでしまつた。それ

が更に内淵方面に南進し、同部落一團を忽ち惨めつくして、又復榮濱からロレー（魯禮）に移り、遂にトンナイチャ（富内）に慢延して、殆どアイヌ達を全滅してしまつた。當時シララカより南知床半島のカモイ（神居）附近まで、一里二里置きにアイヌ部落が五戸十戸とあつた。然しこれらの部落は約二ケ月程で殆ど全滅したと云ふから、如何に猖獗を極めたかゞ窺はれる。

アイヌの古老達にきくと、當時の悲慘さは言語に絶するものがあつたといふ。若しアイヌ達は罹病すれば大鼓を叩いて祈禱し、更に熊や犬などの頭をサキリに通して、家の裏に立てるのである。たゞそれだけで治療の方法を知らないために、どし〳〵慢延したものと見える。

何百人死んだか一寸數え切れぬといふ程であるから、恐らくこの疱瘡で數百人は死んだものと思はれる。從つて一家族が同時に罹病して、全滅した家などは死骸の取りかたづけも出來ず、ゴロ〳〵と死体が横たわつて見るも悲慘な光景を呈した。又一方シララカの疱瘡は別れて北進し、遂に多來加方面を襲ひ、愈々猛威を逞しうして、今度は西海岸に傳播したのである。眞先きに全滅したのはウシロ（鵜城）であつた。當時ウシロは西海岸北端に於て最も早く開拓された地であつた處から、アイヌも約三十戸約七十名程住んでゐた。然しこの部落も哀れ疱瘡の爲に、潰滅せねばならなかつた。

愈々猛威を振つたホウソウは更にそれより南進し、遂にアラゴワイ（荒貝）まで傳播し漸くこゝで終熄したのである。この一大傳染病は殆ど全島的に魔の手を伸ばし疱瘡襲來の慘禍を受けぬ部

落は殆どなかつた。しかしてこの慘事はアイヌ民族にとつては、減少の最も大なる致命傷であつたとも云へるのである。かくて、又復アイヌ達に第二回の慘禍が襲來したのである。

明治十九年である。榮濱を中心として再び疱瘡が流行し始めた。當時榮濱には露西亞の流刑囚でコルサコフ（大泊）の監獄を出獄して百姓をしてゐる露西亞人が約三百名程住んでゐた。彼等の中にも斃れるものは相當の數に達したが、就中、魯禮より以南にかけては、第一回に劣らぬ猖獗を極めたのである。

白濱のアイヌ酋長内藤氏は當時の模様を次ぎのやうに語つてゐる。

×　　×

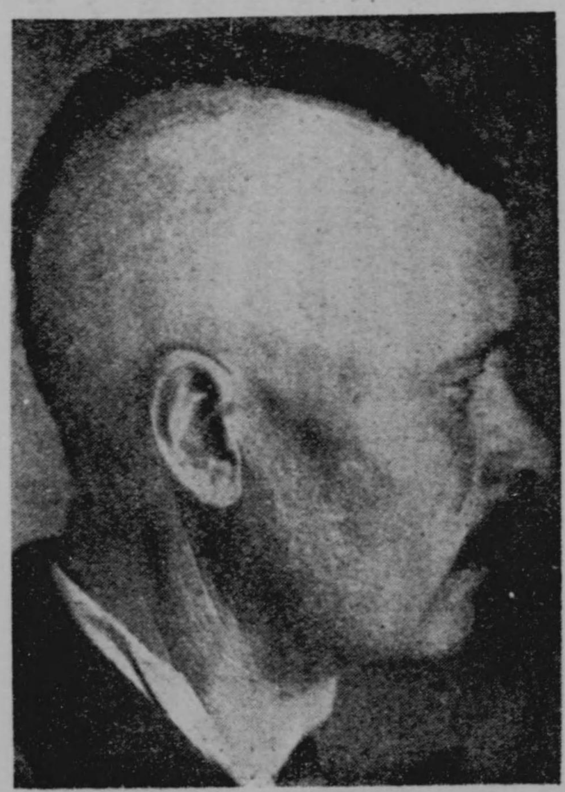
はたち位のときであつたと思ふ、當時吾々一家はロレー川の附近に住んでゐた。川向ひには四戸、こちらは五戸程のアイヌが住んでゐたが、私はいつも川向ひに遊びに行き、漁場の若者達と遊んでゐた。恰度附近に漁場を經營してゐるアイヌがあつたが、そこのオヤジに非常に可愛がられた。それで毎日遊びに行く、さうしてゐるうちに春になつて、（明治十九年）突然一人が熱病で倒れた、續いて他の一人も倒れると云つた具合で、僅か三日のうちに四戸（十六人）のアイヌ達はコロ〳〵と死んでしまつた。そのうちに私も熱病に冒され殆ど三日間は何も判らなかつた。漁場の親爺の言ふには、川向ひで罹つたのは酋長の息子だけだと、非常に氣の毒に思ひ、毎日毎夜寢ずに看護してくれた。

其お蔭か二十日程寢て起きられるやうになつたが、氣の毒なのは川向ひの人達である。死骸を片づける者がないので、穴を堀つてドシ〳〵一處に埋めた。病氣が治つてから行つて見たのだが家の中には親子兄弟がコロ〳〵死んでゐたのを見て、涙をながした。私達の方で罹つたのは私一人だけだつたが、他の部落ではもつと死んだ。部落全部がみんな死んだ處が澤山ある。この熱病でアイヌの死んだのは數へ切れない位だつたらう、と語つてゐる。

即ち樺太アイヌは二回の流行病で、慘々に叩きつけられた。凡そこの二回目の疱瘡で、第一回を合せて二千人位は死んだらうと云はれてゐる。兎に角この流行病は樺太アイヌ滅亡史には忘れることの出來ない事實である。かくてアイヌは漸次、日露人の入り込むに從つて、愈々惡疫を傳播され、ために彼等の体質は一層薄弱となり、現在に及んだものである。

樺太監獄秘話

流刑殖民で開發す。宛然地獄島となる。女囚は特別の待遇。腐敗、惰落せる官憲の生活



コルサコフ（楠溪町）監獄に流された露國囚人の、頭半刈りは逃走しても判然とするためと更に制裁的意味も含まれて居たといふ

（明治二十六年コルサコフ監獄内で撮影）

流刑殖民で開發す

明治八年、千島、樺太が交換される以前より露國政府は、樺太に囚人を護送してゐたが、然し囚人が一度び出獄して樺太に止まつても、果して殖民地としては好適であるかどうかに就て、なほ調査する必要ありとして、明治六年春農學士ミツリ一行の調査員が來島して、各地を詳細に亘つて探査したものである。一行は各地に於ける地質、氣候、植物、將來開發すべき新村落、農牧業に關して研究を遂げ、この間約半年を要して引揚げたが、その後政府に調査の模樣を報告し、併せて囚人の流刑場としては、好適であると述べたので、その結果本國にある中央監獄を閉鎖して、專ら樺太を囚徒に依つて、開發せんと企てたのである。更にその後に至り、露國政府は（明治十三年）監獄長官カウキンウラスキーをして本島に出張させ、これ又各地を踏渉して、開拓出來得るや否や、嚴重に調査したものであつた。しかしてこの報告も、前に調査したミツリ農學士の報告と同樣なるものであつたので、愈々露國政府は、翌十四年に至つて始めて、樺太に監獄新制度を施行したのである。

しかして先づ最初は、毎年罪人五百人乃至六百人を義勇艦隊の驅逐艦に搭乘させ、オデツサ港より輸送した、僅か一年足らずに囚徒を約一千七百余名流竄したのである。越えて明治十六年に至つ

て露國政府は愈々樺太は囚徒による開發でなければならぬとして、當時の大監獄であつたウイレンスキーの監獄を廢して、專ら重罪犯人を樺太に護送し、しかして在獄囚徒の數も五千人と定めウ監獄廢止後は毎年一千人余の囚徒をオデツサ港より配流しのである。明治十四年夏に至つて、コルサコフ（楠溪町）並にヴエー（北樺太）の二ヶ所を正式の監獄と定め、其後更に增加して、アレキサンドルフスク、ルイコフ、デレビンスコエ、オールの四ヶ所を加へ、文字通り樺太を囚徒の住む島とした。

露國政府は如何にしてこの流刑囚が出獄した場合、樺太に土着し、開發せしめるかに就ては、非常な苦心を拂つたものである。それで、刑期中に品行試驗期、改悛期の二期を設けて、試驗期終了後は改悛部に編入し、大いに囚人の懷柔につとめたものであつた。今刑期の長短、品行試驗を調べて見ると、次ぎのやうになつてゐる。

刑期		品行試驗
第一類	（イ）無期	
	（ロ）二十年以上	八年
	（ハ）十五年乃至十九年	五年
	（ニ）十二年乃至十四年	四年
第二類	（イ）十年乃至十一年	二年
	（ロ）八年乃至九年	一年半
		一年半

第三期（イ）六年乃至七年　一年半
（ロ）四年乃至五年　一年

鑛坑採掘に服役してゐた短期の流刑人には品行試驗期を短縮すを恩典を與へて居た。尙試驗期中に非常に從順で勤勉なものは、直ちに改悛部に編入され、そして改悛部の囚徒は戒具をつけることを赦されてゐた。それのみならず第一類の囚徒は三年、第二類の囚徒は二年、第三類の囚徒は一年を經へれば、條件附で監獄外の居住と結婚の自由を與へられたものであつた。此等の試驗期、改悛期中のものは流刑罪人とよばれ、獄舍や獄内で用ふる諸道具の工作や、囚徒の食糧である馬鈴薯や其他の蔬菜の栽培や漁業等に從事せしめたものであつた。

其の勞働時間は夏には毎日十一時間、冬には十時間以内とし、それらに依る勞働賃銀は囚徒の收入となつた。千八百九十九年一月一日の調査に依れば各監獄の囚徒及び看守數は次ぎの如くなつてゐる。

監獄	看守數	品行期中ノ者	改悛期中ノ者
アレキサンドル監獄	一三九〜二五	一、二四三	一、五六七
ヴエー〃			
ルイコフ〃	四八	三三一	五七〇
オノール〃	一七	一二二	二四〇

デルビン〃	一八	一六七	三三四
マロイモフ〃（老廢者養育所）	四	三七	一三二
殖民監督下にあるもの	—	八七	一六六
コルサコフ監獄	八六	七〇五	五九五
計	三三七	二、六九二	三、六〇四

試驗期改悛期を終へたものを流刑殖民と名づけ、織工、市人、商人と稱へる事を許された。しかして地方長官の證明を受け、黑龍江沿道總督のゆるしさへ受ければ、商業や其他の營業が出來たものである。さらに又黑龍江沿道に住むことをも許し、又農業上に必要である器具、種子、牛馬等を貸し與へた。

あらたに仕事につく流刑殖民には食糧、衣服、靴等を給與し、未成年者には半額、幼年者には一ヶ月一留五十哥を支給したのである。又獨身の殖民及び農民には女囚あるひは殖民中の女子と結婚することを許してゐた。流刑殖民、流刑農民及び流刑罪人と共に樺太に渡島した自由民に對しては總て租稅を免除した。然しながら義務として、道路の修繕、官設の遞送所の無い土地に於ての病者及び公用旅行者を遞送すること。公文の送達をなすこと等が課せられてゐた。明治二十七年及二十九年の二回にわたつて、詔勅によつて特赦令が發布され、流刑殖民は刑期滿限の日より六年を經過して品行が特に方正であるものは、所轄長官の上申に據つて刑期滿限の日より四年を經れば、流刑

殖民に編入するやうになつた。一度び流刑農民となれば、殆んど自由民としての權利が恢復して、聖彼堡、莫斯科を除く外は、本國内何處にでも住むことができて、その上に何等の制限も受けなくなるのである。

右に述べたやうな方法に依つて流刑殖民をして、次第次第に各地に村落を開設したのであつた。かくて千八百九十七年の末頃には、村落の數が百三十三となつて、戸數は千八百九十九、人口一万三千七百一人を算ふるやうになつた。

宛ら地獄島となる

露國政府の罪囚の移住政策は、囚徒に依つて樺太を開發せんとするのが目的であつたが、併しこの政策は島の開發には、何等の効果も齎らさなかつた。遂に樺太をして危險、殺伐、遊惰の一大地獄島としてしまつたのである。即ち當時の住民と稱するものは、何づれも物凄い前科者ばかりであつた。勿論出獄しても、改悛するものなどは極めて少なく、集まれば賭博、喧嘩などを常習として至る處に血腥い爭鬪のみを繰り返してゐた。

コルサコフ（楠溪町）などは、苦役に從ふ囚徒が、鐵鎖を引きつゝ隊をなして往來を騷がし、町の通行人なども又殆んど、これら囚人乃至は出獄前科者などであつた。從つて、官廳、商店乃至官吏

の住舍などに行けば、殺人犯の女中とか、放火犯の料理番とか、或ひは子殺しの保姆とか强盜の門番などで無疵の者などは殆どなかつた。然し彼等のうち案外に從順であつたのは女囚で、男子にあつては、假令幾年監獄内に生活したにせよ、いつかはその兇暴性が現はれて、雇主を殺したりすることなどは常に繰り返されてゐた。それはちやうど檻の狼が、機會あらば飛びつかんとする氣配に等しかつたものである。白濱のアイヌ酋長内藤惣吉氏は、コルサコフの監獄に就て、次のやうに語つてゐる。

獄舍内には工場がある。農作地がある、商店があり、この商店には囚徒の製作品を商つてゐる。又學校もあつて、囚徒の子弟を教育してゐたが、然し何づれも暗い監獄内に押し込められて、食物などもロクノ〳〵與へないやうな仕末であつた。

と監獄内の事情を語つてゐた。然し當時の女囚だけは特別の待遇を受けたものである。

女囚は特別の待遇

放火犯でも、殺人犯でも、中には美しい女も隨分ゐた。醜い女は別として、顏形が美しければ、何づれも看守の手にかゝり殆ど妾同樣に取扱はれた。別に勞働することもなく、暗い獄舍に繫がれるものでもなく、美衣美食勝手放題の眞似も許可された。それで若しもこれら女囚が姙娠でもすれ

ば、待遇處か直に出獄眞近の囚徒を引き出して、無理矢理に子供とも押しつけて、閨墨に從事させたものであつた。

看守達の亂行は目に餘る程で、日夜酒女、賭縛に耽り、その不仕鰐は言語に絶するものがあつたとさへ云はれてゐる。勿論これは獨りコルサコフ監獄の看守のみではなく、アレキサンドルフスクその他の監獄も同樣であつたことは云ふまでもない。

兎に角看守達はかやうな、亂行振りであつたので、囚徒達も改悛するわけはない。如何に彼等が兇暴であつか、ハウェー氏の極東紀行の一節に次ぎの如く書いてある。これはニコライフスクであるが、コルサコフもこれと殆ど同樣と見て差支ない。

十月一日、余は敎會より歸る途中にて、宿の主夫婦に遭ふ。夫は他に所用ありとて別れしが、

拷問にかけられてゐる囚人コルサコフ監獄

主婦は余に同行を求めたり。余は婦人を伴へ歸り來るに二人の貧民に遭ふ。一人の男は余等の方へよじけかゝり、微醉機嫌の生溫るき口調にて『お早う、御機嫌宜しう』など喋りたりしが其日の夕六時半頃彼は市場にて死骸となり居たり。聞けば一人の男が僅に七留の故を以つて彼を殺したるなりと、然かも之れ白晝巡査も兵士も、他の人民等も居合はすべき筈の市場にて行はれたるなり。されど、市場は元來罪を犯すべき性質を帶びる處なるを以て、官吏等は彼等の爭ふまゝに放任し置き、假令一方が死するとも、單に一惡漢を失へたるに過ぎずと思へるなりと、知らば怪しむに足らざるべし。其日より三日ほど過ぎて又人殺しありたり、一人の男余を訪ね來り、厨にてしばし遊びし後、余の召使へる二人の男（前科者即ち流刑殖民）に送られて市場を出離れて己が家に歸れり。彼は召使と別れて內に入り、ランプの下に坐したるに突然窓の扉を排する者あり、何者なりやと思ふ間もなく、銃丸其間より飛び來りて彼は斃れぬ。僅に二週間の滯在中、此方法にて殺されし者三人まであるより見れば、之れ流行の殺人法なるべし。最一人は我宿の眞向ひの家の主人なり。此等の被害者は海岸にて兵士に發見せられたり。彼は五十六留の銀貨を懷中にして、ニコライスクより歸り來る途中、海峽の眞中にて突然其脅に組付かれ殺されて死骸を海中に投ぜられしなり。

警察官は名のみ

最も恐ろしき光景を呈せる市場を下りぬ。其處には屢々爭鬪あり、ナイフ、劍、拳銃の兇器を振廻はして其危險云ふばかりなし、されど兵士も巡査も全く無頓着にして、なすがまに放任するを常とす。昨年（千九百〇年）エースター祭の日の事なりとか、余が知人某は市場を通り過ぎんとせしに、高加索囚徒の一群一處に集りて、何事か起れるが如くなりしが、立並べる彼等の足の隙間より二人の囚徒の共に倒れて上になり下になりつゝ相爭ふを見たり。而して一人は遂に他の一人を組伏せナイフを突立てたり。原因は嫉妬よりの怨恨にして三年以前より被害者は警察の保護を請へしも、警察は未だ起らざる事件に對しては、何等の所置をとる能はずとて之を聽かざりき。折しも居合はしたる巡査は、加害者を取抑へんとはせず、空中目がけて空砲を放ちたり。人傍より其故を問へば、同僚を呼ぶなりといふ。二三百ヤードも隔たれる地に警部も巡査も集り居るに、此兇行には相關せざるものゝ如し。某は急ぎ相知れる官吏の邸に至り理由を述べしに、彼は直に軍政長官に上申し、軍政長官は又警察署長を召して、現場に至り、何事なるや見來れと命じたり。其時署長は現場に至りしに、今や兩人ナイフを以て切合ふ最中なりしが、彼は直に歸り來りてに復命して曰く『閣下よ、之れ日々起る普通の喧嘩にて、別に意に介すべきものには候はず』と。されど被害者は遂に病院に收容せられて、翌朝死去せり、一方の兇行者も又頭部に五ヶ所の重傷と、他に二十餘ヶ所の輕傷を負へたるが、遂に其日に死去せりと。

かくの如き囚徒をして、植民事業に就かしめたからとて、到底實蹟を擧ける理由がない。一度出獄した彼等は、土地に對しては毫も執着心なく、假令住み馴れても耕作などは殆どせず、よしんばしても拙劣なる農事は到底彼等の生活を支へるやうな、收穫高は擧げられない。ために出獄囚人達の大部分は、食ふや食はず、實にみじめな生活をしてゐたものであつた。これがため流刑殖民は機會あらば渡航券を得んことを願ひ、自由農民は一日でも早く本島を離れ、本國に歸還することのみ希望し、仕事などはそつちのけの狀態であつた。然し彼等は歸るには旅費がなく、亦歸るにしても官廳は容易に渡航券を與へてはくれなかつた。

"We cry, but we must kill."

この言葉も彼等にとつては息むを得なかつたことかも知れぬ。他人を殺して渡航券を奪つたり、或は旅費を掠奪したり、强盜などは白晝公然と行はれたものである。各村には監視人はゐたが、然し何れも無能で、而も力弱く到底これら囚徒の暴行などは取締れるものではなかつた。當時南樺太即ちコルサコフ（楠溪）洲の統治に屬してゐた村落は、コルサコフの一市を除き六十八個の殖民村（明治二十九年）があつた。農民約五千三十七人、農村の重なるものではウラジミロフカ（豊原）ダリニエ（軍川）サカヘハマ（榮濱）等がその主なるものであつた。

余　錄

一昨年夏頃大泊の埠頭でパンを賣つてゐた一人の老露西亞人があつた。今はどうしたか姿も見えない。名をタクールと云つたが、彼が當時筆者に語つて話に依ると『明治二十六年鄕里モスコウで自分の妻と姦通した相手の男を刺し殺し、遂に十ヶ年の懲役となり、シベリヤへ流され更に樺太へ流刑された、その頃大泊楠溪町は相當繁華な町であつた、私は百五十人ばかりの囚人連と共に二十七年の春楠溪町へ上陸したが、その頃大泊海岸一帶には山程鰊が打ちあげられ、それが腐つて鼻もちにならなかつた、今の大泊附近は密林で熊なども時折出た監獄の生活はお話しにならぬ程ひどかつた、私は看守の姿をとう〳〵押しつけられたが、妻にはその看守の子供が二人あつた、ひどいことには、看守は獄舍內で吾々が見ゐるてのに女囚などを恥めたものだ、然し女囚もしたゝか者が多かつたので、寧ろさうされることを喜んだ、特別優遇されるからでもあつたらうが、兎に角毎日喰はせる食物なども、ロク〳〵與へてはくれなかつた、それでも私は我慢をして眞面目にやつたので出獄するとき牛を數十頭貰つた、そして久春內で牧場をやつたが、その牛も出獄囚徒連に片端しから喰ひ殺され、とう〳〵牧場も失敗してしまつた……。

四十五年前の南樺太

……（チエホフのサハリン紀行）……

當時の大泊、眞岡、豐原、榮濱
其の他各部落の狀況如何

今の花屋ホテル附近より以北

明治二十三年頃の豐原の殖民地
（カフロミジラウの時當）

チエホフは露西亞の大文豪として、十九世紀に於ける大**トルストイ**と比較さる可き人であつた。**チエホフ**は日清戰爭以前露西亞大國が「東」へと進出しつゝある明治二十年頃即ち千八百九十年前後、西伯利亞各地方を視察し、更に進んで**サガレン**全島の旅行を終つて、西伯利亞紀行を出版した。此旅行紀は「東の海」を夢みて居る當時の露人に對して非常なる**センセーション**を捲き起したものである。**チエホフ**は北樺太より船で今の大泊に上陸し、豊原を通過し榮濱方面までその足跡を印したのであつた。一大文豪**チエホフ**が見た當時の樺太は如何なるものであつたか、今は既にこの紀行文は絶版になつてゐる、が文献としても價値あり又非常に興味深いので、この一篇を戴せることにした、當時村落が形成されてゐた處でも今は跡かたもない處がある。村の名稱なども出來るだけ調査して註釋を加へたが、三、四判然としないとこがあるが諒とされたい。

亞港を後にコルサコフへ（楠溪町）

明治二十年頃の楠溪町高臺

一八九〇年（明治二十三年）五月に北部樺太に渡つて、九月上旬までに視察を終へて、九月二十三日に汽船バイカル號に乘つて、南樺太に向けアレキサンドロフスキー港を出帆した。既に北部視察に飽きて居る余は感想を養ひ觀察をなし得るのだから、非常に愉快であつた。バイカル號は夜十時に拔錨した。其の夜は温かで心地よかつたから、余は一人船尾に立つて後をふりむいて幻の如く淡くなり行く陸地と別れを告ぐるうちに、波に守られて居る樣なトリーブラート（海中の岩礁の名で三人兄弟の意）も今はぼんやりとして、丁度三人の僧侶が、黑い衣を着てうづくまつて居る樣になつてゐる。汽船はなか〳〵騷々しいのにも拘らず、トリーブラートの波の當るのが聞える樣な氣がする。其中に船が通行するに從つて後へ〳〵殘されて眼中から夢の樣に消えて行く、ざゞざゞざゞ……と寄せては返す波の音の中に、力のない怨を抱く樣な音が聞える。段々あたりが靜かになつた。三里餘りも來たと思ふ頃、岸に火が燃えて居る、此處が恐ろしいボエボートの監獄である。少し行くとヅーエ炭坑の火も見える、其中に火光も消え、何物も見えなくなつて、暗黑の幕は

あたりを覆ひ、丁度睡眠不足であつたり、又不吉な夢でも見た後の様な嫌な氣持になつて來た。

旅行中は幸に氣温は注文した様に暖かで、平靜で、愉快であつた。左手には樺太が靑ずんで居る。殊にまだ徒刑場として荒されない原野や、昔ながらの所などが黑ずんで見える。右には晴れ渡つて全く霞んだ様な、遙彼方にダッタン沿岸が夢の様に浮かんで居る。此邊は海峽とは云ふても外海の様で海も低くはない。一体樺太の三分の一は緯度から云ふと、佛國に相當して居る。若し寒流が岸を洗はなかつたならば、吾人は實に立派な土地を領する事が出來るし、本島も犯罪人の住所ともならなかつたらしい。晩夏尙流氷を見ると云ふ、北方の諸島から來る寒流は、本島を兩面から挾み、殊に寒流及寒風に對して全々防衛物を有さない東海岸一帶の地は、其の困難知るべしである。其地の万物は寂莫となり、植物は全く極地の如き有様を呈して居る。西海岸は有名なる黑潮の影響を受けるから寒氣は餘程弱い。南部に行くに從つて氣候が温暖になるのは勿論だが、未だ佛國と日本とは比較にならぬ。是と同時に樺太植民地は過去三十五年間野地に小麥を播種し、又下等なる原始植物が芽を出す事を得る位に止まる。北部地方に力を盡し、而して最も温暖なる、殊に西海岸南部の地が全く無視されてゐたのは、頗る異様に感ぜられる。汽船からは双眼鏡でも肉眼でも秩序正しき林及明綠色なる汁多き草が一面に繁茂して居る海岸の丘を望み見る事が出來る。然し一軒の家、一人の人も見えない。

眞岡には流刑囚徒が三十八人

それは私達の航行が始まつてから第二晝夜目であつた。船長が私の注意を小屋や納家建ての小さい一群れに向けて、斯う云つた。

『あれがマウーカですよ』其のマウーカでは古くから昆布が取れて、其を支那人が非常に好んで買ふのであつた。そして此事業が相當に成り立つて、既に多くのロシヤ人及び外國人に良い儲けを齎したので、此の土地は樺太に於て非常に評判のものである。其所はヅーエ炭坑から百五十餘里南にあつて、緯度四十七の所にある。そして比較的良い氣候なので有名である。何時頃からか產業が日本人の手に移つて了つた。ミツーリに據るとマウーカには日本人の建物が三十以上あつて、其所には何時でも四十人位の男女が住んでゐたが、春になると日本から其所へ三百人許の人がやつて來て當時其所で主な勞働階級をなしてゐたアイノ人達と共に働いたのであつた。今では昆布業はロシヤの商人セミヨーノフが占有してゐて、彼の息子は何時でもマウーカに住んでゐる。仕事はスコツラント人のデンビと云ふ、最早若くはないが見たところ物知りな男が處理してゐる。彼は日本の長崎に自分の家屋を持つてゐて、私が彼と知合になつた時、私が確か秋には日本へ行くだらうと話したら、彼は愛想よく彼の家に滯在して吳れろと申し出た。ロシヤの移住者が此所へ出稼ぎに來るやう

になつたのは、未だホンの千八百八十六年からの事で、確かに自分一個の意志で來たらしい。何故なら監獄所長は何時でも昆布（ロシヤで昆布を海のキャベツと云ふ）よりも酸つぱいキャベツの方に多く關心を持つてゐたからだ。最初の試みは全然成功したものではなかつた。と云ふのはロシヤ人は此の仕事の純技術上の方面を少しか知らなかつたからである。今では彼等は慣れて來て、デンビが彼等に對しては支那人に對する程に滿足してはゐないけれども、然し既に時と共に其所で數百人の移住者がパンの一片を稼ぎ得るやうにならうことは、眞面目に云ひ得られるのである。マウーカはコルサーコフスク地方に屬する。現在では流刑植民が三十八人住んでゐる。男三十三人、女五人である。三十三人共全部戸主である。其中三人は已に百姓の稱號を持つてゐる。女は皆懲役人であつて、同棲者として生活してゐる。子供もゐなければ教會もない。で退屈は多分恐ろしい程のものであらう。殊に勞働者が仕事を去つて了ふ冬には、其處の役場は只一人の看守人からなつて居り、軍隊は一人の上等兵と三人の無位の兵卒だけから成つてゐる。

屯所の文官は看獄官一人で、軍人として上等兵と三人の兵卒ばかりである。樺太全島を鮭に比較してみると殊に其南部は魚の尾に似てゐる。尾の開いた方から向つて左の扁平部はクリリオン岬（今の西能登呂岬）と呼び、右はアニワ岬（今の中知床岬）と云ひ其兩岬間の圓形なる灣入をアニワ灣（今の亞庭灣）と命ず、クリリオン岬が旭日を受けて反射する時は實に美麗なる景色を現出する。其處に唯一つ立つて居る岬頭の燈臺は白色であつて、貴族の別莊の様にみえる。此岬は海中に突出

したる可成大きな青色の平坦なる岬で、丁度遠くからみると、よく灣形をなしてゐる原野の様である。其原野は一帶に青々たる雜草に覆はれてゐるから、此處に家畜類でも徘徊してゐれば、其景色はセンチメンタルなものであるが、惜い事には寒氣がつよいので動物は遠く、森林中に逃げ込んでゐる。一望すれば開拓すると有望の地の様にみゆるけれども、實際は不可能である。如何となればクリリオン岬は夏は概して鹽氣つよき海の霧に閉ぢられ、其霧が植物の發育に惡影響を及ぼすからである。

行政の中心地コルサコフ（楠溪町）

吾々はクリリオン岬を廻つて九月廿六日午前に亞庭灣に進入した。其灣は直徑二十里位はあるのだが、一岬又岬と其沿岸が見えてきた。略其半圓をなしてゐる岸の中間に一寸した岡がある。其邊の入江をロソセイ灣（鮭の意）と云つてゐる。入江に出て、唇の様な所に南部一群の行政中心たるコルサコフ港がある。港は海に面して、相當な繁華さである。それはシベリヤ風でなくて、一種特別な外觀を呈してゐる。何と名をつけてよいかわからない。此町は四十年前南海岸の其處此處に、日本家屋や、倉庫が散見してゐる頃に建られたのである。コルサコフ港開基の年は千八百六十九年（明治二年）といふ事であるが、それは流刑殖民地としての關係から云つた事で、實際はロソセイ

灣の岸に露國の最初に海港の開かれたのは千八百五十三年（安政二年）からである。今でもハッカドマリと云ふ名がのこつてゐるのは其頃の名であらう。海からは唯一本の大通がみゆるばかりである。多分遠くから橋、町及家が三列になつて、海岸に沼ふて下におりてゐる事であらう。

新しき木造家屋は陽に輝いて反射してゐる。古い簡單な、然し建築學上から云ふと、美しい教會が白く雨風にさらされてゐる、多くの家の屋根の棟には竿が立つてをる。それは多分旗を建るのであらうけれども、遠くからみると逆立してゐる樣で不愉快なものにみえる。此湊も北部の港、水道と同じ樣に海岸から半里位沖に碇泊する。波止場は唯小蒸汽船又は艀船の爲になるばかりである。吾々の乘つて行つた船にも最初は官吏の乘つたカッターが來て間もなく『おいビールだ、おいコニヤークの盃だ』と云ふ愉快さうな聲が聞える。

間もなく一艘の小船がやつてきた。其船は水夫風をしてゐる囚徒が乘り組み、舵の所にはコルサコフ郡長ベールイ氏がすわつてゐる。小船がツラタブの所へ近づいた時に、郡長は軍隊的に『オール上げ』と怒鳴つた。自分は速に其小船に移つて郡長に挨拶した。十年の知己の樣に色々世話してくれる。共に上陸して其宅で食事を共にした。彼は近頃まで、タライカの道路工事を巡視して歸つたばかりだと云つてゐた。

醜業婦達も左程に輕蔑されない

南部の樺太に勤務してゐた將校や文官が、必要品の不足を感じた時代は已に忘れられて居る。一八七六年（明治八年頃）には麥粉四貫三百匁位で四圓もする。ウォッカ一瓶が三圓もして新鮮なる肉等は藥にしたくもない。住民の生活程度も非常に低くて話にならない。浦鹽港の新聞通信員の話によれば、何處の誰の所へ行つても、調度に盃なんてありはしなかつた。そしてマホルカ（粗末なる刻煙草）百匁で二圓五十錢もしたから、移民だの下級の官吏などはやむなく、紅茶や團茶を代用してゐたとのことである。

コルサーコフスク官衙の住民は百六十三人、男九十三人、女七十人、だが自由人、軍人、其の妻子、監獄に宿る囚人を入れると、千人一寸越すであらう。戸數は五十六、然し之等凡ての家計を見ると農夫よりも、都人、商人の其れが多い。村落經營の見地からすれば其れ等は全然ゼロに等しい。耕作地は全部で三デシャチーナ、又監獄を入れて此所の人が使用する草原は全部で十八デシャチーナで、官衙地として此所を撰んだ人が、此所に軍人以外に農夫等が將來住むに至るであらうと云ふことを少しも考慮に入れてゐなかつたのを知る爲めには、如何に狹苦しく此所の屋敷が相互に押し合つてゐるか、如何に繪畫に於ける如く其等の家々が傾斜面や、深谷をなしてゐる窪地の底に密着してゐるかを見る必要がある。彼等が何に從事し、何によつて生活してゐるかと云ふ問に對して、勞働とか、商買とかと答へる。讀者は何れ知るであらうが、副業に就いては、南樺太人は北樺太人のやうな絶望的な狀態に居る譯では決してない。彼等に意志さへあれば少くとも春夏には儲け

仕事がある。然しコルサーコフスクの人は、此れには殆ど關係しないと云ふのは彼等は滅多に此の賃金勞働に出掛けないで、本物の都會人のやうに、不定の仕事、其偶然的なことや、不安定な意味で不定な仕事に、生活を立てゝゐる。或者はロシャから携帶して來た金錢によつて暮してゐる人は澤山ゐる。他の者は事務員をやつてゐる。第三の者は官吏となり、第四の者は法律上其の權利を持たぬに拘らず、店を開いてゐる。第五の者は囚人の古道具を日本酒と交換して其れを賣つてゐる。女は自由な身分の者でさへ、淫賣をやつてゐる。人の話しによると高等な學校を終了したと云はれてゐる一人の教育ある女さへも、例外とはなつてゐない。此所は北部程寒くなく、又餓えてゐない。そして自分の妻に其の身を賣らせてゐる懲役人は四半斤五十カペイするトルコ煙草を吹かしてゐる。だから此所の淫賣は北部に於けるよりも一層惡性のものと思はれる。尤も結局同じことではあるまいか？　夫婦者四十一組、その上に內緣の者二十一組、自由な身分の女は十人だけ。

つまりルイコーフスクより十六倍少く、ドウェのやうな割目の土地より四倍少ない。

コルサコフの監獄と囚徒の生活

開發關係から言つても、コルサコフは北部都市に劣つてゐる。こゝには今に到るまで電信なく、

測候、測地の測点基本もない。であるから一寸他地方とは沒交渉の感がある。又氣候等についても前に來た各著述者等の著書に依るのほかはない、溫度の平均を取つてみても春夏秋の三季はヅーエよりも二度高く、溫かで冬は五度も溫暖である。然るに同じくアニワ灣の沿岸でもコルサコフの少し東方に當るムラビヨフ港では溫度が非常に低くてヅーエと良く似てゐる。コルサコフ港の北方略二十二里なる東海岸內淵の溫度については、汽船クサードニック號の船長は千八百七十年（明治七年）五月二十三日氷点下二度で雪を見たと言ふてゐる。クスンナイに於ては一年間に百四十九日の曇天を見、南部なるムラビヨフカでは百三十日の曇天を見たとのことである。

コルサーコフスク監獄は官衙地の最も高い、又最も衛生的な場所を占めてゐる。主要街路が監獄の圍ひへ衝き當る所に門があるが、見たところ非常に小さいものであるが、此れは決して詰らない通用門でなくて、監獄の正門である事は、表札によつても、又每夕此邊に懲役人が群がつて、一人一人小門の中へ入れられて、身体檢査をされてゐるのによつても解るであらう。

監獄內の庭は傾斜面になつてゐて、其の中程からは旣に、圍ひや建物があるにも拘らず、紺碧の海や遠い地平線が見えて、其所は非常に空氣の流通の良い所のやうに思はれる。監獄を視察すると何よりも先づ眼につくのは、當地の役人が移住者と懲役人とをハッキリ區別しようと努めてゐる点である。アレクサンドロフスクに於いては、監獄附屬の工場や、數百人の懲役人の宿が官衙地全体に散在してゐるのに、此處では凡ての工場も消防小屋さへも監獄の構內にあつて、監獄外で生活す

ることは非常に僅少の例外の外には、懲治囚の懲役人にさへ許されてゐないのである。此所では官衙地は官衙地、監獄は監獄となつてゐて、官衙地に長い事住んでゐても、町端れに監獄のあることを知らずに過すことが出來るのであらう。

此所の獄舍は古く、室は息苦しく、便所は北部地方の監獄より非常に穢く、パン燒場所は暗く、獨房室は暗く、流氣窓がなく冷い。私は自分でも何回となく、如何に此所の獨房室の囚人が寒さと濕氣との爲めに身顫ひしてゐるかを見たのである。

此所には北部よりも良いものが一つしかない。それは廣い足械室で、其所には足械の囚人が比較的により少いのである。獄舍内で誰よりも身綺麗にしてゐるのは以前海員だつた者である。彼等は服裝もより清潔である。私が行つた時に監獄に寢起する者は四百五十人だけで、其の他の者は主として道路工事へ派遣されてゐた。此の地方全部で懲役人は千二百五人である。

第一の部落は當港より南東約一里の所にある日本風の名のつけられたボロアンドマリ（大泊）である。この村が始めて開かれたのは千八百八十二年（明治十五年）以前はアイヌ人の小部落があつたばかりである。住民は七十三名で内男五十二名、女十九名である。世帶數は四十七軒で内三十八軒は水飲み百姓である。村落附近には餘地が充分あるにも拘らず、各家は畑地として七百五十坪位をたがやし、其他に牧草地として千五百坪をとつておくばかりである。

廢港となつた遠淵湖岸の一市街

ともかく此のボロアンドマリが北部地方にあるならば、總人口が二百位になつて、内百五十人位は地主となつてゐるだらう。南部の行政廳は此点から言ふと急進主義とでも言ふのか、古い部落を盛んにするよりも新しい部落を多く造らうと思つてゐるらしい。

コルサコフ港から十里程東方にムラビヨフ港がある。今は圖上で示す事が出來るばかりである。此邊は比較的早く六十年程以前から開かれた。千八百五十四年の露土戰爭、續いて英佛聯合軍がクリミヤ半島のセバストポールを包圍攻擊するだらうとの噂があつたので、一時其港は引揚げてしまつたが、十二、三年に慶應元年になつてブツセ湖（遠淵湖）又は名のナンフート灣の岸に復興された。ナンフート灣と海と連續してゐて、小船舶が這入る事のできる淺い湖と云ふ事である。ミツリ氏（露國の博物學者にして樺太について種々研究せる人）時代には此處に三百名程の兵士が滯在して居たそうであるが、一年猛烈な壞血症に罹つたので、撤退されたそうである。此處に港を置いた主なる目的は南部樺太に於ける、露國の勢力を張り、强固ならしめんが爲めであつたが、位置が適當でなかつたので千八百十五年（三十六年前）に全然廢してしまつた。

其の後放棄してあつた家屋は逃亡犯人にやかれてしまつたさうである。嘗て此地にムラビヨフ炭

坑あり、營倉に處せられた港務兵に掘らせた事があつた。廢港になつてからはどうしたか忘れてしまつた。

かもめ飛ぶ亞庭灣の汀をたどる

コルサコフ港より西の部落へ行く道は海岸に沿ふて氣持の良い程樂である。右手には一面に綠滴る樣な木が密生したる岡が連なり、左手に千波万波緩やかによせては返すアニハ灣を見て松風、波音共に心を樂しませる。波が打ち寄せて來る濱路には、一面に打ち寄せられた昆布が散亂してゐる昆布からは變な匂ひが來る、昆布をついばむ鷗は絶えず頭上に舞ふて、我等都人を見送りながら妙な驚聲を發してゐる。汽船も帆船も此邊へは更に來ないから、海上は全く天と水とで接觸して形づくつてゐる、水平線の外は何も見えない。灣曲してゐる岸は谷で所々に中斷されてゐる。其處にウンタナイ川（一名ウンタ川）が流れてゐる、以前は官設ウンタ農場があつた。囚徒は此谷をウンタカ（壁の中の小前中の最も太き物の意）と言つてゐたが名實相當してゐる。今は監獄附屬菜園があつて、移民家屋は三軒ばかり、之がペルッャバーチ（一の澤）である。

コルサコフ港から二里ばかりの所に千八百八十二年 明治十五年）に設定された『ソラビョカ村』がある。此村は樺太の村落としては比較的有利な狀態を占めてゐる。此村は海に面するのみならず、魚の溯上する『スズヤ川』の三角洲も近い、住民は牧牛を主として牛乳を販賣してをる。勿論農耕にも從事してゐる、住民は七十四名中男三十七名、女三十七名で世帶は二十六七位である。彼等は一人平均一町歩位の畑と牧草地を所有してゐる。

海に近い所は土地が良いが、海に遠ざかるに從つて雜木が多くなつて地味も感心されない。尙又此岸にコルサコフ港を距る六里餘の所に一村落がある、船で海を行けば十四カイリ位あつて、リュートカ（留多加）と名付け、同名の川の河口から一里餘ある。千八百八十六年（明治十九年）開かれたのである。コルサコフ港との交通は不便で、沿岸を徒歩で行くか、小舟で行くの外はない。車を用ひるのは困難である。住民は五十三人、內男三十七人、女十六人世帶は三十三である。其沿岸道路はソロビョフカを過て、スズヤ川の河口附近で北力に廻つてゐる。

一村女性の影さへ見ぬ處がある

地圖に依つて見ると、スズヤの上流はオホック海に注入するナイバ川（內淵川）と略同所である。此川に沿ふて殆どアニワ灣から東海岸に行かれる、一の路直線に沿ふて一連の村落が連續してゐる。之等の村落は、又全長二十二里に及ぶ道路で、連結せられてゐる。此一連の村落こそ、南部樺太の主要なる土地、即ち地相をなしてゐるのであつて、其道路は唯一の郵便道路となつてゐるの

である。

余は北部巡視で全く倦んで居る、けれども郡長始め餘りに親切に世話してくれるから、禮として も一通りの事を調べなければならない。初めて東海岸へ往復する時は、郡長ベールィ氏自身同行して、其後紀行文を書く時くは、移民監督官セルッエコ君を付けて、何くれと注意を與へられた。南部樺太の村落は變つた点を有して居つて、北部から來たばかりの人には一寸眼に付く、第一に赤貧洗ふが如き人が少くない、半年放棄された家屋や密閉された窓が多い。

北部の家屋の屋根は藁草葺であつたが、南部は削り板の屋根が大流行である、道路及橋梁は北部よりも餘程不完全で殊に『マーロエタコエ(小谷川)』及『シャンツア、ガルキノウラスコエ(落合)』の如き川の滿水時及豪雨の後には、屢々行通不能に陷る。住民は北部の者に比べると一般に一見して年も若く健康で活潑らしい。之は郡にとつて賀すべき事で、原因は多分南部に住んでゐる流刑囚徒は短期囚で主として若年者即ち流刑の爲に衰弱する事少き者の內から徴募したのであらう。二十才乃至二十五才で、既に獄內の刑期滿了して殖民地に住んでゐるのを見た事もあるし、三十才乃至三十五才で、既に農民權を得たものを見るのも珍らしくない。短期の青年囚を南部に送るのは前知事キニッエ少將の時に止められて、今では長期囚、無期囚でも南部に送るし、恐ろしいと云ふボエボードの評判の監獄炭坑などにも、短期囚を置く樣になつた。

以前長期囚を北部にのみおいたのは、一般に獰猛だから知事のお膝下で嚴重に監視する樣にとの

譯であつたのだ。

南部樺太では農民權を得たものも、早く大陸へ歸らうと氣を揉まない、從つてソロビヨフカの如きは、二十六人の家長中十六人までは、農民權を得てゐる所以である。又南部は總じて女の數が非常に少くない、甚だしきは一村女性の影を見ない所さへもあるが、女が居るとしても男が若くて活潑健康であるのに比べて、一般に老人で病人らしい南部の官吏や農民は、時々『北部の人は若くて羨しい』女を自分の所へつれて行き、『店晒』ばかりを送つてよこすと云ふ愚痴を言ふが、實際らしい。之は一例だが永年監獄醫を勤めてゐる人が言ふには、今度來た女囚は一人殘らず婦人病患者ばかりで、直に村へ嫁にやる譯には行かないと云つてゐた。

ミツリ獻身的に中里村を開拓

南部へ來てから一度も共同者切半者の言を聞かない。之は一區劃地には一人の家長を配する樣にしてあるからだ。けれども北部と同じ樣に、一部落に籍は入れてあるが、家を持たない主人はある。港灣地にも部落にも、ユダヤ人は一人も居ない。其家屋內の壁に日本渡來の繪を掛けてあるのもさうだし、時としては日本の銀貨が無意識に使用されてゐるのも、北部には見られない特徵である。

スズヤ川に沿ふて居る最初の村はゴールイムイス（新場）である、昨年（千八百八十九年）卽ち明治二十二年に當區の創設に係るので家もまだ建搠はない。此處には男は二十四人居るが女は皆無である。村は以前『裸の岬』と名付けられた丘の上にあるので村名に取つたのである。川も近いと云ふ程でないから井戸を掘らなければならない。

第二の村落はミツリヨフカ（中里）である。これはミハイル・セミヨーノフヰチ・ミツリと云ふ人を記念せん爲に取つて村名にしたのである。

ミツリは千八百七十年（明治三年）ウラーソフ氏指揮の下に、露都から送られた調査隊の一員で農業學者であつた人、此人は又道德堅固の人で、苦勞を厭はず樂天的の人にして他を引きつける力を有して、人を指揮する思想家であつた。渡島當時三十五才前後で、彼の命ぜられたる調査事項に對し熱心に興味を持つて從事し、彼は本島の地味、動物、植物を調査しつゝ北部は勿論西海岸を南下して、南部樺太を全部跋渉した。其頃には本島には殆ど道と稱すべきものなく、時に土人等の足跡を迚る山地内に其内に其形を失ふ等の事屢々にして、乘馬又は徒步の外巡回する事を得ず、其困難名狀すべからざるものがあつた。此時ミツリ氏は本島を以て、流刑殖民地たらんしめんとの說に一驚を喫し且心に思ふ所あり。

斷然と全力を本島の開發に盡さん事に決心し、殆ど慈母が愛兒の缺点を見ずして之を愛すると同じく彼も亦本島を愛する念湧然と起り、第二の故鄕として其凍れる、煙濃霧等は眼中におかなかつ

た。で不完全ながらも前人の測候表が寒冷を示して居らうが、彼自身、今日までやり來つた試驗が不成績に終らうが、彼れは屈せずして一意專心其開發に盡した。其の時代は到る所野生の葡萄だけ人身を埋むる樣な草原、そして住む者は日本人のみであつた。其後彼は本島の事務官となつたが、相變ず熱心に指導に努めた彼れは四十一才の時に猛烈なる神經衰弱となつた。そして遂に本島で死亡した。彼れは一書を殘した。

千八百七十三年、明治六年發行農業上より見たる樺太島一覽が夫である。まだ道のない時分には今のミツリカ村の所には公用で往復する官吏の馬を預かる中繼所があつた。牧夫勞働者四十彼等は此地に住する事を許されたので中繼所附近に家を造り各個經濟を持つてゐた家は十戶、住民は二十五人、内男十六人、女九人であつた。千八百八十六年、二十五年以前に郡長はミツリカには十戶以上收容する土地草原なしと見てそれ以上住居を許可しなかつたから其家の暮しむきは至極樂であつた。その村には牛十七、馬十三、鷄六十四居る。之は皆小さいのを除いてゞある。

豐原には主婦が一人もゐない

ミリカを去る一里九町程で新部落リストペニーチノエ村（唐松）がある。其道路は落葉松林を橫斷する林中界線である。唐松が多いから其名を有するのである、此村は一名フリスト、フオロフカと

も呼ばれてゐる。其譯はフリスト、フォールといふギリヤーク人が此邊の川でテン獵に從つてゐるからである。此村は農業には適しない、住民は男のみ十五名である。

フリストフォロフカ川に沿ふて少し進んだ所に、以前數人の流刑囚が集まつて、木細工に從事してゐた。官廳では四十戸の家を建る豫定であつたが其地が不便であつたから千八百八十六年（廿五年前）四軒の家はリストペニーチノヘ村の北方約一里の所へ移轉して、此地は今のホムトフカ（清川）の基を開いた、村名の起因は嘗て此地で自由移民ホムトフカが、長年獵に從事してゐたからである。

住民は三十八人內男二十五人、女十三人獨立世帶廿五である。此村は比較的生計もよいが、他村からも通行人からもきらはれてゐる。其譯はブローフスキーといふ亂暴な强盜が住んでゐるからである。

廿七、八町北へ進んで二年前（今よりは廿三年前）に創設された、ボリシヤヤ、コラン村（大澤）がある。此地は楡、柏、山査、接骨木、松、樺などの生育し居る川端の澤源をエラニといふてゐる（註、ボリシヤヤは大なるの意）此地には人の二倍餘りもある草が繁茂して、半月の間に七尺餘も延びるのである。同村の住民は四十人で內男三十二人、女八人で獨立經濟は三十である。

更に五ウエルスタ行くと千八百八十一年に建てられたウラヂミーロフカ（豊原）と云ふ村がある。それは苦役を管理してゐたウラヂーミルと云ふ少佐に因んで命名されたのであつた。移住者達は其の村をヌチヨールナヤ・レチカ（黑い小川）と呼んでゐる。人口九十一人、男五十五人、女三十六

人、戶主四十六人、其の內十五人は黑紹の商賣をし、自分の手で乳を搾つてゐる。二十七組の夫婦者の內六組だけが、法律上の屆けが濟してある。村落經營植民地としては、此の村は北部の兩地方を一緒にしたゞけの價値があるが、夫の爲めに樺太へ到來した、自由人の身分の、監獄によりて汚されてはゐない。つまり植民地に取つては最も價値のある女達の群の內で、只一人だけしか此處に移住しないのであつて、それに彼女は最近夫殺害の嫌疑の下に監獄に投ぜられたのである。北部地方の官吏達がドウエに於いて「家族室」と云はれてゐるものゝうちで苦しめてゐる自由人の不幸な女達は、最も此處に適したであらう。ウラジミーロフカには角獸だけで百頭以上あり、馬は四十頭、それに良い乾草がある。然し主婦が一人も居ない、つまり眞の家政婦がないのである。

ウラジミロフカの通橋を渡るとすぐに數百町歩の大草原が展開してをる。直徑約一里に達する半圓形をなしてをる。此大草原を橫斷して、道路があつて此平野の一端に千八百八十八年（明治廿一年）開かれたるルゴボエ（草野）村落の名、又はルーヂジキといふのがある。住民男五十九人、女五人である。

此處から一里弱の小間隔を置いて、ボボーフスキヤ、ユルツイ（牧師の幕舍の意）と云ふ千八百八十四年（明治十七年）に建られた村がある。

此村は多くはノウ、オアレクサンドロフカ（新しきアレタサンドロフカ村）と呼んでゐる。

往年の富岡南部に於ける中心地

然し前名の方が語原が面白い、一寸書けば、次の通りである。嘗つてセーション、カザンスキーと云ふ牧師がナイブチ分遣隊訪問に行つて、其歸途、犬橇でコルサコフ港に向つて此處まで來た。其時に天は暗澹として物すごく、風は轟々として肌を刺し、雪は巴まんじとまひくるひ咫尺もわからぬ大吹雪となつてしまつた。寒氣は刻一刻と强くなり全く絶体絶命の域に達してしまつた。「或人の話にはこれはアレクサンドルから歸途の事だとも云ふ」所がさいはひにして、アイヌ人の漁家が三四軒みえたので、辛うじて其處に達し、犬橇の馭者をウラジミロフカに遣はして、其困難の狀態を在住の移民に傳へさせた。使をうけた人々は大いに驚いて、迎ひを出したので牧師は九死に一生を倖ひ得てコルサコフ港に歸つた、其後此處にあつたアイヌ人の幕舍を（ボボフスキヤ、ユルツイ）と稱し地名ともなつたのである。それはこの地にカトリック教徒が多いのでワルシャワと呼ぶのである（ワルシャワは舊ポーランド主都にしてカトリック教の中樞地なり）。

住民は百十一人內男九十五人、女十六人で、獨立世帶數が四十あるが、家を有する者は十人にすぎない。

此村は丁度コルサコフに當る、こゝでスズヤ川の原野を終へてゐる。分水嶺を横斷してをる長い緩傾斜地を上下すると、ナイバ川（內淵川）に灌漑されてをる原野に出る。この原野に屬する最初

の村は、ボボフスキヤ、ユルツイから二里餘を去る、ベレズニーキである。この邊には以前非常に多く、樺が育生してゐたから、この名があるのである。この村は南部一郡の內で最大の村で、住民百五十九人、男百四十三人、女十七人獨立世帶百四十もある。既に通も四本あるし廣場もある。其廣場には村創設の時から教會堂、電信局、移民監督官の官舍を作る考へであつたらしい。若し殖民が成功したならば、ベレズニーキ（富岡）は區の中心点となるであらう。上述の如く將來有望の地なるにも拘らず、住民は早く刑期を滿了して、大陸へ歸りたがつてゐるのは譯がわからない。この村の北一里十町位の所にクレストイ村（深雪）がある、千八百十五年（明治十八年）に出來たのである。この村の起因は、昔こゝで二人の漂浪者が殺されて其墓所に十字架が立つてあつたからとも言ふし、又昔、針葉樹が多く切つて運び出されずに、この原野に十字架形にして重ねてあつたからだとも言ふ。此村はタコエ川の一支流が本流に注入する所にある。この地は土地もよし草原もあり收獲も豐作であるから、暮し向きは一般に順調である。聞く所によると三十一人、一度にこの地に移つた限り、官吏は器具等を更に送らなかつたので、徒手では如何ともなし難かつたので、監獄に願つて古斧をかりたが、又三年間も牛馬を一頭も送つてよこさなかつた。

住民は九十八人內男六十三人、女二十七人獨立世帶が五十二ある。こゝには珍らしくも小賣店がある。主人は以前ワイモフ郡で監視をしてゐた曹長である。

クレストイの次の村はナイバ（內淵）川に注ぐタコエと云ふ日本名を有する、川に沿ふてをる、

其川沿の原野はタコエの原と稱して、嘗て自由移民が住してゐたので有名である。ポリショエ、タコエ村は官文書には、千八百八十四年（明治十七年）に創設されたとあるが、實際は之より以前ださうである。この村はウラーソフ氏（ミツリと共に樺太調査に來りし人）を記念せんがためにウラーソフスコエーとも呼んだが、この名は永く續かなかつた

住人は七十一人、男五十六人、女十五人で獨立世帶は四十七ある。この地では上等兵が第一流の人物ださうだが、一週間程以前に其妻君なる若い美人……タコエの花と云はれてゐた美人が、天帝の怒りにでも觸れたか、ブシに中毒して死んでしまつたので、本人は勿論村人も惜んでゐた。この地は諸種の植物が繁茂してゐる。ポリショ、エタコエから川に沿ふて十町餘行くと水車場がある。（現在もこの廢墟が殘つてゐる）その水車場はコノノウキサ將軍が流刑囚なる、ドイツ人ラックスに命じて建てさせたのである、この水車では一布度（四貫三百六十匁）を粉にする費用として、其粉と一分度と（百九匁）一サペイ（一錢に當る）を取る事に定めてゐる。移民は非常に便利を感じ滿足してゐる。この水車場のなかつた頃は一分度に付いて十五哥（十五錢）製粉料を拂ふか、さうでなければ平素木製の手廻し挽臼で、粉を作らなければならなかつたのである。

内淵川は當時もよく氾濫した

タコへの原野を北へ行く事、一里五町餘でタコエ川に注入する小川を側面にひかゆるマーロエ、タコエに達する此の村は千八百八十五年（明治十八年）に開かれた所で、人口は五十二人、内男三十七人、女十五人獨立世帶が三十五ある。家族を造つてゐるのは、九軒のみでそれも正式に結婚したのではない。

この村から二里程緩傾斜を下ると、千八百八十四年（明治十七年）に開かれたる、ガルキノウラスコエ村（落合）一名シャンツィ村がある。嘗てこの地には日本の漁類倉庫があつたさうである。

日本人やアイヌ人はシャンチャと云つてゐる。タコエ川はこゝでナイバ川に合するので、地勢景色共に雄大でいゝが不便な處である。如何となれば春夏秋の雨天續きには四方の山から一度に水が押出すので、ナイバ川は氾濫してシャンチャを襲ひ、其猛烈なる水流はタコエ川の落口を障げるので、從つてタコエ川も氾濫する、この時にはガルキノウスラスコエは水の都として、有名な伊太利のヴニスの様な光景を呈する。

住民はアイヌの獨木舟で町内を漕ぎまわる、家は一般に根木を高くし、階段をつけて出入りしてゐるが、それでも床を洗はれる事がある。タコエ川が内淵川に合する所は半島形をなしてゐて、高い橋があつて景色が良い。人口は七十四で内男が五十人、女が二十四人で獨立世帶數は四十五、内二十九人は農民の稱號を得たものである。

この南部樺太一部を縱貫する道路の東海岸に出ずる一端は、ドブキー村（榮濱）に終つてゐる、こ

の場所は柏の森があつたさうで、村の開基は千八百八十六年（明治十九年）である。

ガルキノウラスコエとトブキー（榮濱）の間は約二里で其途中は多く燒けた森であるが、左手に絶えずナイバ河の洋々たる水を見る事が出來るので心地よい。同村の人口は四十四人、內男三十一人、女十三人獨立世帶數は三十である。理論上柏の生育してる土地は、小麥の作付に適當するのであるから、この土地も良いであらう。移民の話に依れば、今畑として穀物を播種してゐる所も、牧草を播いてゐる處も、以前は沼地であつたが、移民監督官の注意にて、深さ七尺餘の排水溝を內淵川まで通じたので良くなつたと云つてゐる。ドブキーからナイバ川の河口まで一里弱で、この間は一帶に土地濕潤であるから、人が住む事が出來ない。海岸は砂地で植物としても海岸砂地の小植物である。

道は海岸までついてゐるが川はアイヌの獨木舟で渡る事が出來る。この河口には以前ナイブチ港があつたさうで、それは千八百六十六年（慶應三年）に出來た處である。ミツリ氏の記錄に依れば、こゝには空家まで入れて十八戸あり、哨所、食料品賣店などもあつたのである。

千八百七十一年（明治四年）頃にナイブチ港へ行つた某通信員の報ずる處に依れば、貴族出身の下士が指揮して、二十人の兵士が哨所に勤務してゐたさうである。今の其地は家の影もない、唯偉大なる大平洋の波は、昔を語る如く千波万浪岸を嚙んでゐるし、變らぬものは內淵の洋々たる流れのみである。自分はシスカ（敷香）へ行かなかつたが、きいたゞけを述べて見やう。

敷香は人が棲むことが出來ない

タライカと呼んでゐる地のうち、ポロナイ川の最南に位する支流（チヨルナーレーチカ）の合流点と本流が海に流入する河口との間にシスカ村がある。この地はコルサコフから大きく云へば、百里もへだつてゐるのみならず、氣候も亦惡くヅーエ炭坑附近と同じ樣な所である。ポロナイ川の流域には南部樺太ではめづらしい、ギリヤーク、オロチヨン、トングース等の遊牧的なる幕舍が点在して居る。戶口表には住人七人、男六人、女一人と記入されてゐる。自分は其の地に行つた事がないから他人の日記の一節をのせやう。シスカは村としても、地勢としても面白くない。第一によい飲料水がなくて附近には建築材がない。住民は餘儀なく井戶をほるが、其水が赤味を帶て、野地水の樣になる。村のある所は一帶に砂地であるから、穀物はできない。背後は多く野地である……と云つた土地である。

此の村は冬季アレキサンドルから、コルサコフの往還道路に當つてゐて、必ずこゝに滯在する。千八百六十九年（今より六十年前）頃にはこの地に日本人が居たが、今村のある處に中繼所が建られた。其處は不便な處であるから、妻帶した兵士及囚徒を居住させた。冬季、春季、夏季の終りには激烈なる商戰がある。それは冬季にはトングース人、ヤクート人までも集まり來つて當地の土人と毛皮貨物の賣買、交換をなすからである。春季と夏季の終りには多數の日本人が小船でやつて來

て漁業に從事することもからであるそうだ。其中繼所のある時はこゝはチフメネフスキ港と云つた村をチフメネフカと云つた由で、今でも其名は耳にする事がある。この名は前面の灣をチフメネフ灣をチメネフ灣と云つたことから來たのである。

多來加の戰爭

アイヌ對オロツコの爭鬪

——（今もなほ遺跡がある）——

今はこの物語りもアイヌ仲間には一つの傳說となつて殘つて居るが、傳說としてかたづけるにはあまりに事實が判然としてゐる。大正六年發行した大阪外語學校の校長中目覺氏が樺太土人の話と云ふ、土人研究書の中にも、この一篇を傳說として、簡單ではあるが書き加へてゐる。

更に故山野天海氏は明治四十一年樺太日々新聞紙上に、研究の一部としてこの物語りを記載してゐるが、氏も又簡單に傳說としてかたづけてゐる。既に發生した當初よりあまりに時代が隔てゝゐる爲に文字なき彼等の間には遂に一つの傳說となつて殘つたものと思はれるのである。總じてアイヌの足跡は事實が歷然としてゐるにも拘はらず、遺憾なことにはたゞ文字がないために、次ぎから次へと語り傳へてゐるうちにそれが傳說になつてしまつたものが多々ある。私はこの物語りも史實に殆ど近い處から見て、或ひは史實的ローマンスではないかと思はれたので、依つて、この一篇をこゝに書き加へる事にした。物語りは多來加湖を中心として、アイヌと

オロッコの一大戰爭である。戰爭と云ふより寧ろ民族的爭鬪史である。しかして第一回の襲擊戰にはアイヌが勝ち、第二回の復讐戰にはオロッコが大勝してゐる。この戰ひの主役をつとめてゐるのがオロッコの若き兄弟で、それは恰も曾我兄弟が十八年間苦心慘澹して、遂に親の仇を討ち取つたと云ふ物語りと略々同一である處にこの物語りの興味をそゝらせるものがある。

× × ×

トングース族中で、第一に渡來したのはオロッコ族であつた。彼等は黑龍江を下つて、ワーセを根據地として、樺太に渡りその勢力を南部方面に擴張し始めたのは、今より約三百年前の頃であつた。

當時全島各處に蟠居し絕對的勢力を有してゐたのはアイヌ族であつた。けれどその後に至つて、オロッコ族の威勢は他民族を壓し、戰へば奪り、攻むれば勝つと云ふオロッコ族に對しては、流石のアイヌ族も必死の反抗もむなしく到底敵ではなかつた。然しこのうちで比較的順應性に富むニクブンは、戰つても利あらずと見て親和を結んだが、アイヌは飽くまでも頑强に抵抗を續けたのである。然しいくら戰つても押され〳〵て哀れアイヌは南部の方へと退却せねばならなかつた。茲にこの戰爭の動機がある。

×

多來加湖畔に面した部落に、トクカチと云ふオロッコ人が住んでゐた。彼には一人の妻と十四と

八才になる男子が二人あつた。一家は湖水から魚を、山よりは熊、馴鹿等を獲つては平和な月日を送つてゐたのである。トクカチの住んでゐる部落には殆どオロッコのみで、二里程隔てた地に僅かにアイヌが細々ながら煙を立てゝゐた。酋長も驅逐されつゝあるウタリの姿を見ては內心憤怒に燃えてはゐたものゝ然し力弱い彼等の腕ではどうにもならなかつた。酋長には獨りの美しい娘がゐた。彼女は村でも評判の美人であつた處から、その存在はいつもオロッコやアイヌの若者達に朗らかな話題を投げてゐた。けれど何時結ばれたか娘とトクカチの息子とは人目を避けて熱烈な戀に落ちてゐたのである。二人にとつて幸福な戀だとは云へ、それは丁度日蔭に咲いた花のやうに、青白く成長して行く戀であつた。

いつかしか木の葉も落ち、陰慘な冬が多來加湖にも訪れたのである。ピュー〳〵と悲しい音を立てゝ、吹雪は幾日も幾日も湖水の上を吹き捲くつた。今まで鏡のやうに美しかつた水面もだん〳〵氷つて、やがてそれが次第々々に大きくなつて行つた。土人達は湖水の上を馴鹿や犬橇に乘つて滑つた。

×

或る日オロッコのトクカチは物凄い吹雪を冒して、山から一頭の馴鹿を獲つて歸つた。その夜夕餉の食卓に親子四人はこの馴鹿の肉で舌づゝみを打つたのである。折柄その夜アイヌ部落より一人のアイヌがトクカチの家を訪れた、オロッコは彼等の習慣として客を遇するには、馴鹿の腹の肉が

最善の饗應としてゐるのである。そしてその肉をアイヌに馳走した、アイヌは憤然として座を蹴つた。彼等にとつては馴鹿の腹の肉を食はせることは甚だしく同族を侮辱した意味であつた。大いに憤つたアイヌは直にこの旨を部落民に報じたのである。

愈々オロッコはアイヌをこの部落から追い出す算段をしてゐるのだと誤解し、今にしてオロッコを滅ぼさねば吾等は何時如何なる時に殺されるか判らぬ、直に酋長は全部落に檄を飛ばした。アイヌ達は日頃からオロッコの壓迫に對し機會あらばと時期の至るを待ちかまへてゐた折とて、ときこそ來れりと、手に手に刀物を携へオロッコ部落に一大襲擊を試みたのであつた。その夜は物凄い程までの吹雪であつた、怒り狂つたアイヌ達は歡聲を擧げて吹雪を衝きオロッコ部落を襲擊したのである。不意を打たれたオロッコは周章狼狽して逃げまどうた。そして死にもの狂ひで戰つたが、如何にせん油斷の虚につけこまれては到底アイヌの敵ではなかつた。

鮮血にまみれたオロッコの死骸が累々として横はつた。猛り狂つたアイヌ達は更にトクカチの家も襲つたのである。勿論アイヌの敵ではなかつた、胸に三矢を打たれどす黑い血へどは吐いて哀れトクカチは二人の子を殘して、もがき苦しみつゝ死んで逝つた。妻も又殺された夫の刀にかゝつて敢なく最後を遂げたのである。トクカチは虫の息の中から息子の兄を呼んで「子よ、仇を討て、天の神も、地の神もみそなはさん、たゞ仇を討て」と云つて絶命した。二人の兄弟は漸くのがれて森に陰れた、勝ち誇つたアイヌ達は鬨の聲を擧げて引きあげたのである。かくて多來加湖畔の眞白な

雪も眞紅に彩られ、オロッコ達のむごたらしい死骸が累々として寒風にさらされた。

×

酋長の娘はかくと聞きつたへ狂亂の態でオロッコ宅へかけつけた、總てが彼女にとつては最後だつた、無情にも殺された戀人の親オロッコ夫婦の死骸が土間に横たわつてゐるみので、戀しい男の姿は見られなかつた。彼女は遂に半狂亂になつて、男の名を呼びつゞけ多來加湖沼の水底深く身を沈めたのであつた。

一方逃れた兄は夜になつて、吾家へと歸つて見れば、弟は冷い納屋の中ですや〳〵と寢むつてゐた、無慘にも殺された兩親の骸、そして頑瀨ない弟の姿、それを見たとき、兄オロッコの胸の中は憤然復讐の念が燃え上つた。彼の心には戀人の姿もなかつた、たゞアイヌに對する憎惡と復讐の念であつた。

「さうだ、復讐！」彼の胸には決然として民族的爭鬪心が振ひ起つた。彼の握る拳もいつとはなく汗ばむ程確く握りしめてゐた。

×

かくて幾年は夢の樣に過ぎ去つた、けれどオロッコ兄弟にはそれは永い〳〵年月であつた。復讐の一念は恐ろしい、兄弟は數年間血の出るやうな身の鍛練を圖つたのである。多來加湖にも又一面氷が張りつめる冬が訪れた。或日オロッコ部落よりアイヌ部落をさして、二人の若者をのせた馴鹿

橇が南へ南へと走つてゐた。それは復讐に燃えたオロッコ兄弟の姿だつたのである。折しも空は珍らしく晴れて、輝かしい太陽が銀色の雪上を照してゐた。アイヌ達は湖水の氷を打ち壞しては、魚を釣つてゐた。このとき突如現はれたのはオロッコ兄弟だつた。父の仇、母の仇、吾等の刃を受けて見よ、と獨り狂つた兄弟は刃を振つてアイヌ達に斬りつけた。ふいを打たれたアイヌ達は慘々斬りまくられ、或者は刺され、或者は逃げ損じて破れ目の氷に落ち込んで死んで行つた。

多來加湖上は時ならぬ修羅の巷と化し、鮮血にまみれたアイヌ達の屍はあちこちにと横たわつた。

夜が訪れた。氣味惡い程澄んだ月光がギラ〳〵して湖面の上を照らしてゐた。かち誇つたオロッコ兄弟は脊に月光を浴びて、再びとなかい橇に打ちのり、吾家をさして走らせた。兄弟の眼にはいゝしれぬ喜びの色が輝ひてゐた。かくしてアイヌの勢力は次第々々に衰へて行つた。今でも多來加湖の附近にその遺跡が殘されてゐる。そしてアイヌ達には今もなほ水底から死んで行く苦しい叫び聲がきこえると彼等仲間にほんとうのやうに傳へられてゐるのである。

埋もれた國際美談

日本の軟弱外交——

——高井通譯の功績

◆ コルサコフ領事館駐在の久世領事 ◆

◆ 明治十九年領事當時撮影 ◆

埋もれた國際美談

露國の東方侵略政策に巧みに乘ぜられた、時の開拓使次官黑田清隆は明治八年「樺太は不毛嚴寒の地、徒に政費多く利益少なし」と云ふ理由の賣國的建議から政府の容れる處となり、同年九月遂に千島、樺太の交換條約が諦結され、かくて文化、嘉永以來幾多の志士が血と汗との努力を續けた樺太も空しく、露國の手に渡さねばならなかつた。然しながら、交換當時に於ける邦人漁業者に對する保護政策は實に失態だらけで、交換條件中に加へられた條項も漁業家にとつては不利此上もなく、二百年の永きに亘つて、築きあげた樺太の漁業開拓も、一擧にしてこゝに破壞されるに至つた。

政府は自らの外交失策を平氣で糊塗して、同年邦人漁業家をして樺太を引揚けせしむるべく、これを慫慂した處伊達栖原のみが政府の命に從屬、その他の漁業家は結束して、上京漁業繼續に猛運動を續けた結果、明治九年太政官より營業不苦の布達を見たので、再ぴ漁業者が入り込み、明治十六年までは樺太の一部漁業者は實に隆々たるものであつた。併し一方邦人漁業家の隆盛に比して、露國漁業家の漁業經營は實に幼稚極まるものであつた爲、常に邦人の指導を得なければ經營も出來ぬといふみじめさであつた。その一事が露國人にとつて頗る面白からざる氣分を助成せしめ、遂に明治十六年に至つて、突如露國は漁業稅法を發布して、邦人漁業彈壓の第一矢を向けたのである。

しかしてその取締り規則なるものは所謂プート稅と稱し、殆ど漁業家は立ち行かぬまでの壓制を加へたのであつた。こゝに於て漁業者は死活問題であるとして、當時の薩哈嗹漁業組合代表西村利光及び、通譯鈴木陽之助兩氏を代表上京せしめ、外務當局に對し寢食を忘れて新稅法反對の猛運動を續けたのであつたが、如何にせん、當時の吾が外交は軟弱そのもので、露西亞といへば、役人連もたゞ恐怖より外になかつたので、遂に死力を盡しての陳情運動も水泡に歸したのである。

その後西村氏は明治十六年より二十二年まで、組合長として在任し、二十二年より相原寅之助氏が就任し、更にその後に至つて、薩哈嗹島漁業組合と改稱さるまで、西村氏外內山吉太と云ふ人が就任したが、兎に角西村氏は樺太漁業史上忘れられない恩人である。氏は樺太開拓使主典と云ふ役目であつたが、明治十四年官を辭しシクカで漁業に從事したが、官界出身の氏はよく漁業者の爲に血の出る樣な努力を續けた。

如何に當時の我が外交が軟弱であつたかを知る一端として、明治十九年コルサコフ（楠溪）に駐在する、久世領事より邦人漁業家に對して諭達した漁民の心得書の中に、次の如き憤慨に耐へぬ文句がある。

薩哈嗹島出稼漁民心得書